

(570)

●眞言陀羅尼 眞言にて誦する呪文なり。

●波羅僧揭諦 陀羅尼の句を取りて、腹を立たしめりたるなり。
●念者 男色の關係者を、互ひに念者といふ。女色にているといふが如し。

する、地嘘ならこれと手を取て袖から背中がハア調たんと腫てあるはいの、鬢もそよげた顔も泣た顔じゃ、地こりや如何ぞいものといり、フシわりも、言はず知らず泣居たり、地九兵衛不承な靴子にて、エ、麓相なお梅様、文を封じ違へて、久米様の濡文が法印様のお手に入り、地何が日頃法印様、眞言陀羅尼讀だ目で、くどくは御見思ひひくと、讀で婆羅僧揭諦を立て、ぼじそあかなる顔付、念者坊のゆうへん様は、踏殺すとて熱へさつしやる、一さい起れば一さい起る、お國からは弟の敵じやとやら申して、理屈臭い侍が背打を喰はする、弘法大師御入場八百年以來の、一山の大騒ぎ、飛脚の詮議もあるそうで、私は据つた膳箸も取らずに

(571)

●頼母し 頼母し講のし。數人組合ひ、期限を定め、毎月出金をなすし、其の金を圍にて引き、各自利用して期の盡るに終る。又無違ともいふ。

隠れ居る、其間にお山が荒て來て、天狗殿が鼻を怒らかし、大雨大風霹靂、大事の山を久米之介が、穢したと叩き出されて、フシの體にておはします、地お二人のお蔭で烟草入を落しました、調中に頼母の懸錢七十四文あつたもの、定て狗竇に擱れたでござらう、地正眞の天狗頼母子じやと、フシぶつくさ言ふも道理なり、地チ、其様な事内へ沙汰したもんなや、山は荒ても崩れても、久米様に逢へば嬉しいく、こな様嬉しうないかいの、ちと笑ふて見せて下さんせと、いふても跡先思はれて、フシ泣顔見ゆる不便さよ、親はお梅よお梅よと、門口見遣りて誰じや、調ヤア久米様か、九兵衛是は何んとして、呼に遣たい所へ、よふこそく先

つ内へ、地鼻久米様がござつたぞ、暮たに何故に火は
 灯さぬ、お梅が祝言常とは違ふた、二階は蠟燭庭もお
 上も燈心を搦込んでくわつくとやれと、勇む所へ母
 親は、形風を心得難くや思ひけん、詞何時の間にも九兵
 衛は爰へも寄らず山へ往て、お梅が祝言聞いてお出な
 されたかと、地不審さうなる顔色を、九兵衛見て取り
 突と出、詞久米様のお仕合、まだお聞なされぬか、お
 國の親御御隠居で、跡目をお繼なさるゝ筈で、私も在
 所から、早飛脚に雇はれ打通りに上りました、地日頃
 の念頃暇乞の爲、ちよつとつれて寄てくれ、ゆうへん
 さまも追付其處へとある事、今日からは是七百石の御
 世繼、詞旦那様物は談合、お梅様の御祝言まだ盃なさ

●てれふれ 照り降りの詛り。
 ●じやく馬 上方語。跳る馬を
 いふ。

れぬ先、彼方を變替なされて、久米様へ進ぜられぬい
 か、地私やお爲申します、ゆうへん様も大方其お心と
 見えまして、千貫目持ても商人は、一時の損が知れま
 せぬ、てれふれなしに七百石、すればお前もお手柄、
 雑賀屋の智殿がひんく跳るじやく馬に乗て、娘御
 は金物の乗物に乗らつしやる、サアしやんと打ませふ
 と手を廣げても、イヤ先ア打まい、詞ハテねちみやく
 したそんなら、舅姑御夫婦も 地乗物やじやく馬と、
フン乗せてもいかな乗らばこそ、詞いやく馬は馬連、
 牛は牛連、今日祝言する智殿は、京三條鳥丸美濃屋の
 作右衛門、お梅を欲しいばかりで、年々の殘銀九貫
 五百匁、百六十兩で帳消して、此秋の買入れに、紅の

●鬼に鐵棒 力ある上に武器を得れば、更に強し、大丈夫といふとの聲に用ゆ。

●緞子 緞子はもと支那より渡りし故古渡りといふ。地合は緞子の如く紋のあるものと無きものとあり。

袴の様な小判二百五十兩、先へ預けて置れた、地今宵の物入りし拵へ、此方には一文入れさせず、娘を裸體で請取る聲は、世間にもつとありかねる、何んと九兵衛といひければ、阿イヤ久米之介様も小判の事は請合れぬ、お梅様を裸體でならば、鬼に鐵棒でござりましょ、地コレ阿呆な事は言はずとも、聲がおじやるが出て見よ、はお梅久米様二階へ連まして、新しう出來た寢道具を見せましょ、阿こりや女子共、地肴を鼠に引るゝなと、鼠の用心しながらも、二人二階へ上たるは、フシ是こそ猫に鯨魚なれ、地二階には古渡りの大紋緞子の夜の物、二ツ枕の總付を、妬しさうに久米之介、阿ム、地京の男と、此枕を並べて、地此夜着を被て

●なこそせき 勿來關は陸奥國の名所、こゝは誰もな來そと急き心につけたるのみ。

二人しつぼりと寢さんしよの、ア、ひよんな物見せて、又泣かせて下さるか、フシほろく涙を流しける、阿エ、嫌がらす様な事聞度ふない、京の奴と何んの寢よ、今夜中に連立て走るぞへ、胸を極めて下さんせ、地此夜着蒲團に今の奴が寢くさる筈、エ、嫌らしい煩さやと、踏ちやぐくつて投げほをり、地是は又私かの新しい寢道具、祝ふて寢初て欲しけれど、人が來ふか氣遣ひな、ア、しんきやと、疊みし夜着にもたれ合ひ、誰もなこそせき心、花のお梅に驚の、フシ人來と厭ふわりなさよ、地時に美濃屋の作右衛門、小僕を連れて突と入り、與次右衛門が髻を取て引寄する、女房始め下々も、地是は聊爾と取付くを、寄るなくと撲拂ひ取て

●一升入る袋 古語に「一升入る袋は大海へ入れても一升」といひ又「沙石集」には「一升入るかめはいづくにても一升入るぞ」とあり。

●肩のよいもの 運のよいもの、意人の吉凶を占ふに、其の人の肩によりて占ふ法あれば、肩がよいといへば運のよい事になり、肩がわるいといへば運のわるい事になる。「好色萬金丹」巻一「吉凶は運の如し、二つながら人の肩にあるものから、よき事のみも搜がす、又わるい事ばかりもないもの

引据ゑ、こりや與次右衛門、京の者をはめだてしたら返報は喰はふ用心せい、親代々の花主で二十年此方、二千貫目足らずの商ひに、九貫目の埃を取り、先も見えぬ秋買に、十五貫目の前銀取り、祝言の仕人に四貫目取り、男のある娘を被がせて、さらせて構はぬ工面じやな、此邊ではまだ流行るか、京大阪では其手のもがりは廢つた、サア娘の首を渡すか、二十八貫目戻すか、二ツ一ツの返辭を聞かふ、調ヤ一升入る袋は海川でも一升、かたのよい者の仕合見よ、盃せぬばつかりで二十八貫目拾ふた、惠美須大黒が乗移つた作右衛門をこかそふや、フシ指てくれとぞ罵りける、地與次右衛門眞直者、ぐつと急て、調ヤア京々と姦しい頼げた

●藥を焚く 「假語真覽」「むだ口ないふも、又古道具を買ふに色々わろく云つて直きるを云ふ」といふも其の意に近し。くさすなり。又他をおだてるを焚付るともいふ。

●にち にならる、へちる即ち拗ると同意なるべし。

が過る、七十萬石の下に住む與次右衛門、氣の狭い己らが蔑みとは違はふ、銀返すは易けれど言詰られて戻したと言ふのが口惜い、娘にも疵が付く、サア男のある證據を出せ、何處ぞでわらを焚れて、銀が惜ふなつたか、慮外申した御免あれと、詫言させて其上で、是非に祝言させねば、娘の垢が脱けぬ、地サア證據を出せとにちければ、家内の上下しみ凍り、二階には逃場もなく、死ぬるより外分別の、フシ泣いつ頓ふつ狼狽ゆる、作右衛門押鎮め、證據くくと涼しさうに言やるな、調身は明日立つ合點で、今朝からお山へ上つたが、八ツ時でもあらうか、俄に山が暴れ出して、大雷雨風、一期に覺えぬ怖い事、さる寺へ駈込んで、様子を具さ

に聞たれば、南谷吉祥院の小性久米之介といふ者と、
 雑賀屋のお梅と数年密通して、山を穢した其崇り、そ
 れゆる今追出さるゝと一山が見物、後姿をおれも見た、
 飛脚の様な奴が供して麓へ下つたと、地いふより九兵
 衛もじりくと、門の方へ後退去り、亭主もハツと二
 階を見れば、女房賢くいやくく、聞其分では胡亂
 な此方の人、娘が垢を脱つしやれ、狼狽て娘一人捨さ
 つしやるな、地是々と膝を突けば合點し、チ、飲込ん
 だ、こりや男雷が鳴たとて、此方の娘が不義のある證
 據にはなるまいぞ、地如何でも今宵祝言させ、括りつ
 けて往なさねば、雑賀屋の與次右衛門が町へ顔が出さ
 れぬ、手柄に聲にして見せふ、ヲ、おれが身代見掛て

●垢を脱く

汚名をすくぐの意。

は定て聲に欲からふ、二十八貫目の金では、疵のない
 手入らずの女房が持るゝ、おれが銀で拵へた、夜着蒲
 團から取てくれふと、二階へ上れば與次右衛門、腕捻
 折らふと、引下し、フッ上を下へと掴み合ふ、地久米之
 介は脇指抜て、すはといはゞと絶付、お梅がわつと泣
 く聲も、下には聞かず叩き合ふ、女房中を押分て、此
 方の人から黙らつしやれ、待て下され聲殿ど、彼方を
 拜み此方を拜み、やうく兩方押鎮め、かつばと伏し
 て泣けるが、地都衆とも覺えぬ者の情の無い事や、是
 程まで取結び、サア祝言の場となつて、打破つて此方
 夫婦、世間が立ふか身が立ふか、男を掴ぬ娘子は、誰
 が身の上に何事の、あるまいとも、フッ言難し、地過つ

る事に二親が迷惑するを聞くならば、氣の細い娘なり、先の小性も絶えかねて、死ふとするは必定、留に往るゝ時期でもなし、調必ず死ぬるな死ぬまいぞ、爰は死ぬる場でないぞ、親に歎きをかけるといひ、其身も無い難受ける事、親孝行と思はゞ、必ず死んでくれるなと、先づ斯ういふて留めたらば、よもやとは思へども、若い心の一筋に、恥しいとばかりで、若や死ふか悲しやと、知らせの詞一つをも、皆兩方へ架橋の、二階にも聞取りて、抜たる脇指さすが又、死にもやられず聲立てず、抱き合せてぞ泣居たる、地なふ親は何れも變らねど、母の名汚すも雪ぐのも、娘の育ちの善悪から、調お梅が一期の疵つけば、三十年添ふた此方の人に、

面かい拭ふて添はれもせず、地是非に一旦盃して、男の手柄に何時でも、退去は世の慣ひ、子が立てこそ慾もあれ、屋財家財代なしても、返す物を返やさずに置く與次右衛門でさらくなし、母が此歎きを聞き、お梅が爰へ出るならば、それをしほに和睦して、祝儀を渡して下され、調例へお梅が我を立て、坐敷へ出まといといふとても、先の小性も木竹ではあるまいし、先づ往きやくといやる筈、地それも聞ねば不孝者、子を一人育つるに、生る瀬か死ぬる瀬が七度あるとは稚い内、十七八に丈長伸び、親に夜の目も寝させぬか、憎いものには世話焼ぬ、子を持たらば思ひ知らふぞ、怨しの世の中やと、フシ聲を上てぞ口説きける、地久米

●ひつしよなく 意義明ならず、俗言にやるせなしといふに似たり。

●意地無地 彼れ是れといふに同じ。
●ほからかす 上方訛り、放つて置くも。

●今の詞で千ばい 千ばいは千倍なるべし。今の一言が千萬無量の力あるないふ。

之介も聞取て、後はともあれ親御の心安める爲、詞涙も拭ふて下つたも、地拜むくと勸められ、口惜涙ひつしよなく、梯子とんく踏鳴し、駈下りてこれ母様詞徒らも悪性も、男持ぬ先ならば、いはれぬ構いじや有まいか、地それに意地むちいふ人は、ほからかいて置しやんせ、私がかふして出るのは詫言といふもの、それでも合點ないからは、氣に入らぬであらうまで、田舎育ちの私じやもの、何んの都の目に入ると、フッ身振も拗て見えにけり、聲はお梅に揺られ莞爾と笑ひ、是親父お袋黙らつしやれ、彼が爰へ出てくれて、今の詞で千ばいじや、頭の上で踊ても去ることではござらぬ、地サア寢所へと手を引けば、二親屋内打うるほ

ひ、ハア目出度いく去ながら、先づ爰で盃事、其間にそれくと、氣を付てもがけども、いやく今宵も四ツ過ぎ、臆て夜半寢る間がない、目出度ふ圍の盃と、フッ寢處急ぐ氣毒さ、地平に爰で酒盛なされ、其間に内との者一献酌めや酒を酌め、そりやくめくと蹴いても、何處へ落さん久米之介、夜着引被ぎ身を締め、フッ生たる心地はなかりけり、地聲は蒲團にのし上りヤア誰ぞ寢たやら暖かな、地さらば此夜着を着て盃せふと、久米之介が臥たる夜着を取らんとす、ア、是々此方様ばかり寢やうでの、とんと二人が一度に寢る、盃済むまでいかな事、夜着に手をもかけさせぬと、もたれかよりし夜着の袖、足を擦り手をして、フッつま

に力を付けければ、地一つに寝やうは忝ない、銚子早ふと呼ぶ内に、夜中の鐘も鳴渡る、下には夫婦手に汗握り、九兵衛其外小隅へ寄り、供の者にも酒盛で、酔ふた時分に臺處の火を消して闇にせい、二階の酒のしゆんだ頃、祝儀の石を打込んで、騒ぐ拍子に蠟燭を踏こかし、どやくや紛れに久米殿の、手を引き門へ脱かそふぞ、仕損へはお梅が首がないぞ拔るなと、謀し合して酒肴、下では下人盛潰し、二階を母の酌人は、チクリ怪我あらせじの、フン氣遣ひや、地作右は母に辭儀もなく、さいつさされつ辭儀作法、大盃四五杯引かけなふお袋、問姑に酌とらせ無益しいか知らねども、かふ召さつたがよい筈、作右衛門程の聲は慮外ながら取憎い、

久米之介は若衆で前髪はあらふが、おれが様に小判の前髪は有まい、彼の様な奴らが娘子供を唆し、京大阪にもある事、大方果は心中、ホ、嫌な事、お梅は命拾らやる、親御は娘拾らやる、地おれは盃ひらはふと又三杯引續け、サア寝ませう、お袋あちへ往なしやれと、夜着引立てんとする所へ、大石をはたと打つ、是はと驚く頭の上、障子雨戸を打破り、大石小石隙間なく、はらりくと、三盃投げければ、地お梅は爰を大事ぞと、久米之介に抱付、作右衛門は蹠跟く足、お梅は危ない夜着被ぎやと立寄れば、母親燭臺踏こかし、問やれ暗いは火を灯せと、言ふ聲に與次右衛門、下の火残らず吹消して、フン常闇の夜となりにけり、地母は這寄

(786)

り、久米之介が手を取て引出す、喫驚するも夢心地、お梅は久米が帯を取り、付いて出るも闇の夜の、母は斯とも知らばこそ、作右衛門度を失ひ、聞お梅は何處に、イヤ爰に居まする、暗がりて怪我しやんな、お袋は何處へぞ、火を取にでかなござんしよ、こな様勝手知らずじや、動かすにござんせ、地私も爰に居ますると、聲が残れば母親も、一人と思ひ連て出る、お梅は跡も恐ろしく、母に知らせぬ足音をば、火を踏む如く爪立て、顛ひく沓脱まで忍出、母久米之介に叫きて、聞此方は命の亡い人なれど、お梅が歎く不便さに、こち夫婦が了簡で今宵の命を助ける、お梅は男定れば、思ひきらねばならぬぞや、是はお梅が呑んだ盃、是を

(587)

●幻しや定業の限りとは 熊野比
丘尼などの歌ひしものなるべし。

形身の縁切と、懐に入れければ、二人は死ぬる覺悟の上、心の中の暇請ひ、顔は見られぬ黒闇に、ま一度聲をと躊躇へば、遅いくと氣を急きて、急ぐは我子の死を急ぐ、産出すも母、死なすも母、生死二ツの門口を、明て出行く先も闇、跡も子ゆるるの闇の夜に、迷ふ親こそ 三重 悲しけれ

衆の介お梅道行

幻しや、定業の、限りとは、いかに如何なる娑婆ならん、世は何の譬ぞや、逢初て早三歳、影ばかりの契にてつまは野中の一ツ井戸、名は後の世の紀念かや、残す念紀は、親の爲、我はそ様の前髪、長き來世

(588)

六道 *

●如月 陰曆二月の異稱。

●玉川 所謂高野の玉川にして、六の玉川の一なり。一の橋を渡りて奥の院に到る路の左方にあり。俗に毒水といひ傳ふ。大師の歌に「忘れても波みやしつらむ旅人の高野の奥の玉川の水」とあるより、附合したる説なるべし。

●縛の繩 不動尊の持てる繩を縛の繩といふ。情のほだしに縛られるといふ事を、不動坂にかけていひたるなり。

も私が此の直さぬ額は此儘で、見たり見せたり六道の、
フシチクリ 辻の街は多くとも、フシはぐれまいぞと夕月は、
はや入果て更渡る、まだ如月の八重霞、隠れ忍ぶによ
けれども、顔が見憎の朧夜や、二つ 一よい事嵐
吹く、木の下露の玉川の、毒の雫も降るならば、身に
疵付けず死たやと、顔と顔を摺寄て、翻す涙は自ら
互ひの口に傳へ入り、フシ末期の水となりけらし、刃を
急ぐ我命、末短夜の春の霜、浦山しやな朝まで、消え
残るかと白妙に、チクリ里の夜鍋も時過て、干も神谷の
宿外れ、生れ在所の名残さへ、フシ親より殿を思ふぞや、
我はそもじの親御の恩、戀と思ひに縛られて、情の羈
絆縛の繩、不動坂にもさし懸り、死出の山路を越ゆる

(589)

●刈萱 崇徳天皇の御宇、筑紫の守護職に、加藤左衛門繁氏といふ士あり、仁心深く且文學にも疎からざりしが、仁平三年猶生の末庭前に酒宴の折、花の苔の盃中に落るを見て、老少不定の理を悟り、出家遁世して高野山に登り、其後數年を経て、筑紫に残し置きたる、妻の千里と其の子石堂丸と尋ね來りしが、母の千里は病を経て身まかり、石堂丸は山に登り、父とおぼしき僧に出會するも父子遂に名乗り明さずして、共に佛道に入る。刈萱殿は刈萱堂のこと。

●兒が瀧 花折坂の下にあり、昔し兒の捨身せし所なりと。

●天野口 大門より天野神社に到る道にいふ。

●佛の母 摩那夫人をいふ。

●れど岩 大門口道の傍にあり。

●五月雨ほど云々 當時の流行歌。

かと、心細しや外は谷、こゝ夏川と引留め問へば、
爰は古への刈萱殿の、しるし繁りし春の草、クトキ問ふ
て語つたあぢきなや、彼の刈萱弓取の、猛き心や梓弓、
彌生の空の月の前、櫻が下の盃に、チクリ開いた花は散
りもせて、花の苔みに身を捨て、フシ無常の夜語身の上
に、十九十八一盛り、今宵散り行く初櫻、兒が瀧とぞ
フシ涙ぐむ、彼れへ越ゆれば天野口、去年母様と連立
ちて、フシ拜みし事の忘れず、哀れ佛の御母も、女の
罪のねち岩や、それさへあるに我身の科は、歌 五月
雨ほど戀慕はれてつひにな、秋田のよおとし水、地山
は眠りて物言はず、谷の流れよ、フシ聲立て、地に語
るな此姿、クトキ私が心をこなさんに、隠す事とて持ね

●奥の院 御唐一に禪定が洞といふ。大師入定の所なり。大師は承和二年三月廿一日寅の刻此の所に入定。

●微妙の橋 大師唐の正面に架せる小橋をいふ。此の橋板三十七枚は金剛界會の三十七尊に表し、裏面に其の種子を書す。故に罪ある者は渡るを得ずといひ傳ふ。

●蛇柳 奥の院路の右溪流の畔にあり、俗に大師の化度により、蛇得脱して柳となると。或は遠くより見れば、其の狀大蛇の如く見ゆるより名付くと。

●舍利 佛骨の事。
●花折坂 不動坂口女人堂の下にあり、參詣の人此の所にて花を折り大師に手向く、故に花折坂といふ。

ども、頼む佛の御名問へば、我をば外の不動様、二親よりも捨難き、嗚や若木の花の兒、歎き怨みの數々も、二人が上に罰受くる、天竺の山嵐、締た肌にしみぐくくと、サア悲しる、フン最愛しといふも今の間の、冥途の苦限覺束な、此世からさへ嫌はれて、深く心を奥の院、渡らぬ先に渡られぬ、微妙の橋の危さも、後世のみせしめ蛇柳や、鬼が千疋責ふぞ、フン責られつ、さいなまるよと離れまい、離すまいぞと取かはす、袂の涙手には珠數、頼めや頼め一筋に、一心頂禮萬德圓滿、釋迦如來信心舍利、フン舍利く佛になるとても、又は三途に迷ふとも、一ツ回向の水汲めや、手向の梅の花折坂、辿り超ればあか月の、五障の雲に埋もる、女

●五障 佛説に女人は身に具せる五種の障あり、即ち一には梵天王、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身となるを得ずと。

●女人堂 不動坂口の女人堂をいふ。諸國より參詣する女人の投宿する所にして、是より奥へは入込むを得ず。登山七口いづれも女人堂ありといへど、不動坂口の堂最も大なり。

●一向 ひたすらと同じ。

人堂ほぞ 三重着にける、若い心の一向に、地死んで來世でくと、思ふ心のがつくりと、サア着ました嬉しやと、フン勇むは跡の歎きなり、地堂の内には我より先に泊りし女中の目を覺し、申しくと呼かへる、あといふのも怯氣立ち、身を抱合て居たりしが、調イヤお氣遣の者ではなし、私は播磨の飾磨にて、成田武右衛門娘さつと申す者、南谷の吉祥院に、久米之介と申す弟を、地尋ねて今日の暮方、下人共を登せ訪はせても、ありとも無しとも知れ難く、坂の麓神谷の宿を尋ねよといふ人もあり、皆様所のお衆か、若し御存じもあるまいかと、他人に見做す姉弟、フン後世の闇路も知られたり、弟は骨肉恩愛の、涙にくれて應へもなく、

(592)

●ちやうせり 定説なるべし。

●萬年草 又千年松といふ。御座の邊に生ずる苔の類なり。俗に旅行の人の安否を占ふに、此の草を鹽水に投じ葉開けば、其の人無事にし、葉閉じれば、其の時不吉なりといひ傳ふ。

暫し躊躇ひ居たりしが、詞久米之介とは聞たる人、昨日の晝より俄に大病引受て、今宵限りの命なりと申せしが、地夜明なば生死のちやうせつかくれあるまじと、涙をかくす聲付は、姉はそれとも猶知らず、詞さらばこそ思ひ當つたれ、此お山の萬年草は、人の命の生死を示し給ふと申すゆゑ、餘りの事の訝しさ、守りに入れし萬年草を彼の谷川の水に付け、地久米之介と心ざし、半時ばかり浸しても、次第に枯れて萎みしが、弟が命あるまいとの大師様のお告か、遙く尋ね来て、昨日にも着くならば、せめて死目に逢ふもの、男の身ならば一山を、駈廻つても逢ふもの、女と生れし悪業は、浅ましや悲しやと、フン聲を上てぞ泣きければ、

(593)

●お骨 大師の御記に、我山に贈る所の亡者の舍利は、我毎日三密の加持力なして、先づ安養實刹に送る、當來は必ず我山に慈尊説法の菩薩たるべしとあり。故に昔しより亡者の骨を、此の山に納むるの習慣あり。

地夫婦も共に伏沈み、お梅涙の隙よりも、詞親御様をもお誘ひか、但し姉様ばかりか、地なふ其事よ、父様が去年の冬から煩ひて、此二月の朔日に、六十九にて御臨終、明る二日に烟となし、今日七日の弔ひを、兄弟一所に拜まん、此お骨を持って上りしに、弟も同じ骨となし、すこく歸つて母様に、何と申さん定めなの浮世やと、フン又さめぐと泣きければ、地久米之介は我親の、骨と聞くより氣も亂れ、お梅は一目も見ぬ鼻縁といはふか因果といはふか、心に含み目に漏るゝ、涙を袖にせきかねて、わつと絶入るばかりなり、地側に伏たる供の下女、あれ申し、詞七ツの鐘が鳴まする、善か悪か、夜が明たら知れませふ、地ア、此方

●他生の縁

*

●血の由縁

血を分けたものなれはしさいふ。

は草臥れて、何が善やら欠伸やら、フンふらく眠る心なき、地ア、それもそふ、御用あるも存せず、引留めて長物語、是も他生の御縁でこそ、若し久米が事を聞付けなされなば、お知らせを頼みます、何れもに別るも、殊更名残惜しうて久米之介が臨終の、暇乞をする様で、心細ふて悲しやと、物が知らする血の由縁、涙すゝむるばかりにて、言はず知らせず別れしは、チクリ本意なく、三重も亦哀れなり、地堂の小蔭に身を潜め、片時も娑婆に居る内は、見るも聞くも皆罪障、夜明も近づく此上に、如何なる苦しみ耻をか見ん、いざ死なふと囁けば、阿早ふ死に度ふござんする、去ながらこな様は、餘所ながらも姉御に逢ひ、親御のお骨の側に

●おんあぼきや
眞言陀羅尼の詞。
陀羅尼は眞言にて唱ふる呪文なり

て、浦山しい最期じやが、地私は父様母様の、悲い中にも不孝者と、叱られうかと氣に懸り、是が迷ひと成りますすと、又泣出せば是々、阿宵の母御の下されし盃は爰にあり、地手に觸れられし物といひ、志の籠つた形身は是ぞと取出す、ア、有難い、丈長の伸た私を、親の心で何時も童と思ふて抱て寝て下さんした、其心で死ましよと、盃肌さつぎに手を合せ、刃を待たる其顔、チ、奇麗なく、そなたは母の形身を持ち、地我は父の骨の側、夫婦親子一蓮の、示しの時刻延されず、只今ぞと脇指抜き、胸に押當おんあぼきや、べいろしやのまかもたら、まにはんどまじんばらはりはりたや、うんと突込む切先の、膽にあたれば反返り、はりたやう

(596)

んと刳通す、阿囁の息も消えくと、反つゝ返しつ、
 苦しむ聲、地姉主従は驚きて、走り寄て南無三寶、
 人殺しくよと呼はれども、山中夜中聞く人も、フシ泣
 て麓へ走りけり、地久米之介身を隠し、立歸れば骨桶
 に、櫛を添へて残したり、押戴き三拜し、分て賜はる
 骨肉を、一つに返す阿字本不生、阿字の一刀これなり
 と、咽にくつと突立て、死骸の上に法の花、梅と枕を
 並へける、地水火風の風は山、水は谷水土は又、土砂
 の功德の眞言秘密、善男子善女人堂心中斯とぞ聞えけ
 る

●阿字 阿字は經文に「一切法教の本」とあり、即ち今死して其本に歸り菩提に入るをいふ。

夕霧阿波鳴渡

解題

夕霧の事蹟は新町の青樓志「落標」に出たり。今其の大路を記せば、京都島原の遊女屋に桔梗屋意得、扇屋四郎兵衛なるものあり、寛文十二年故ありて島原を去り、大阪新町に移轉したるが、夕霧は扇屋の抱へにて當時生家と共に新町に移植せられたる名花なり。夕霧島原に在りて既に芳名高し、されは大阪にては日々彼の來るを待構へたりしが、これを見るに及びて其の才色の勝れたるに益々評判高く全盛を極めたりといふ。されど程なく病に罹り、延寶六年正月六日身まかりしかば、われ人惜まぬものなく、翌七日下寺町淨國寺に葬り、花岳芳春信女と號す。(本巻の口繪に出したる夕霧の墓是なり。表面には花岳芳春信女、右側に鬼貫が「この墓は柳なくてもあはれなり」の句を彫り、裏に延寶六戊午正月六日俗名あふぎや夕霧と記す、但し今の墓は再建なる由夕霧歿して世の愛惜深かりしかば、同年二月三日より道

(597)

頓堀荒木與次兵衛座にて「夕霧名残正月」と外題し、夕霧伊右衛門の狂言を仕組み、阪田藤十郎は伊左衛門に扮し、夕霧は霧浪千壽なりき、傾城買の仕打絶妙との評判にて大當りなりしかば、藤十郎は同年中に此の狂言を繰返すこと四回、藤十郎の當り藝として名高く、生涯のうち十八回演じたりといふ。淨るりにて夕霧の事を仕組みたるは、夕霧歿後九年即ち貞享三年に「三世相」「遊君三世相」とも云あり。然るに阪田藤十郎は寶永六年十一月朔日歿し、これ又世に惜まるゝこと深く、翌年は恰も夕霧が三十三回忌にも相當しければ、門左衛門は名優と遊君との追善の爲めに「阿波鳴渡」を新作したるものゝ如し。竹本座上場は寶永七年七月廿四日にして、作者五十八歳の時なり。

さて前の「名残の正月」「三世相」ともに、作名を記さゞれども、近松門左衛門の若書きなりといふ。「名残の正月」は予未だこれを見ざれども、此の狂言に夕霧の客として伊左衛門なる人ありといへば、「阿波鳴渡」は大體「名残の正月」の脚色に據りたるものなるべく、筋の上には「三世相」に似たる所少なく、唯「三世相」にて夕霧が狛野左京に深く契りて春姫を産みたる事を、「阿波鳴渡」に平岡左近源之助となし、其の實源之助

は伊左衛門の子なるを左近は我子に押し付けられ、葛藤を生ずる事に改作したるなり。但し伊左衛門の事は跡形もなき事にて、平岡左近なる阿波大盡には多少據所ありといふ。そは夕霧の客のうち大阪に阿波屋某とて富家ありて、夕霧と深く馴染み、病中は勿論歿後までもまめやかに世話したりといふ。又此の阿波大盡の常に夕霧を揚げて遊びしは、九軒町揚屋吉田屋喜左衛門方なりしより、是等は殆ど事實の儘を作りしなり。

上の巻夕霧炬燵の段は、一中節の「助六心中」と異曲同工の趣向にして、唯人名の相違せるのみ。されば「助六心中」を亦近松の作といふ人もあり。而して二種の前後については「助六心中」を前とすべく、「阿波鳴渡」は後なり。そは元祿十七年板の「松の落葉」に「助六心中」は既に出でをればなり。されば炬燵の段は助六の趣向を取りしものにて、「助六心中」の趣向若し「名残の正月」より來りしものとすれば、近松は再び其の趣向を繰返したるなり。

又「落標」に夕霧の文といふもの今なほ扇屋に傳はれりとして、其の文を掲げたるが、後「夕霧庵文章」の作は、全く此の文によりて外題を命じたるものなるべし。其の他

「夕霧篋の袂」浪花文章夕霧塚「浴標浪花詠」などの改作あり。

●年の内に春は來にけり云々 夕霧の受年は延寶六年正月六日にして、淨瑠璃の發端は、其の前年、即ち延寶五年十二月餅搗の事なり此の十二月、年内に春の立ちしと或は事實なるべく、後平岡左近旅宿の場にて、喜左衛門の詞に、押請めての節分」とあり、それゆゑ作者は「古今集」にある、在原元方の「年の内に春は來にけり一年を、こそとやいはん今年とやいはん」の歌を引いて書出しとはなしたるなり。一年を一日にもじり一轉して餅搗の叙景に入る、縦横自在の筆勢。

●餅花 餅搗の時に、餅を小玉に取り、これを柳の枝に着け、兒女の遊びとするをいふ。
●餅搗 三都とも麻の紋目にして年中行事の一なり。

夕霧阿波鳴渡

近松門左衛門作

上之卷

●年の内に春は來にけり、一白に、餅花開く搗餅の、賑々はしや九軒町、嘉例の日取吉田屋の、フツ庭の竈は難波津の、地歌の心よ蒸籠の湯氣の大杵、おろせの長兵衛が大汗で、やあるい、中居の萬が白取の、さツ、やあるい、さツ、やあるいさツ、地さツさ搗けく、ハツアきやりで搗やれな、先惠方棚神の棚鏡餅取るく遣手衆の、顔にとり粉の面白いとてよねしゆの笑ひ、禿が手折る柳の枝の、春も近づく、年も近づく、臆

て廊も谷の戸も、出て初音の鶯の、地はねづくろひの君もあり

●組波津の歌 「古今集」の序にある「組波津に咲く此花冬籠、今を春邊と咲くや此花」の歌の心なれば、冬籠といふ事を利かせたるものか。【高註】には、次の文句に非籠の煙といふ事あれば、むしろ「高き屋に登りて見れば煙たつ」の歌をいへるなるべしと、一説なり。 ●九軒町 ●吉田屋 吉田屋算左衛門は「みなつくし」にも出て、有名な揚屋なり。 ●おろせの長兵衛の大汗 大家の餅搗は凡て出入の者手傳ひに来る、されば吉田屋にては出入の駕昇長兵衛が手傳ひに来り、餅を搗きしと見えたり。 ●やあゐい 餅を搗く時の掛聲なり。 ●白取り 手返しのこと。餅を搗くには一杵毎に、手水を施し返されば、餅が杵に粘着して自由ならず、此の手返しをするは大根女の業なれば、仲居の役目となり。 ●木遣り 材木又は炭石などを運ぶ時、勢を附ける爲に踏ふ音頭なり。其の起りは昔し述仁寺の無量上人が寺院造営の木材を曳く人夫等に、己が名を呼ばしめ音頭として勸まされたに始るといふ。されば始めは「えいさいさい」と誦ひしものならんが、後には木遣り音頭といへば、「えいさいさいさいさい」と誦ふ。餅搗などにも木遣り音頭で威勢を附けしものならん。 ●悪方棚 悪方の前にあり、これは歳徳神を祭れる神棚なり。 ●鏡 鏡餅のこと。 ●とり粉 搗餅の粘着を防がん爲めに、米の粉を敷き取披ふ。給温純に粉を用ゆると同じ。これを取り粉といふ。 ●柳の枝 餅花を着ける柳枝なり。 ●谷の戸 前に「春も近づく、年も近づく」句あれば、「こゝも古今集」の「鶯の谷より出る聲なくば」の歌を取りしものなるべし。「はねづくろひの君もあり」とは世に時めくを、羽振がよいなどいふに同じく、正月の三日の約束も出来、年が明ければ新調の衣服を着飾りて、全盛を誇らんとする遊女もありとの意。



りや木 (紋所會圖才三淡和)

正月買の セツキノロ たいく盡、太夫様より附届け、門を賣る聲山草や、ちよつと祝ひましよ、裏白、ゆづり

輕き 道中や、暖簾くゞるも力なく、今日は目



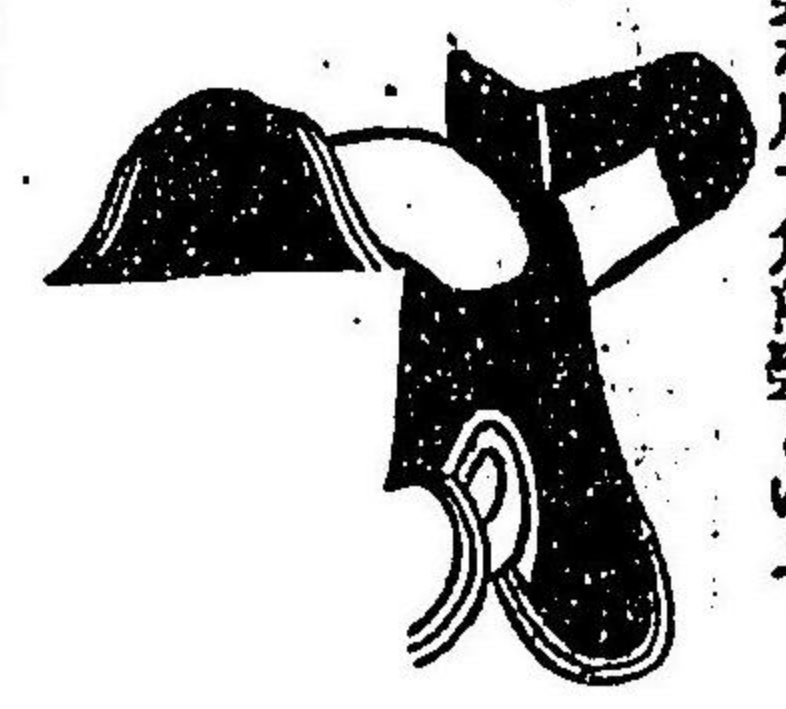
(載所葉圖製劇繪人)候季節

●金山 金箱といふに同じ。夕霧は全盛並ぶしもなく、實に扇屋の幸福を祝ふ心にて、歳末當込みの乞食の一種なり。

葉、こまめでござんせの春永に、彌しも替らぬ御見まで、逢瀬を契る餅は杵、ついて離れぬお客を祝ひ、白へ入れます、ますく全盛、座敷は善哉庭には節季候、こりや又目出たい揚屋の餅搗、紋日の長持、お客に太鼓持、こりや又賑々女郎衆に鎗持、お家は金持代々福々、松吹く吹く松風や、松賣る聲こそ三重戀風の、其扇屋の金山と、名は立のぼる夕霧や、秋の末よりぶらくと、寝たり起たり面瘦て、薬も日數ふる雪の、重らぬ先の養生と、勤めも心まよなれど、深きよしみの吉田屋は、足元

●金箱なり。扇屋は所仰くつわなり。
 ●しんごい
 ●水仙清き姿。夕霧が病中の風情を形容したるなり。

●格子 「異本洞房掛圖」に、格子は京都の天神に同じ、大格子の内やうに格子といふ名を附けたりと。但しこゝは女郎屋のとなり、六軒町のさゝ格子に同じ。
 ●頭痛八百 頭痛鉢巻のしじりや。
 ●角前髪 當時少年のとりたる前髪を凡て角前髪といふ。



髪前角 (戦所兼圖家訓川女)

●けしもない 毛程もない又毛頭ないなどいふに同じ。少しもない

出度ふござんす、ア、しんどうやと腰打懸け、我身を横に投入れの、水仙清き姿なり、地喜左衛門機嫌能く是はく太夫様、御氣色も好いかして、聞た程瘦もなされず、お顔色もずんと好い、先今日は嘉例の餅搗、格子へお出なされてより去年の今日まで、伊左衛門様とお兩人、一度もお外れなされぬに、今年の餅搗ばかり、伊左衛門様は流浪遊ばす、お前は御病氣、嘉例を外す處、此喜左衛門頭痛八百、ちよつとなりとも呼ばしたいと願ふ折柄、前今日のお客は四國のお侍、頭巾で頭は見えねども、角前髪のお小姓らしい、地其嫖致のよさおほこさ、道頓堀の若衆方女方、ひつさらへてもけも無い事、四國西國隠れない夕霧といふ太夫に近

●氣合に構ふ 病氣に障るの意。

●善哉祝ふ 正月雑煮を祝ふといふに同じ。餅搗の時には、水取りとて搗搗げの餅を、小豆餡又は黄粉にまろめて食する習慣の所もあり。こゝは善哉にして祝ひしなり。

●候べく候 行き成り次第にして戻くを、候べく候にしておけといふ。

付になりたいたとて、わざく大阪で御越年、お氣合に構ふとて、初対面はお勤めなされぬも存じながら、呼に進めた、有繫お馴染の喜左衛門、否應なしのお出、身祝ひと申し、どつといふた餅搗、地かゝも尻餅搗て悦びます、これ杉沖之丞、中の間へ往て善哉祝や、地此處は冷えます太夫様、ソッ先お座敷へといひければ、ア、私が氣色も好いが好いには立ねども、伊左衛門様と二人連、一度もかゝさぬ今日の日なれば、命の内にちよつと来て伊左衛門様に逢ふ心、こなさん達の顔見たいと思ふ折節、呼に來たを幸ひに此處までは來ました、座敷は氣儘に勤める、さう思ふて下んせ、何がさて御氣任せ、如何なりとも候べく候にやらしやんせと

●紙子の火打膝の皿 (高社) 破れ膝の皿より火が降るなどの意にや
「御師名代紙子」に「今者くゆる破れ紙子の古火打うたれど向座から火がより云々」と見ゆ。

●食出し録 積及び柄の上へ僅かに食出したる録の事。

●かみさぶ 神社、古びて奇しく姿を形容して、かみさび又はかうくしなどいへり。たいじん(太神)のなれの果のみすばらしき姿をこれに譬へたるなり。

●風の神が風し 風の神は世の中に風邪の流行する時風の神を追ひ拂ふとて面をひつき太鼓を打て来る物質の一種なり。鳥威しは案山子の事。いづれも見すばらしき姿の形容なり。

●れだれしの ゆすりの事。

チクリ 座敷へこそは出しけれ、フシ冬編笠も垢張りて、紙衣の火打、膝の皿、風吹き凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとすれど古への、花は嵐の願に、今日の寒さを喰しはる、食出し鰐も神さびて、鐘詰りし師走の果、胡散らしく吉田屋の内を覗いて、喜左衛門宿にか、ちよつと逢ふ喜左衛門く、地と鼻に扇の大柄なり、地男共口々に、ヤア彼奴は何者じや、風の神か、鳥威しの様なざまで、何んじや喜左衛門に逢ふ、百貫目も遣ふ大盡の言ふ様な、棒まかれなといひければ、地ヲ、百貫目がそれ程貴い物でもない、喜左衛門といふへき者で云ふ程に逢せてくれい、地どりや逢せてくれう、斯んな目に逢せてくれうと、竹箒持てかゝるを、喜左衛門飛下り、ね

●夢か七ツか 夢か現かのしじり。但し七ツといふと解しがたし。

●馬町 方廣寺(大佛)の北、しる谷越に到るの道筋淋しき所なり。

●道塞

●師走坊主師走浪人 「妻やつしく、便りなげなるものをさして師走坊主師走浪人といふ謎の昔ありし故に、くつつけて書きたるなり」(用捨箱)

●鏡 道手の事。但しこゝは昔し行装の美々しきを、鏡長刀の供揃ひの歴々比し、其の鏡を道手に掛かけ、今は零落の我には迎ふる鏡手もなしとの迷惘なり。

●長刀草履 古草履の心の縦横切れたる時は、草履透み其の形なから長刀の如く反る故に、長刀と受けたるなり。いはいはれぬ、よせばよいといふに同じ。

だれ者か知らぬ粗相をすな、どなたでござると笠を覗いて、ヤア伊左衛門様か、何んと喜左、これは夢か七つか、地さてお久しや懐しや、京大佛の馬町に御逼塞と承る、霧様よりは數通の御状、飛脚も二三度奈良大津まで尋させ、只た今もお噂先お馴染の小座敷で、二年積るお物語、いざお通りと袖引けば、地ア、紙衣障りが荒い、これ引けば破れる摺めは跡に師走坊主師走浪人、昔は鎗が迎ひに出る、地今はやうく長刀の草履を脱て編笠の、フシ中の座敷に通ししが、地お寒からうと喜左衛門、縮緬に紅絹裏の小袖をふはと打かくる、調ア、是はいはれぬ、寒晒の伊左衛門少しも苦しからねども、志を着致すと、地戴いて着る有様、喜

●寒風 寒風に吹き晒されぬるに
いふ。小しも寒くはなしと眞惜な
なり。

●浮世じや 喜左衛門、伊左衛門
が形及び其の詞使ひの丁寧なるに
感慨無量、ア、變れば變るものと
なり。

●蜀江の錦 支那蜀江より産する
錦の名。上品なるを以て殊に譽げ
たるものなるべし。

●七百貫目 銀目なり。金に積り
て一萬六百餘兩に當る。

●ぎくともせぬ 動ぜぬ形。

●蓬萊 蓬萊師のも。新年三方の
盤に、米麩鮑栗昆布權腰後など
を盛りたるもの。元來は取者なれ
ども、多くは飾物とせり。

左衛門つくく見て、エ、浮世じや、藤屋の伊左衛門
様に、此吉田屋の喜左衛門が着せ參らする小袖、假へ
蜀江の錦でも戴いて召ませうか、ほんに涙がこぼれま
すと目を擦るを見て、いや是れ喜左、此紙衣の仕合
さらく無念と存せぬ惣じて重たい俵物材木でも、牛
馬が負ふは珍しからぬ、犬か猫が負ふたらば、是はと
人が手を打ふ、我らも其通り、紙子の拾一枚で、七百
貫目の借錢負ふて、ぎくともせぬは恐らく藤屋の伊左
衛門、日本に一人の男、此身が金じゃそれで冷て堪ら
ぬ、地ヤアウ此身が金とは忝ない、喜左衛門餅搗に大
きな金がお入りなされた、これ喚、まだ蓬萊は飾らね
ども、先正月の心、三寶飾つて持ておじやとて入りけ

●穂長 上方にて喜白のを穂長
といふ。

れば、内儀はあつとゆづり葉に、穂長折敷く橙、柑子、
蜜柑や何や榧、かち栗、お床しやく、久振で御無事
なお顔、お嬉し様やと出ければ、伊左衛門とかうの挨拶
涙ぐみ、夫婦の衆が念頃に、蓬萊とまで氣が付け
ども、夕とも霧とも言出さぬ、仄に聞けば夕霧が、身
が事を氣病にして、命あぶなしと聞及びしが、いかふ
重いか、但無常の夕霧と、消失せてしまふたか、地歎
きをかけまいとて言出さぬか、誓文で泣くまい語つて
聞しや、泣ぬくと言ふ聲も、フシ氣遣ふ涙に濁りけり、
いやく是はお道理、霧様の御氣色、秋の頃は散々で
勤もお引きなされしが、寒に入て少御快氣、地則ち阿
波のお侍、正月もなさる、筈で、今日是にと言ひも果

●迦陵頻 迦陵頻伽の昇。佛説に極樂に居る不死の鳥にして、面は



(載所葉圖蒙訓) 頻 陵 迦

美女の如く、其の聲最も美なりといふ。されば最も稀なる例に、迦陵頻伽の雄鳥といひしなり。傾城の城と三十日の月、もしくは那の角などいふに同じ。

ぬに伊左衛門、聞ヤア〜それは眞實か、地はて嘘か眞か隣坐敷、覗いて御覽なされませ、伊左衛門はつとせいたる顔色にて、しばし詞もなかりしが、聞なふ内儀、天地開け始りて、誠ある傾城と迦陵頻の雄鳥は繪に書たも見たものない、地惣嫁の様な傾城奴に微塵も心は残らねども、調知ての通り渠奴が腹から出た身が悴、而も男子で明れば七ツ、元の遣手玉が才覺て里に遣たとやら、今日來たは其悴が事に付て來たれども、地定めて里に遣たも偽り捨殺してかな捨つらん、阿波の侍といふは合點、此前我と張合た、阿波の大盡平といふ者、つらく思へば、傾城買より紙屑買が増じや、金出して此方へ取る物は狀文ばかり、七百貫目が紙

●慳貪

屑では、富士の山の張拔も樂な事、仕合の悪い時は何で損をせうも知らぬ、無用の涙で紙衣の袖濡した、繼目が離れぬ先に罷り歸ると立んとす、ア、餘まり御短氣奥のお客は平様ではござりませぬ、いや〜平でも壺でも、此方仕度能うござる、地と立上る、それはお前の慳貪と申もの、先夕霧様に逢せましょ、いや迎も慳貪なら夕霧より蕎麥切に致さうと、拗ね廻る其中に、奥座敷より手を叩く、聞あれ禿衆は何處にぞと地言ひつゝ出る内儀に連れて、襖の蔭より差覗けば、ふたり馴れにし床柱、フン凭れ懸るも形見ぞと、地忘れもやらぬ物越は、慳に彼の人、何がなしほに座を立て、逢たや見たやと心も急ぎ、反向て向ふ客の顔、左も大名の

●小姓立 小姓あがりなり。禿あがりの女郎を禿ぢちといふ類。
 ●はつはの鮫箱 「高註」はつば大つちのみさしなどともいふ。はつばは美しくして光るなほ。鮫箱は年若きもの、綺麗にしたる者。
 ●炮烙頭巾

●紙花七九寸 「二百千軒」に曰く「遊所にて花を打つとて紙を出す。これを俗に紙花といふ昔よりある事なり。紙花の價定りなし、客々の感勢によりて多少あり」と。ト莖の狂歌に「下さるゝ紙ももともりよしの紙、花にえにしのありとおもへば」紙花は延紙にて其の寸法によりては價の定りありといふ。
 ●なめ 無禮のとなれど、麻詞は聊か其の意味を異にす。「俳諧通言」に「大なめしとありて、物な知つた顔にてなめふり、意氣過ぎた客を云ふなり」とあり。

小姓立、風よしの衣装付きばつばの鮫箱象眼鏝、若紫の炮烙頭巾、懷中より香包、名木火鉢に薰らせ、かゝ是へ來やれ、身なんどが様な奉公人は、殿の御前に相詰め、たまさか遊興所へ參るも氣晴しといふ内に、第一は夕霧殿に戀あるゆゑ、君の機嫌の能い様にお身を頼む、一ツ飲やれ肴せん、地、ひらり紙花七九寸木枕に打敷て、横に鳴門の阿波大盡、夕霧が襤に兩足ぐつと入れければ、さてもなめたり、此夕霧に足凭すは、こりや些と慮外さうな、夫れ程足が苦にならば打折て捨たが好い、地、言捨て突と立ち次へ出れば伊左衛門、ちやつと寢轉ぶ膝枕、空寢入して高軒、地、はつとばかりに夕霧、我身を共に襤に、引纏ひ寄せとん

●ひかへ綱

と寢て、抱付締寄せ泣けるが、なふ伊左衛門様、目を覺して下さんせ、わしや煩ふて疾うに死ぬる筈なれど、今日まで命存へたは、ま一度逢せて下さん、神佛のひかへ綱、これ懐しうはないかいの、顔が見たうはないかいの、目を開て下さんせと、揺起しく、抱起せばむつくと起き、横さまに取て投げ、これ夕霧殿とやら夕飯殿とやら、節季師走こなたの様に隙ではない、七百貫目の借銭負ふて、夜晝稼ぐ伊左衛門、此様な時寝ねばならぬ、邪魔なされな惣嫁殿と、轉りと臥て又ごうくと空軒、ム、ウ身に覺えはなければ、恨みがあらば聞ませう、寢させはせぬと引起す、詞、これ何とする、此體でも藤屋の伊左衛門、今の如く

(614)

●萬歳傾城 客に踏まれたり叩か
れたりするより、萬歳傾城と罵り
たるなり。萬歳傾城の理由は、伊
左衛門の口舌に明なり。

●よくわかりに御萬歳 「徳前に御萬
歳」の、ことなり。

奥坐敷の侍に、踏れたり蹴られたりする女郎に近付は
持ぬ、地此處な萬歳傾城、萬歳ならば春おじや、フン通
りやくといひければ、詞ム、ウ此夕霧を萬歳とは、
ヲ、萬歳傾城の因縁知らずか、侍の足にかけて蹴らる
ゝを、萬歳傾城といふぞや、地誠に出度ふ侍ひける、
しかも足駄履て蹴るやら、年立かへる足駄にて、誠
目出度ふ侍蹴る、詞聞えたか去ながら何も身過ぎ、彼
の様な好い衆には蹴られても損は往ぬ、慾を知らねば
身が立たぬ、よくわかりに御萬歳や年立かへる足駄にて
誠に出度ふ侍蹴る、地町人も蹴る伊左衛門も蹴る、
蹴るく蹴ると蹴散かし、詞これ喜左餅でも米でも遣
てやりやと、烟草引寄せふく烟管の、フンさらぬ體にて

(615)

居たりけり、地夕霧わつと咽せ返り、エ、こなさんと
も覺えぬ、此夕霧をまだ傾城と思ふてか、ほんの女夫
じやないかいの、明れば私も二十二、十五の暮から逢
ひかゝり、何年に成る事ぞ、もふけた子さへま些とで
早や七ツ、誠を言はゞ今頃は一門中の狀文にも、伊左
衛門内よりと書ても人の咎めぬ事、わたしに恨みがあ
るならばこなさんにも恨みがある、詞去年の暮から丸
一年二年越に音信なく、それは幾瀬の物案じ、それゆ
ゑに此病、瘦衰へが目に見えぬか、煎薬と練薬と鍼と
按摩でやうくと、命繋いでたまさかに逢ふてこなさ
に甘ようと、思ふ處を逆様な、こりや慘らしい何うぞ
いの、私が心變つたら、踏んでばかり置んすか、たゝ

●四十八枚彌陀の願
 藏比丘の因位にして立給ひし誓願
 ないふ。俗に紙子の四十八枚とい
 ふより、彌陀の四十八願になぞら
 へ、つぎは平等施一切と破れ紙子
 のつぎ合せたるを佛前にかけて
 いひなしたるなり。

いてばかり置んすか、これ死かよつて居る夕霧じや、
 笑ひ顔見せて下んせ拜んます、エ、心強い胴慾な憎や
 と膝に引寄て、叩いつ擦つと聲を上げ、フン涙亂れて髪
 解けわけも性根も無りけり、伊左衛門も涙に暮れ、
 調ヲ、過つた外にさして恨みはなけれども、命にかえ
 め大事の女房、奥坐敷の若い者、我物面がむつとして、
 思はぬ腹立怵えてたも、地我とても浮身の體誠の正體
 見給へと、小袖くるりと脱ぎければ、肌に袷の破れ紙
 衣、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、フン胴慄ふ
 こそ哀れなれ、伊佐衛門涙を押へ、調さて彼の悴は無
 事で里に居る事か、何としたぞと言ひければ、されば
 其子を里に遣しと申せしは偽り、儘ならぬお身の上、

●おとまじや

苦勞にさせます氣の毒さ、地彼の阿波の大盡平岡左近
 といふ人と、私とが中の子といひかけて塗付て見たれ
 ば、調人は愚なまんまと誑され受取て、腹は假物武士
 の胤と寵愛に逢ふと聞につけ、地身の憂き時はいろ
 くの怖い智慧も出るものと、語りも敢ぬに伊左衛門
 ム、ウさもあらう事、調去りながら我古への手代共、
 其子をつき立て母へ訴訟し、藤屋の家を取立度いと
 談合あり、地どふぞわけを言ふて取返す思案が仕度
 といふ所に、奥より内儀色違ひなふおとまじやく、
 お二人爰の咄が奥の坐敷へ筒拔、お客様は不興顔、直
 に逢ふて言ふ事ありと今此處へお出、なふ喜左衛門殿
 こちの人と、皆々怖がりひそめく處へ、客は刀を提げ

突出し髪の下笄 突出し髪は柔
和にして上品なる髪の作りなり。



髷いびりこ
(載所葉園蒙訓用女)

其の髪の下笄といふは一見武家
の女房たるを見せたるなり。女用
訓蒙園葉三卷三、かうがい髷は下笄
せし奉公人など其つとめし、まひ
うちく、の局、どに入りくつるぎ
又はおのがし、打寄し時下髪は身
持むつかしきゆへに、くるくとい
まはして、かがひにて假にしめ
きたるなり。其横面白しとい
つし、常の結振になりたるなり。
するの世には下髪せぬきは人の柄
もなべてかうがい髷をするなり。
土佐駒 土佐國より産する馬。

地天、是れ伊左衛門殿夕霧殿、驚く事は少しもない、
是れ其證據と頭巾を取れば、突出し髪の下笄、鼈甲挿
櫛さしもの粹共呆れて不審晴れやらす、調ヲ、いかに
も不審の立つ筈、男に化けたる其間は何の其と思ひし
が、女子の姿をあらはして此中で物申すは、おはもじ
ながら、彼の阿波の大盡平岡左近が本妻雪と申すは我
身こと、夕霧殿の假の情、連合の子を誕生とて、此方
へ請取言は、我が悦ぶ子、腹も痛まらず苦勞せず産で貰
ひし忝さ、他にもせずもりそだて、手習讀物弓鎗まで
も器川にて、地國隣の土佐駒引せ乗つた姿は、天晴平
岡左近が世繼、七百石の主なりと御家中の褒め者、嘸
見たからうし見せし、一つは彼の子が冥加の爲、夕

改易 徳川氏の制に、士分の関
刑の名なり。盤居より重く切腹よ
り輕し、族籍を除きて家祿等を召
止るをいふ。

霧殿を請出し、一所に件ひ暮さんと、心根も聞んため、
鐵漿落しつあらぬ態で、只今聞けば我連合を誑し
て、地伊左衛門の子を突き付たと、聞よりはつと胸塞
り、夫の武士は廢つた、エ、恨めしい夕霧、男に化た
を幸ひに、飛かゝつて刺通し、我も死ふと刀を取は取
たれども、死んだ跡で此雪が傾城に愒氣して、阿呆
死と言はれては、いよく男の名を出すと、留るも殿
御を思ふゆゑ、無い事さへ言ふ世のさかなさ、阿波の
平岡左近こそ、町人の子を傾城に突付られたと取沙汰
し、殿御の御耳に立ば、好い仕合で御改易、阿呆拂か
切腹か、死しても悪名消えはこそ、此處を了簡し、あ
の子を其儘下されば、侍一人の取立、生々世々のお情

●女御 女官の名、中宮に次ぎて天子の御殿に侍す。
●更衣 女官の名、女御に次ぎて天子の御衣を更ふるとを勤む。

ぞや、我人我子は大事のもの、殊に思ふ人の子を、思はぬ人の子といふは、何しに心よからうぞ、それは流れの身の辛さ、侍の妻には又此様な憂き事あり、御女子と生れし此因果、女御更衣になるとても、羨しうは思はぬと、地心の底を口説立て、涙わりなき物語、夕霧夫婦吉田屋の、フシ一家袖をぞ濡しける、御伊左衛門突と出、ハ、ア賢女かな貞女かな、左近殿とは夕霧ゆる遺恨はあれどもそれは私、拙者も彼の悴を力に、出世の望みござれども、武家のお名にはかへられず、進ずるといふ迄もなし、以前夕霧が申す通り、左近殿の御子息、伊左衛門が子ではござらぬ、ア、忝い、夕霧殿も左様じゃぞや、はて主の合點の上からは、私が否

●惣領

とは申されぬ、地去ながら命の内、ちよつと見せて下さんと、涙に咽ぶぞ道理なる、地ヲ、心得たく、萬事胸に込めました、身請の事も吉田屋と、近々に談合しませうあの子が成人するにつけ、伊左衛門殿も樂み、サア契約の堅めの盃、いよくあの子はこちの子、平岡左近が惣領、さらりくと手を拍て、フシ廓でござんざ珍し、地日も暮れかれば若黨仲間駕籠釣らせ、地阿波の旦那のお迎ひ、地これ下人も忍ぶ此姿、元の男と形振作り、頭巾大小印籠巾着、亭主さらば、御夕霧事は追付是より便宜せう、萬事頼む、地請込ましたと、膝を屈める腰屈める、侍女件れるを引換て、をろせが送る大門や、口をきこより奥様の深き、情や 三

立歸る

中之卷

●延寶六年の春 夕霧の歿年なり。

フシ 春や延寶六年と明渡る世も昔の京、難波の今朝は
 珍しき妻子引具し舊冬より、上本町の玄關構借坐敷、
 お國の御用新玉の、此處に年取る豆男、地阿波の國平
 岡左近と宿札も、門の飾に時めきて、フシ 武家は綺羅あ
 る春なれや、地表の物見に女中の聲々、申し奥様、珍
 しい大阪の正月を始て見物致し、お國へ歸つて好い咄
 これもお蔭と悦ぶにぞ、調子、くそち達がいふ通り、
 主のお蔭は忝い、御用に就て左近殿、我々連れて僅か
 逗留の旅宿へ、今朝から禮者の絶えぬ事、地皆殿様の

●天満とやらの神明 西天満の神明なり。

●熨斗目 賀服に用ゆる一種の絹布にして、経は練絲、縦は生絲なり、無地にして腰の邊にのみ縞を織出すもの。

御威光、左近殿は源之介連れて、天満とやらの神明
 様へ恵方参り、地親の子としてしほらしい、六ツや七ツ
 で馬に乗る、追付左近殿の名代御奉公勤めるを、見る
 であらうと御悦びの處へ、旦那のお歸り前供走る黒羽
 織、すつく素樫栗毛の馬、のつし熨斗目に麻社袴、
 親に續いて源之介、明て七ツの乳のまふ、饅頭形の中
 刺も目元賢きうない松、千代を嘶ゆる土佐駒に、手繩
 搔操りしやんくく、響の音はりんくく、凜と
 座りし袴腰、フシ物見の前を乗廻せば、詞是々源之助戻
 りやつたか目出度いく、地嘸馬上が寒かろうおとな
 しい出来しやつたと、招かれて源之介申し母様、詞惠
 力参りに天満へ寄て、これ買て來ましたと、土人形の

●親は太夫買ひ子は天神買ふ
 神は太夫に次ぐ遊女の位なれば、天
 大坂の小見が、陶器の天満宮を持
 ち行くを見て悪口いひしものなり

天神、手綱に持添へ、私がこれ持て居るのを道通りが
 見付て、父様を見知て居るやら、親は太夫買ひ子は天
 神買ふと言って笑ひました、地おれにも大きな太夫買ふ
 て下されと、あどけなき詞に侍女共氣の毒がり、これ
 しるくと目ませすれば源之介、ヤイ駄賃馬の様にし
 るくとは不調法な、侍の乗馬はこれ、此様にはい
 く、地はいくくと親の心も白泡嚙せ、門内へ乗
 入しふりいたいけにおとなし、地今の詞に腰元衆、
 口を閉て奥様の機嫌を窺ふ體なれば、調これく源の
 咄を聞たか、道通りが、左近殿を太夫買といふたげな
 此前大阪お屋敷役の時、新町通ひに夕霧といふ太夫に
 馴染をかけ、源之介を設けたは定て皆も聞つらん、人

●はしやれもの

●にやこい やにこいなどい
 ●ふ。腕き。女にのろきにいふ。
 ●うつそり *

●あだぶのわるい 上方調。あた
 はあだしつこいなどのあだと同じ
 ●く助辭なり。ぶのわるいは歩合の
 わるきと即ち割合のわるきとなり
 又連のわるいにも用ふ。

の見知るも道理、大名高家も母方の吟味はなし、大事
 ないとはいひながら、地あの子の心は此雪を産の母と
 思ふて居る、必々夕霧が子といふ噂禁制ぞや、其夕霧
 をも請出し、あの子がお乳に置く筈、朋輩並みにあし
 らやと、仰せも果ぬに腰元中口々に、調ア、奥様の餘
 り結構過ました、我々がなんぼ沙汰を致さずとも、あ
 の傾城のはしやれ者、それを言ずに居ませうか、地お
 袋振て鼻高ふ、お家をありたい儘にして、奥様を踏付
 るは今のこと、調まだそればかりか下地がにやこい
 旦那様、小舌緩ふ仕懸たら、ぼつかりと喰付て、田も
 遣ふ畦も遣ふで奥様はうつそり鼻明て仕舞んしよ、小
 無益しいあだぶの悪い、こりや御無用に遊せと、焚付

らるゝ女心、詞ア、言へばそふじや、おれは甚い阿呆
 じや、いのりものけたい戀の敵持てゐて當がふは、盜
 人に藏の番磁石に針、地に氣を付けられて、はやも
 やく〜と腹が立つ、後に悔の出るは定、請出す事は止
 めに遣ふ、皆出來た能く言ふてくれた、詞さては彌止
 めになされますか、はて止にせいで何んとせう、ア、
 氣がさつぱりとなりました、おりん殿好い氣味か、わ
 しや痞が下ました、おしゆん殿は何んと、こちや金拾
 ふたより嬉しいと、地身に徳もなき法界悋氣、フシこれ
 そ女の慣ひなる、地あれ北から十文字の道具、お藏屋
 敷の小栗軍兵衛様年頭のお禮、御一門の中でもあなた
 は堅いそりやく〜と、物見の簾下ろす間に早や立關に

●物申し
 ●どれい

物申すの略。
 誰の轉。物申しの答へ

物もう、詞どれい、小栗軍兵衛御慶申す、地旦那幸ひ
 宿にあり、いざお通りといひければ、軍兵衛立關に立
 て、これ家來共、御用に就て左近殿と申合する事あ
 り、暫く隙が入るべきぞ、屋敷へ歸つて八ツ時分迎ひ
 に来い、ない、其中少早く来い、ない、油斷するなと
 入りければ、若黨始め草履取挾箱、フシ皆々宿所へ歸り
 しが、地道具持の榎右衛門、一人残つて臺所覗き、
 詞誰ぞ頼みませう、飯焚の竹呼出して下されと、いふ
 處へ馬取の角介苦い顔して、ヤ榎右衛門、わりや見事
 武家に奉公するかやい、此角介が僅な切米の内五百五
 十といふ錢を取替た、冬年一言の斷りもせず、今も先
 身に逢ひ度いと云ふべい處、竹を呼出してくれとはの

●の太い者 籠は矢幹のこと。横着なる者を太い奴などいふ。丈夫の意味より轉じたるもの。

●鶏が橋 小橋の東北。

●めぐる 小しび即ち鮎の一種。

●お拂ひの練衆 未考(高註)三津八幡の夏祭を鮎波のお扱といふ。其の夏祭の練衆なるべし。

●まじやうもの 正直者のこと。

太い者だ、地錢の濟む迄これを取ると、櫓の柄に縫付く、待て角介櫓持が鎧を取られては、櫓右衛門が首が無い、五百や六百で賣る首じやないならぬ、ヤア取て見せうと、地競合ふ最中、竹走り出、ヲウ角介殿道理じや、錢は竹が濟す堪忍して下され、エ、情なの性悪男奴や、世間を見て耻を知りや、お小人町の久六は、此方より若い人八軒屋の龜と只た一年念頃して、小錢貯て宿持て、冬年も鶴が橋のお婆々へ大きな鏡餅にめぐろ添へて据へられた、地藤の棚のねじ兵衛は、此方程櫓は振らねども、お拂ひの練衆御番替り人の氣に入り雇はれて、まじやうものと言はれたゆゑ、片町のふりを内へ呼入れ、師走に廣めがあつたぞや、聞これ

●びくにん 比丘尼の訛。

●濱せり 總嫁は多く、濱側(川岸の)の納屋又は物置の間に人情を窺ぐが故に、總嫁を買ふな濱せりといふ。

●稻荷邊り 玉造稻荷のとなるべし。此の邊りにも元祿寶永頃淫賣婦の巢窟ありき。眞田山の稻荷も寶永三年五月十七日より、さまざま利生ありとて参詣人群衆せりといへば、此の邊りの繁昌知るべし。

●夜見世狂ひ 新町通ひな意味す。段々悪性が溢したるをなふい

でこそ女房の肩も怒るはいの、こなたと言替して明て四年、給分一文身につけず、皆こなたに入上る、地それ何じや好い年して、長屋へびくにん引入れ、日が暮ると濱せり、また其上に、稻荷邊りの裏屋小路を覗き廻り、結局に此頃は、夜見世狂もついたげな、私とても木竹じやなし、愠氣も仕度い腹も立つ、エ、憎いとは思へども、副ア、さうじやない、女子に生れた因果じや、男のさがをあらはすまいと随分わしが身をつめ、地三度付る油も一度付け、雪駄履くを草履にし、草履履くを跣足で仕舞ひ、鍋釜の煤烟かくにもこなたの髭に入ると思ひ、よい處を除て置く、我身の事には元結一筋買はぬは、男を大事にかけるゆゑじやないか

●鳥目 宋の泰始年中に鑄たる錢は、鵝の眼の如くして瞳の方なるに型りたれば、形剛く中の孔は方なるより鵝眼錢と稱し、これより錢を鳥目といへり。

いの、女房には苦勞をさせ、榮耀が餘つて色狂ひ、聞えぬ人じやとしめ泣に、恨み口説くぞ不便なる、これ此處の御奉公は、中途に參つて馴染はなし、お國までも御内衆が悪名立るが悲しい、此上被の裕を脱ぐ、角介殿これで濟して下されと、地帯を解かんとする處へ、お腰元のりん走り出、これく竹、そなたの心底奥様物見よりお聞なされ、さてく奇特な、上々までも女たる身の鏡と、殊なふお感じなさるゝ、奥様にもちとお氣の濟ぬ事あれども、地そなたを手本にお心が納つてお嬉さ、師匠とも思召、御褒美に此鳥目百疋下さるゝ、嗣さて角介は慮外な、餘所の大事のお道具に手をかける狼藉千萬、重て此事言ひ出さば旦那様へ仰

●裸百疋 裸百貫といふ諺をしじりたり。

●子の目三々 太夫を松の位といふより、身受けの松を根引といへり。恰も存なれば子の目の小松を曳くとにかけたるなり。

られ、打首になさるゝとの御意じやといへば、地天窓角介佛頂面、竹は悦び、ア、冥加もない有難い、兎角お禮はよい様にと戴きく、嗣これ槌右衛門殿、是れ以て往つしやれ、地何を見込に此様に可愛ぞと、たとへの裸百疋を、直に男に檀持に過たる妻が、三重一優しさや、フシ人の情に、夕霧が、地思ひも寄らぬ此春の、子の目を根から根曳の松に、小ナクリかゝる藤屋の伊左衛門、我子の顔の見まほしく、ならはぬ駕籠の片端を、隠れて忍ぶ頬冠り、夕霧も簾越し、子を見る今日の嬉しさより、夫に別るゝ物憂さは、フシ上本町にぞ着にける、嗣宿札を見て喜左衛門、誰方ぞ女中方頼みませう、ハウ何方からぞと腰元出れば、私は九軒町喜田屋喜左

●けいせん 婦女の詛りを其の儘
寫したるなり。岡姓爺をこくせん
と讀むの類。

衛門と申す者、奥様よりお頼みなされし扇屋夕霧身請
の事、随分と駈廻り、金子は當月一ばいに、お渡しな
さるゝ約束でゑいやおうと首尾成り、只今是へ同道、
地さてく節季の忙しい中私の働き、春の用意、正月
のお客の穿鑿、錢金の請拂ひ押詰ての節分、大豆で打
出す鬼の首取た様にぞ申しける、成程奥様にも其お
噂、さてはあれが傾城どのかと駕籠を覗いて、地ハウ
アウ傾城といふもの始て見た、やつぱり常の女子じや
と走り入て奥様く、傾城が参りました、ヤア姦し
い皆物見から聞て居た、傾城くと言ふまいぞ、今よ
りは源之介のお乳の人、侍町人の歴々に交際ふて、心
も至り目恥しい、地粗相して笑はれな、盃の用意せよ

と、ひそめく聲に左近勝手へ入りければ、詞これなふ
豫て申せし夕霧の事、吉田屋の喜左衛門が埒明け、連
立ち來たとの案内、地なんと此雪が様な格氣せぬ、氣
の通つた女房はござんすまいかと笑はるれば、ヲ、御
奇特く去ながら、坐敷に堅い軍兵衛が居らるゝ、今
内へは呼ばれまい表に置ても目に立つ、何うか斯うか
と思案半ば、門前には喜左衛門、ア、甚ふ冷たい、夕
霧様は御病後、早ふ内へ入れまし、火になりともあて
ましたい、詞頼みませうくと、地呼はる聲若黨仲間
ばらくと、小栗軍兵衛迎ひの者と、奴の聲揚屋の聲
遣手はなくて傾城に、フシ檀持交りやかまし、地や
日もたけて軍兵衛、お暇申すと立出る、左近親子送つ

て出、色代あれば軍兵衛、ヲ、源之介殿おとなしふござるよ、追付殿の御用に立召されう、随分弓馬の稽古精出し申さうぞ、地 永日くくと、チクリ暇乞して一歸りけり、地 左近親子支關に立休ひて見送る體、伊左衛門遙に見て、あれは我子か、昔の伊左衛門ならば、人の子になさうか、大小こそ指せずとも、數多の手代若い者、若旦那と侍かせ、京大阪の町人の誰にかは劣るべき、侍とても負まじき、母親の駕籠を父が昇き、我子の門に蹲踞ふ我親に背きたる其罰、ひつしと思ひ知り、悔み涙に頬冠の、手拭浸すばかりなり、地 奥方も端近く、なふく喜左衛門か、其駕籠是へと他事なき風情それを力に夕霧は、駕籠も思ひも洩れ出て、平様お久

しうござんす、奥様のお慈悲にて、あのお子のお乳母に附らるゝ筈ながら、のらぞんざいのわしが身、氣色もしかく抄らねど、先づ和子様を見たさにと、熟々と打守り、詞あれ喜左衛門様、さても氣高い好いお子や、聞及びしよりおとなしさま、常體の者の子が、七つや八つで斯うあらうか、人は筋目が耻かしい、有繋父様のお子程ある、父様のお心が左こそと推量せらるゝと、表の方へ目を配れば、伊左衛門も首伸し、魂脱て嬰子の、袖に飛入るばかりなり、左近夫婦は氣も付ず、サア喜左衛門、詞先少しなりとも金子渡さう、いざ坐敷へ、これ源之介、あの人は我身の乳母、馴染をかけて最愛がり、此母も同然に、大人になつても乳母

(636)

阿漕なと 阿漕は伊勢國阿漕津にあり、殺生禁断の海へ網を入ると、厩々途に發見せられて罪を得といふ故事より、たびくするを俗に阿漕といふ。轉じてあつましきに用ゆ。こしも伊左衛門が

を見捨ぬものじやぞや、地吉田屋こちへと莞爾にチクリ打連れ坐敷に入りけり、地夕霧四邊を見廻しなふ懐しや先刻さつきから、抱付度だつたふてならなんだと、縋付まがて泣ければ、伊左衛門いざゑもんも走り入り、思はず知らずやれ可愛の者ものやと、抱付だつたく處を、源之介げんすけ飛退とひのき、詞やい駕籠昇め、穢けがい姿すがたで侍さむらいに抱付だつたく慮外りよがい者奴ものかと、脇指わきさざに手てをかくる、ア、く申し、眞平まへひらく御免ごめんなさりませ、私が悴せがにちようどお前程まへほどながござれども、小さい時ときから人手に渡わたし、見度みかたいくと存ぞんずる打節うちせち、地お前を見付みつけ如何いかにも堪こたえられず、心亂こころみだれて慮外りよがいの段御免遊だんごめんあそばし、阿漕あせうな申し事ことなれど、お侍さむらいのお慈悲じへいに、父ちちかといふて、私わたくしに抱付だつたて下さりませと、額ひたいを疊たたみに摺すり付つけて、手てを合あせて

最初源之介に抱き付きて叱れ今またそれにも怒りず、源之介に父と呼はしめんと願ふより、阿漕な申事といへり。

(637)

ぞ泣居なみたる、何んなにの己おのれを父ちちと言いふ、おりや父様ちちさまに言いふて来こうと、駈入かはいる處ところを夕霧抱留ゆきだまめこれ申し、乳母うははが始はじめての御訴訟ごせうじ頼上たのまると、泣なければ、乳母うははの言いやる事ことなら言いふて遣やふ、父様ちちさまなふと抱付だつたを、地ヲ、忝かたじけない、父ちちじやくと嬉うれし泣なき、夕霧ゆきも羨うらやしく、次つぎてに私わたくしも母かじやと言いふて下くだされかし、詞ヲ、言いふて遣やふこれは母様かさま、詞ヲ、わしが子こじや、これは父様ちちさまおれが子こじや、二人ふたりが中なかの思おもひ子の、親子夫婦おやこの寄合よしかは、又また今生こんじやうでは叶かなはぬと、泣なつ笑わらふつ種々さまざまに、フシ寵愛ちゆうあいこそは道理だうりなれ、奥おくより左近さこんが聲こゑとして、藤屋伊左衛門ふぢやいざゑもんくと呼よぶ聲こゑす、南無三寶なむさんぼうと逃出にげだれば、續つづいて左近さこん走り出いで、袖そでを控ひかえて詞これ古いにしへ參會さんかいせし、阿波あはの大盡だいじんと異名いみなうを呼よべし平岡ひらおか

左近、其方に恨みはなけれども夕霧に言ふ事あり、それにて聽聞致されよと、がはと突退け涙を浮め、エ、偽り多き遊女の習ひ驚くべきにあらねども、これ程までよふもく、此左近を積りしな、此子は伊左衛門が忤とは、先年死したる遣手の玉が咄にて、疾くより聞付け無念とも口惜とも心一つに堪え兼しが、いやく改めては侍の身分立す、殊に此子も、我々夫婦を誠の父母と思ひ睦しく、不便さも増すゆゑに、縁でかなと諦め、二世と連添ふ妻にも深く包み、夕霧が産んだる某が實子と偽りしかば、有繋女房の優しくも、夕霧が心を憐み、乳母と名付け此内へ呼取りしは、皆此忤が可愛さゆゑ、それになんぞや淺ましい體にて忍び入り、

親よ子よのと名乗り合ひ知らぬ子に智恵付る、ヤレ稚くても此子はな、馬に乗り漣つかせ、おひ先き立身樂む身の、忤に耻を與へん爲か左近が武士を捨ん爲か、色に迷ひ馬鹿つくし、女どもが手前も耻し、地エ、恨めしや是非もなや、忤を返す連歸れ、町人の子に刀脇指無用なりと引寄せて、もぎ取る處へ奥方は走り出でなふ情なや此子が事は我とても、直の咄を聞しかども、調べてはお侍の一分廢ると思案して、貰ひ切たる此子なり、今返しては武士が立ぬ、一寸も離さぬと抱上るを引離し、嗣身を立て名を立て、一分を立るといふも子孫の爲、實子を持ぬ此左近、誰が爲に身を措まん、一分捨る合點と大小もぎ取り突出す、いやく例へこ

●しどく 戻るといふに同じ。夫をいふと今いふ。わくらはた

●楓 小兒の可愛らしき手を、楓のやうなと今いふ。わくらはた

あなたは返しても、契約して子にしたからは此雪が返さぬ、夕霧も戻さぬと取付を引退け、継り付を引離し、夫をもどく見苦しと、奥方引立て立關をはたと、フシ戸閉して入にけり、地伊左衛門も夕霧も前後に暮て途方なく、詞源之介泣出し、コレ父様母様、おりや駕籠昇の子ではないわいの、地傾城の子にはなりともない、父様の子じゃわいの、母様の子じゃわいの、此處明てくれやい侍ども、明けをれやいと泣さけび、立關の戸をどんくと、叩く楓のわくらはには、フシ應ふる者もなかりける、地夕霧息も絶々ながら、これ源之介合點しや、詞眞實其方は左近殿の子ではない、母こそは夕霧父御はそれ藤屋伊左衛門、さもしい人と思やるな、江

戸までも知られて、左近殿よりも大身の武家に親子もあるぞいの、地母ゆるの御浪人、其方も憂目見せまじと、左近殿の子といひしが、誠の親と假親の、心はさしも違ふかや、左近殿も其方をよも憎ふはあるまいが、我身の無念一旦の腹立に、いとしい其方を、フシ捨らるよ、あの父様や此母は今の如く人中で、踏れぬばかりに恥を搔き、いひさげられても其方を抱が嬉しい、逢ふが嬉しい、肉身分し本の子は、斯うもいとしい物かいの、母が此氣色では、最う逢ふ事はなるまい、父様の事頼むぞや、せめて一年しつとりと、一つ寝臥もしたいぞと、搔口説きしみぐと、フシ眞實盡し憂涙、地源之介聞分けて、此方が本の母様か父様は此方か、

●印籠
印籠 印を入れたるものなり、後事ら樂入となれり

傾城でも駕籠昇ても、本の親がいとしいと、涙まじりの笑ひ顔、フシ血の筋見えて哀れ也、ヲ、出来いたく侍とても貴からず、町人として賤しからず、貴い物は此胸一ツ、氣遣ひせまい伊左衛門が妻子、憂目はさせぬ力落すなくと、いへども我も力なく、只茫然となりにけり、地吉田屋喜左衛門駕籠昇雇ひ、是非なしともお笑止とも、参りかゝつて我々の迷惑、調外の事ならば何卒思案も致すべきが、申しても霧様は親方かゝり殊に病中大事のお身、地先連歸つて扇屋へ手渡しせねばお爲にも如何、いざ召ませと昇寄する、扱は二度別れて廊へ歸るかや、ハアウとばかりにかつばと伏し、既に息も絶んとす、伊左衛門抱起し、吉田屋は印籠の

●百里來た道は百里飯る
百里來た道は百里飯る 已に出るものは已に飯ると同意。

氣付種々看病し、フシやうく性根付けるが、昔より幾人かかうした身の憂き難儀、咄にも聞つれど、是程の辛い事重なれば重なるかや、今逢ふて今別るゝ、あの子をせめて相駕籠でいざおじやと抱き寄するを、地引離しそれは喜左まで迷惑、調これ世にも人にも恨みなし、左近も謂はゞ尤至極、女房が情といひ、誰か親子三人に仇するものはなけれども、地親に逆らひ寶を費し、身を奢りたる其酬ひ、あれあの天道に睨まれて、何國にて身の立つべきぞ、百里來た道は百里歸る、昔の榮耀程憂目を見ねば罪消えず、男ゆゑの苦勞と思ひ歸つてくれと泣諫め、地賺し乗すれば弱々と、言ひ度い事の數々も、せき來る涙せき來る胸、命の中に今一

度、顔見度い逢度い末期の水を、あの子の手から、頼むくと夕霧の、名に立替る夕霞、見送り見送る門々の、松に太夫が面影を残して、別れ 三垂 歸りける

下之卷

相の山 夕べ晨の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いてナ驚く人もなし、合手野邊より彼方の友とては、血脈一つに珠數一連、これが冥途の友となる、詞工、物貫でもめかりをさかしや、是程醫者の出入やら神子の御符のと、屋内が持返いても、地七種囃す間もないが目に見えぬか、通りやくといふ處へ、梅庵御見舞四枚肩折居の衣長羽織、フシ醫者は奥へぞ通りける、詞伊左衛

●夕べ晨の鐘の聲 「是が冥途の友となる」夕霧阿波鳴渡の山歌。「松の落葉」卷七間の山念佛の唄に、「夢のうらななる夢の世なさとらぬ事のはかなさよ、なむあみだぶつは、たいぞうかいのまんだらとけちみやくひとつに數珠一れんなむあみだぶつ」此の一半を取りしものなり。

●寂滅爲樂

●めかりを利かせ 目ほしを利すといふに同じ。

●七種はやす 「日本歳事記」七種はやす、又歳辰といふべり、人は萬物の靈なればかくいふとや、和俗にいへる五節供の初

なり、今日七種の菜粥を製し食ふ、七種菜といふは歌に「せりなづな五形はこべら佛の座すいなすいしるこれぞ七くさ云々」七草はやすとは六日の日の夕方、明朝の準備に、之を皿の上にて敷くといふ。

●四枚肩

駕籠に四人昇夫の附くといふ。

●寄遠福徳 番渡は天竺の名醫、福徳は支那戦國の世の名醫。

門編笠傾け小聲になり、やれ源之介、母が氣色が重さうな、地命の内にま一度見せたく此姿にて來れども、最早見せる事も見る事も、成るまいと囁けば源之介、早ふ逢ひたい事じやとて、父に縋りて泣居たり、詞梅庵様お歸りと表へ出れば遣手杉、家内の上下従いで出で、病氣は如何でござります、梅庵冠を掉て、耆婆扁鵲でも叶はぬ、物に譬へて言はゞ乾上つた土器に、燈心一筋とぼいて風吹に置く様なもの、今日の日中か遅ふて初夜限り、最早毒も何も構はず氣任せにしたがよい、ア、惜い人じや、夕霧くといふて、親方にかい金儲けて遣た女郎じや、達者な内に此梅庵あの人を一年持ば、今頃は匙取らいても樂するもの、地あつた

●來世命 死後の冥福を祈る爲めに佛へ上る金。

夕霧阿波鳴渡

ら金をあの世へ遣る、是がほんの來世金じやと、言ひ捨歸れば、扇屋一家は打萎れ、フン返答する者もなし、地ヤレ源之介醫者の言ひ分聞たか、最う叶はぬ思ひ切れ、ア、悲しや、どうぞ母様の、死なしやれぬ様にして下されと、フン取付き泣ぞ不便なる、地扇屋空夫婦涙片手に蒲團手づから横柄に敷き、詞今の相の山が奥へ聞えて、太夫の慰みに是へ出て聞度いと仰る、地これへ這入て面白い事唄ふて慰めて下され、あつと親子は笠傾け、奥を見遣れば夕霧は、芙蓉の眼尻衰へて、夕へ待間の玉の緒の、今ぞ斷れ行く息遣ひ、遣手禿に手を引れ、チクリ肩に懸りし其姿、フン親子は目も暮れ地胸塞り漏る涙を夕霧も、それと見るより飛立つ如く、

●相の山 生玉心中の條に解けり。さいら 竹の先きを割りて作れるもの。さらくと鳴るより、さいらの名起る。古くは田樂などの雜伎に、羯鼓などに合せて、さいらを摺りて舞曲したることあり。相の山を歌ふに當時さいらを合せたるものと見ゆ。伊勢の間の山にては、三味線に合せて歌へり。

●夕へ晨の憂き勤 「迷ふ數々のこゝまで相の山節にて、以下は相の山節の歌の如くに、夕霧の身の上を哀れに、淨瑠璃の文句に綴りなしたるなり。

心を胸に積み疊む、蒲團の上にかつばと伏し、思ひを涙に通せて、人目を中に憚りの、せきたぐるこそ哀れなれ、地サアく相の山早ふくと言ひければ、あつと涙の玉さくら、唄ふ聲にも血の涙、子は安方の轉りや

相の山

相の山 夕へ晨の憂き勤、花一時の眺めとは、知れども迷ふ數々の、地文に染ても誠は薄く、思ふ方へと駿河なる、富士も麓の戀の山、我踏分て我迷ふ、夢の中戸の夢枕、月を憎みし夜半もあり、辛い座敷を貰はれて、冷泉餘所に行く身を彼の人に、ちよつと鹿島の神も知

夕霧阿波鳴渡

れ、神ぞ嬉しき可愛さの、フシ身にも堪えて忘れめや、
 初手二度まではふる雪の、地罪も恐れぬ無理起請、神
 も佛も二つの耳に、小ナクリ嘘と誠を私語の橋の、蜘蛛手に
 物思ふ、格子叩くを相圖にて、稀の御見も籬越し、何
 を歎くぞ歎きても、身は十年の繋ぎ船、出船の今日の
 名残の床、地明日の朝ごみ枕より、フシ跡より遣手の責
 め来るは、フシ責の責より猶辛く、仕舞太鼓の音まで
 も、寂滅爲樂と響くなり、地死出の山路は誰とても、
 一つ泊の旅の宿、浮世隔る涙川、此世に浮名更科や、
 姥捨親捨身を捨て、櫻花かや散りぐ、五つでは糸を
 綜初め、六つや難波に、此身沈めて八つで遣手に附添
 ひ、九つで戀の小使ひ、十チヤ 地十五の フシ初姿、

髻入れずの、地千髪房々衣装のこなし、心惻愾で道中
 よふて、戀知り分知り文の文章、思ひりぐべく候、
 床は伽羅く 新沈や麝香の薫まで、今の手向と燦ら
 する、種蒔捨し撫子の、花の盛を フシ餘所に見て、惜
 や三途の川霧と、消る其身も人目にも、昨日今日とは
 今までに、珠敷を手取る事もなく、地何をか後世の
 土産とも、いざ白露の仇し野や 相の山野邊より彼方の
 友とては、し櫛一枝一葉、これが冥途の フシ友となる、
地知邊となれや此詞、形身ともなれ回向となれ、迷ふ
 な我も迷はじと、思ひを籠し一節に、フシ聞人哀れを催
 せり、地扇屋夫婦情深く、なふ此方は聞及ぶ藤屋の伊
 左衛門殿さうな、忍ぶ事も時に依る、娘とも思ふ夕霧

●佛の三十二相 菩薩此の相を得るに、運きは百大劫、早きも九十一大劫の行を以てす、一相を得るには百福を因とす、一福は百億の大千世界の人の一時に殺せらるる

が、臨終の心が堪能させたい、早ふ逢ふて下され、ア、忝ないと走り寄り、調太夫又逢ひに来たはいの、伊左衛門様私や死ぬるはいのふ、地母様死んで下さるなと、縫り付ば家内の上下、わつに一度に聲を上げ、フシ泣沈むこそ道理なれ、重き枕に手を合せ、地旦那様ちいさい時より御苦勞に預り、御恩も報ぜず死まする、是さへ果敢ふござんすに、最愛い男可愛い子に、逢せて下んす、最う私は佛でござんす、迎の事に伊左衛門様の手で、此髪切て貰ひ佛の形になつて、地親子の手から水をくくと、いふ聲も、フシ絶くくにごそなりにけれ、地ヲ、髪飾は假の戯れ、佛の三十二相とは新木作の卒塔婆をいふ、只今某が切る髪は、阿字の一刀、彌

な一時に救済したる功能なりといへり。即ち足安平相、千輻輪相、手指纖長相、手足柔順相、手足綽相、足跟滿足相、足踏高好相、腦如鹿王相、手過膝相、馬陰藏相、身縱廣相、手孔生青色相、身毛上廣相、身金色相、身光面各一丈相、皮膚細滑相、七處平滿相、兩腋滿相、身如師子相、身端直相、眉圓滿相、四十齒相、齒白齊密相、四牙白淨相、頰車如師子相、咽中津液得上味相、廣長舌相、梵音深遠相、眼色如金精相、眼睫如牛王相、眉白毫相、頂肉髮成相。

●阿字 ●網陀の利劍 「般若讚」に、「門々不同八萬四、爲滅無明果業因、利劍即是網陀號、一聲稱念即除」とあり。いかなる罪惡も、念佛一過すれば悉く消滅すると、さながら利劍を以て物を断つが如しとなり。人界は一生造惡の娑婆世界、人間は生涯煩惱の爲めに罪惡を重ねるのみなるに、まして遊女においておや。

陀の利劍を以て、煩惱の羈絆と觀念せ難と、指添へ抜て二人添寝の寝亂髪、ふつと切れば源之介、あつたら髪をと身に添へて、フシ悶え臥てぞ歎きける、調重て櫛の水を携へこれ夕霧、人界は一生造惡の娑婆世界、地別て遊君流れの身は、面に紅粉を飾て數多の人を迷はし、綾羅錦繡を身に纏ひ、多くの酒を汲流し、煩惱の種を植て菩提の根を絶つとは遊女の事、地此水は極樂の八功德池の水と思ひ、雨甘露法雨感衆生故と聞く時は、是を飲んで心身を濡し、九品の淨刹に往生じ、半蓮を分けて待て居や、これ其しるしと同じく髪を押し切て、親子夫婦手向の水、フシ哀れにも亦頼もしし、地斯る處に吉田屋の喜左衛門、六尺に金箱持せ、調是

●八功德水 網陀如來の報土にある池の水に八種の功德あり、一は澄淨、二は清冷、三は甘美、四は輕軟、五は香、六は飲時適心、七は飲已無患、八は不臭。

(652)

●雨甘露法雨感衆生 如来の教法の能く衆生の諸機に應じ饒く化益を興ふると、なほ天の甘露の降く萬物を潤すか如しの意。「無量經」に「猶如大雨甘露甘露法潤衆生」故に見ゆ。

●九品の淨刹 九品は「觀無量壽經」に就く所の極樂往生の階階なり。即ち上品上生、中上、下上、中品上生、中品、下品上生、中品、下品、これなり。

は平岡左近様の奥方お雪様の御使、夕霧を請出す所其筈違ひ是非もなし、されども代金八百兩、其爲の金子なれば外に遣はん様なし、御病氣以ての外由、此金にて請出し、一時なりとも廊の外にて往生させませとお使なりと、伺いふ處へ下袴の若い者、金箱數多かたげさせ、伺これく扇屋殿、我等は藤屋伊左衛門様の御老母、藤屋妙順様よりのお使、伊左衛門様は父御の御勘當、今は此世に亡きお人なれば、お袋様の我儘に勘當御免はなり難し、夕霧様には御一子まである事、嫁御孫御に勘當はなし、藤屋妙順が嫁を廊の内にて殺されず、一時なりとも廊を出し、外にて往生させませしたいとのお願い、金子二千兩持參致す、地サアく片

(653)

時も廊を出して下されと、勢ひ勇めば扇屋了空、御尤なれども金子を取て隙を遣とは、同行末の年月無事で勤める女郎の事、今死ぬる夕霧に大分の金銀取て隙をやるは、此扇屋は盗人と申す者、殊に全盛して親方に大分儲けてくれた此太夫、命さへあらふならば、此扇屋が身代半分は入れます、此金子夕霧和女に遣る、臨終に金やるとは異なる事申す様なれど、此金では萬部の經も讀るゝ、跡の追善遺言召され、サアく暇を遣た、廊を連てお出なされと、地切れ離れたる意氣方は、フシ有繫所に住はなり、今を限りの夕霧莞爾と笑ひ、阿ア、どなたもく有難い御心底、お禮申して下されませ、これ源之介、此金は親方殿より下された、

(654)

ゆいしい 勝れたるも。

●萬僧供養 あまたの僧を請じて
する供養。僧の數多ければ多きは
と功德ありとせり。千僧供養、萬
僧供養皆同じ。
●三尊の來迎 彌陀如來夾侍の觀
音、勢至、これを三尊佛といふ。
來迎は、日頃彌陀佛を念するも厚
きしは死に臨み、佛影向來顯し
て極樂淨土に接引し給ふといふ。

地そなたに母が譲りじや、由々しい町人になつて、父
様の名を揚てたも、我身の出世を草葉の蔭より見るな
らば、萬僧供養にも勝りて母は佛になるぞや、去なが
ら、伊左衛門様源之介に妙順様を並べて、三尊の來迎
と拜みたうござんす、ヤレ妙順様呼に走れと立騒ぐ、
いや呼にやるまでもなし、氣遣がつてアレ門口にと、
手代伴ひ入りければ、なふ花嫁御珍しやく、嬉しい
對面誠の佛は西方のお迎ひ、此妙順はこちの家へ迎ひ
取り、金づくめにして養生し、此姑が精力で本服させ
て見せうぞと、家内が勇む氣勢に連れて、諸病は氣よ
り本服の、顔も活々にこくと、立て躍るや扇屋夕霧
憂ひ却つて悦びを、語り傳へて三十五年、又五十年又

(655)

●三十五年 此の淨瑠璃は、寶水
七年の興行にして、恰も夕霧の三
十三回忌に當れど、凡て追善興行
は、必ずしも年忌に當れるにはあ
らず、「お夏清十郎五十年忌」の如
きも亦然り。夕霧も三十三年目に
三十五回忌追善の心にて、此の淨
瑠璃を興行せしものなるべし。

百年、千歳の秋の夕霧を、猶萬代の春の花、見る人袖
をぞ列ねける

山崎 與次兵衛 壽門松

解題

「壽門松」は竹本座にて享保三年正月二日初日の淨瑠璃にして門左衛門六十六歳の作なり。其の實説については『傳奇作書』後、中

享保三戌年近松門左衛門作にて山崎與次兵衛壽門松と云ふ淨瑠璃に、新町藤屋吾妻といふ傾城に身を打ち與次兵衛狂人となる仕組あり、かの椀久に似て同時の頃の人なるべけれど與次兵衛には證とすべき者なし是は全く淀屋辰五郎家屋敷關所となり城州八幡へ引籠りたれば其の放蕩の事を寫して八幡山崎の對に見立與次兵衛と拵へなしたるなるべし新町の傾城も淀屋辰五郎が通ひしは茨木屋吾妻與次兵衛が馴染しは藤屋吾妻なり、茨木屋幸齋奢侈の咎め請し事あれば藤屋とせしものか

とあり。『實事譚』に記すところも同様なれば恐らく此の説を引きしなるべし。

れど山崎與次兵衛吾妻の事實は全くなきにあらず。『落標』には、あづまの事を記して、

佐渡島與三兵衛家代々暖簾に、富士山の齋ありしゆへに誰がいひ初しや終に富士屋と家號に呼びし也……寛文中此家の抱に吾妻といへる太夫ありて越中夕霧にもならぶほどの全盛にてありし器量すぐれ天性位高く其上絲竹一通はいふに及ばず萬藝に通じ諸國の群客我一とまみゆる事を争ふ其中に攝州山本村に坂上與次右衛門といへる有徳人ありける或時此津に來りあづまの名高きにひかれ九軒町井筒屋太郎左衛門が方にて此あづまにふと折よく逢ひ初しより晝夜足を爰にとめそれより馴染をかさね揚詰の遊び井筒屋の座敷を建直しやりけり此大臣與次右衛門定紋三ッ柏にて有けるより太郎左衛門が座敷の針かくし残らず柏の金物を打したり……大臣山本村與次右衛門を世に山崎與次兵衛とぞいひかへたり其比にも珍敷事にてありしにや歌を作りあづま請だせ山崎與次兵衛うけだせ〜山崎與次兵衛そつこで請だせ三百兩と諷ひしなり其の頃女郎の身の代三百兩といへるはめづらしき事にて今いふ千金の

幅よりもすさまじかりし云々

『落標』の記事悉く信すべからずといへども、攝州川邊郡山本村に坂上與次右衛門なるものありて、同村に山本常念佛といふ庵室ありて、與次右衛門と吾妻との像を安置せる由『攝陽落穂集』(二)に見えたれば、全く痕跡なき事にはあらざるべし。古く流行せしものと見え、元祿十七年版の『松の落葉』卷四に、山崎與次兵衛踊の唱歌あり其文句には左の如し

吾妻うけだす山崎與次兵衛うけだす〜山崎與次兵衛今は思ひの下ひもとけ
て曲輪すまひのうさつらさをばきくも中々うらめしやく〜きくも中々うらめ
しやせうがの〜これ〜これ〜しましよかのそつこでうけだせ三百兩二
口合せて六百兩すつとしよてんびんはり口ちんからり。

淀屋辰五郎の實説と稱せらるる『元正間記』に、辰五郎が二千兩の金を調へ、吾妻の身請をして妾となしたること大坂にて評判高く、吾妻請出せ山崎與次兵衛の歌に作り、狂言に仕組みて淀屋が替名を山崎與次兵衛と出したる由を記せど、此の記事は右の踊り歌と淀屋の事件とを稍混同したる嫌ひなき能はず、恐らく古き踊り歌に

ある、山崎與次兵衛の名を假りて淀屋辰五郎の替名に用ひたりといふ事なるべく、山崎與次兵衛の名が此の時はじめて命せられ、なほ右の小唄の此の時作られたりといふの意にあらざるとはいふまでもなし。されどこれら『元正間記』の明晰ならざる記事によりて、『藩門松』を直ちに淀屋辰五郎の事實といふ説も起り、一鳳等亦是に雷同せしものならんか、或は當時淀屋事件を仕組みたる狂言の筋が、此の淨瑠璃に似たるより然かいひ倣したるものか、そは知るに由なしといへども、『藩門松』に現はれたる事實と淀屋事件とは類似の點甚だ少し。強ひて求むれば、太夫の名が二者共に吾妻といふことなれど、遊女には同名いくらもあり、殊に一は藤屋吾妻にして一は茨木屋吾妻なり。唯此の類似を以て、山崎與次兵衛を直ちに淀屋辰五郎の替名とするは頗る覺束なき説なり。さて此作の脚色を、『傳奇作書』に解剖して、與次兵衛の父を山崎淨閑といふは山崎宗鑑によりて命せしものとし、又た難波屋與兵衛が(俗)に是を南與平といふ吾妻を懸想し、母より頼みて吾妻と盃をなし、兄弟分となりて金を貰ひ、江戸へ行きて油商となり立身する事は、宗鑑が『職人歌合』の『寄とに都に出る油賣、更てのみ見る山崎の月』といふ狂歌より思ひ付きたるものにし

て、與平が吾妻を見染める事は、鍛冶屋仁藏が名妓吉野に懸想したる話を取りしなりと。

仁藏は七條通り駿河金彌といふ鍛冶の弟子にして、至つて愚直の男なりしが、太夫吉野の姿を見て思ひを焦せども、身賤しく及びもなき戀を啣ちける。吉野これを聞いてあはれに思ひ、或夜仁藏を招きて唯一夜彼れが心に其の身を任せれば、仁藏は其の情の深きを感じ、且つは果敢なき我身を歎じ、明の日桂川に身を投げて死したりといふ。

此の淨るりは、享保十年西澤一風『昔米萬石通』に作り替へ、濡髪長五郎放駒長吉の事を仕組み、寛延二年竹田出雲は更にこれを作り替へて『双蝶々曲輪日記』を出し、與次兵衛は與五郎と改り、長吉長五郎の達引が山となりて、全く主客を轉倒するに至れり。

山
與次兵衛 壽門松

上之卷

●筑波根の峰より落る瀧の白玉云々
川、戀ぞつりて瀧となりけるもの
いふ後撰集にある陽成院の御製と
「龜の尾の山の岩れをとめて落る
瀧の白玉千代の敷かもし」と詠る古
今集此のこれかをの歌とをとり合
せて枕にかけり、本歌の筑波根は
つくば山のみのことなるを女兒
の羽子板にてつくばれのことにと
りあはせたり。(瑠璃天狗)
●羽かはす 羽子は昔より二三
人してつき合ふものなれば、羽子
の飛び交ふ状をいふ。
●比翼の羽子板 比翼の鳥の羽と
うけて一對の羽子板に利かせた
り。色町なれば凡て戀に縁を求め
ていふのみ。
●本摺子も研けば 本摺子の如き
黒きものにても研けば光澤の出る

に、まして禿などは願願れて、おの
づと太夫の品の備はるとをいふ。
●未長き返事 禿が人に呼ばれて
返事する時、其の語尾の長く引く
癖あるをいふ。
●抱への松 太夫職の。
●初子の日 子の日には松を曳く
の古例あり。古歌に「子の日する
野邊に小松のなかりせば、千代の
ためしに何をひかまし」とあるを
取りて、千代も根引は絶えずまじ
といへり。
●あへかこ べかこのこと。
●情口舌の萌出る 以下の文は此
の日新町にて、太夫道中の景色な
り。
●雪間に素足 正月なれば雪の
ないひ、其の雪と女郎の素足を對
し、歩きたびに焚きしめたる伽羅
の香の薫るをいふ。
●霞の秋虹の帯雲の上着 太夫の
扮粧の麗はしきを形容したるなり
伽羅の香の匂をいひたれば、其の
煙の盤盪たるを形容し、霞といひ
虹といひ雲といへるなり。
●新艘突出し、 新艘は禿立の女郎
突出しは素人より直ちに女郎とな
りたるもの、唯こゝは種々女郎の
品あるをいへるのみ。

返やしやと、袖に取付く禿共、 鬨ナフ取付きやんな男
に突かすりや留まるとは、 頭から知れた事、 地珍しそ
うにと振離し、手を拍いてほつほらは此方や知らぬ、
あへかこの新介と走つて内へ駈込めば、そりやく逃
すな捉へよと、羽子から起る諍ひは、フシ飛ぶが如くに
追ふて行く、フシ情口舌の萌出る、雪間に素足伽羅香る、
霞の秋虹の帯、雲の上着をゆりかけて、新艘突出し出
立ばえ、 歌 紺に鬘金に薄染淺黄、織物縫物染物盡し、
小紋三重染二重染淺黄、鹿子に鶯鹿子、紫鹿子に經る
年の、憂さをも芥子の紅鹿子、極彩色の 越後町、
三筋に三つの春たてば、松若緑梅時節、やりが前垂齒
さす、空も酔ふたり人も酔ふ、初盃の内祝ひ、過て諸

●紺に鬱金に云々 禮通りに歩く
女郎の衣服の色彩のきらびやかな
るないふ。

●うさなも芥子の紅鹿子極彩色の越
後町 冬の憂なも消すといふ
事な芥子にいひかけたなり、芥子は
至つてちいさきもの故佛香にも須
網を芥子に入るといふ噂ありて細
かなる鹿子を芥子鹿子ともいふな
り、鹿子の事は伊勢物語に「時しらの山はふしのれいつとて鹿子またらに雲の降らん」といふ歌有て鹿の子またらとは鹿の子
の背にむら／＼白き毛のあるに富士の雲の班なるをたとへていふよし古書に見えたり、それより括り染にする事を鹿子といふ
なり。極彩色の繪といふ事を越後町にいひかけたなり。「瑠璃天狗」 ●松若縁梅時節 松は太夫、若縁は禿、梅は天神。こゝ
し女郎の品をいへり。 ●やりが前垂遣さす かりは遣手にて、當時の風俗として西の前垂をしたるなり。天も酔たりとは「和
漢朗詠集」に出たる菅相摩の「春之暮月、月之三朝、天酔于花、桃李盛也」の詩によれり。 ●紫 吾妻は藤屋の地へなれば、藤
の色と劇第一の全盛なれば、色の王といふ所て紫とはいへりしなり。 ●名木 名花といふに同じ。松に縁を求めて名木といふ。

禮のよね揃へ、フシ雪駄の音のしやらくくと、地春めく
中に紫は、色の司や藤屋が内、地吾妻といへる名木の、
松には續く花もなき

●春知り顔に七つ屋の云々 「瑠璃
天狗」に「玉葉葉定頼のとしふれ
とかはらぬものは鶯の春知りそむ
る聲にぞありけるといふ歌と「谷

戀と惻發を目の張りに、情こぼる、道中は、往來の人
も立留り、地花を見捨つる雁金も、歸り廓の晴れ處、
身にも年にも恥もせず、七十ばかりの古婆々の、古綿
帽子の頬冠り、春知り顔に七つ屋の、藏の戸出る鶯茶
の、布子の袖を摺れ纏れ、附纏ひ行く足元、遣手のか

の戸出る鶯とよみたる歌とを取
り合せて世話事におとしたる所例
の平安子が妙作也とあり。女郎
の極彩色に比べて、みすばらしき
布子姿の老婆、質屋の蔵より請出
して着て来たとの見立なり。

●おろせ

●すいこな奴 醉狂な奴の詠り。
醉狂は物敷寄の意。

やが聲高に、聞これ此處な婆様、此廣い道を何ぞいの、
高砂の尉と姥が離別したやうな態で、太夫さんに摺れ
纏れ、エイ嫌らしい小舌たるい、あの跡から同じ様に
ついて来る若い男は、おろせの風とも見えぬ、此方の
連か、地とつと、除てもらはふと押遣ども腹立たず、
チ、御道理様や御免なりませ、音に聞えた吾妻様、
お慮外ながら染々と、お咄し申したい事御座りまして、
廓をぶらくいたします、何卒お聴入なされてお情に
預れば、地婆が後生も助かります、大事のく太夫様
に、鹽の辛い梅干婆が、すいこな奴と思召そ、フシお恥
しやといひければ、聞チ、いや、口合をやらるよ、こ
れ女郎様達の全盛を見掛て、姨の祖母のといふ騙りこ

(666)

八幡

●あいく山崎／＼……ヤア此の誠
に金を出させ までが踊り唄。

とは古い、其爲の遺手、これ眼が黒い見て置や、
ナフ怖い事いふて下されな、騙り事いふ様に見ええす
か、ア、貧乏はせまいもの、連合は船場で隠れもない、
千貫目の廻しもした難波屋の與左衛門、爲換の金が滞
り、大阪を仕舞て八幡へ引込果られた、其難波屋の婆
で御座る、彼の頬冠は獨息子、千貫目の大釜の湯氣で
育つた奴なれど、今では錢壹貫の廻しもならず、難與
平くと、其日過の日雇取、騙りと見ゆるもお道理と、
老の繰言眼に涙、問はず語りに古へを、フン思ひ出した
る風情なり、地引舟秀遠慮なく、ム、踊唄に諸ふは婆
の事か、ナドリ歌ゑい／＼山崎／＼、八幡山崎難與平の
お祖母、ヤアこの誠に金を出させ、盆に御座れと笑ひ

(667)

●五器提の瑞相 乞食をする前兆
の意、瑞相はめでたき兆にて乞食
には相應せれどし、辨通善惡に
はらすいひしなり。

●重山 引舟の名。人立の繁きと
にし利用したるなり。

ける、吾妻は終始貫ひ泣き、皆の衆は何笑ふぞ、
であらふがあるまいが、勤めする身の習ひ、おちめと
聞けば見捨られぬ、吾妻を見込で頼むとは、いとしら
しい婆さん、傾城冥加聞く氣でこんす、地此處は人立
重山、ちよつと横町の小店をかりの揚屋町、此處へ此
處へと手を取れば涙を流し、恭なや／＼、調お咄し
申す事とても、此は、が此年で何の願ひござりましょ、
月とも星とも思ふは彼の與平め、いつぞや人に雇はれ、
此新町へ文の使の次手に、吾妻様を見染てホ、
ホ、親の口からア、おはもじ、戀病みに煩ひます、家
半隣家の聞えもあり五器提る瑞相がど叱つて、追出
しても退けふと存じたれども、ア、昔の身ならば、若

い者の手かけ妾のといふ最中、申し惜いが、太夫様達
 一年二年買詰ても、何處の痛みにもならぬ身代、其氣
 で育つた奴の事、地ア、可愛や何うぞしてやりたいと、
 母が瘦我も子の望みも金銀といふ兵には、又してもへ
 し付られ、見殺しにする子の命、詞氣遣ひするな、情
 を商買になさるゝ吾妻様、歎き申してお盃戴かしよ、
 それで思ひ切居れと、彼奴を連れ附纏ふも子の可愛
 さ、母が命が一夜さの傾城代にもなるならば、今でも
 死んで見せませう、押付がましい事なれど、ちよつと
 ばかりのお盃、是で上つて下されと、袖から出す小半
 入の徳利に餘る親心、缺盃の時繪の猩々、笑ひこゝじ
 て涙の種、泣く事知らぬ遣手さへ、ソソ彼方向くこそ哀

●せつこ

切なるも。

れなれ、地聞程吾妻押俯伏き、粹な婆さん、私が言ふ
 詞がない、與平様は何處にぞ顔が見たいござりやせと、
 呼れて祖母も一時に、千歳を延ぶる門松の、影にかく
 るゝ難與平、ソソ指を喰へて這出る、詞袖口取て引寄せ
 惚れたゝと人毎に、誠もない口癖さへ、勤めする身
 は先譽れ、公平の様な男を煩はしたは此吾妻、嬉しう
 ござんす忝い、命にも替え身にも替へ、逢通したい者
 なれど、戀といふてはちよつとの詞もかはされぬ、深
 い男があるわいな、山崎の與次兵衛様と申して、新艘
 の初床より、面白いと悲しいと、譯のありたけ仕盡し
 て、勤めは名ばかり、夫婦といふて今一人と、外には
 漏す水もなし、といふて母御様の御眞實、せつにお前

(670)

のお心入れ立ながらの盃に、酌流さんも本意でなし、
 同これ重山、預けた物それ爰へ、地あいと應へて引船
 が、秋の内の服紗物、色こそいはね山吹の、十兩ばかり
 一包み、是も可愛ゆひ山様ゆゑ、譯のある金なれど、
 母御様へ進ぜます、同與平様の身の廻り、立派な大盡
 に仕立て下さんせ、渡り並の容に身を賣るは傾城の習
 ひ、同枕をこそかはさずとも年月の物思ひ、酒で流し
 て下さんせと、渡す小判を難與平、吾妻が膝へ控と投
 付け、同胴慾にござる曲がない、俺や金にや惚ぬ、貧
 乏者と侮つて金で口を塞ぐのか、我等が宿は庭かけて
 七疊半、貧乏神のお旅所といひさうな住居、師走正月
 も同じ布子一枚なれど、傾城に金貰ふて揚屋へ往たと

●顔まぶらせ
ないふ。

顔を見守らせたる

(671)

言れては、此難與平人中へ頬が出されうか、地戀にか
 こつけ物取とは、目きゝが違ふた吾妻様、七十に餘る
 母まで各々に顔まぶらせ、無念にござる、許して下さ
 れ母者人と聲を、忍びて泣けるが、地ア、よふ思へば、
 怨みしは不調法、同追付與次兵衛殿に請出され奥様に
 備はるお身、我等は日雇取内方へ雇はれて、沙汰でも
 すればお身の爲に悪いと、後を大事になさるゝは尤々
 氣遣ひなされなふつゝりと思ひ切ました、地鼻の先ば
 かりで戀せぬ證據は是なりと、腰のさすが引ん抜て既
 に小指に押當れば、吾妻取付き待て下されあやまつた
 と、漸々に押とぐめ、同金進ぜたは過まりなれど、身
 の納りを思ふなど、そうしたさもしい吾妻じやない、

●いしんじょ 須岡又は片意地の意。瑠璃天狗に「いしんじょ」は、石丈と書いて石の如くかたき人といふとなり、丈は丈夫といふ事にて男の通稱なりとあり。

●蛇の目の紋 「傳奇作者(後、中)に「極久の紋所は扇車なりとは自笑其語が作の双紙に出で山崎與治兵衛の定紋は蛇の目なりと藤門松にあり淀屋辰五郎の定紋は未だ考へねばしらすといへども若しや蛇の目の紋にやあらん」と。此の蛇の目の紋に何の據り所のあるとに未だ考へず。

地與次兵衛様には稚な馴染の本妻あり、父御様は隠れもないいしんぢよなり、私から起るお宿のもやく、恪氣やら御意見やら、後の極月の二十日前ちよつと逢ふてそれから、不首尾くの文ばかり、をろせ揚屋の付届け、初紋日の買論も、私が獨の胸算用、年のある上年切増し、男の恥を包む程、身脱けのならぬ此苦患、廊で婆になる吾妻、かはいと思ふて下されと、恥も哀れも打明けて、つがなくこぼす正月の、涙も顔に憎からず、絞る袂の上一重、襠脱で帯解く、逢ふ夜の床の温まり、又逢ふまでは冷さじと、深い中着は鳥羽玉の、黒羽二重の蛇目の紋、與次兵衛様のお小袖、暫しも身は放さねど、是が私が心づばいこれを着て、

●あやかり物 あやかるは優れたる人に感服して風姿などの肖るをいふ。轉じて仕合物といふ場合にあやかり物といふ。

向表向の客になつて下さんせと、地小袖渡せば難與平、これが誠のお情、私戀は叶ふたと押載いて泣くばかり、地母は始終つゝくりと、のふお傾城の詰開きは、むづかしそうな事やとて、フシ耳を澄すぞ殊勝なる、地與平涙押拭い、お前に逢ふて眞實の、詞涙といふ物覚えました、金の草鞋で尋ねても二人とない女郎に思はるゝ、地與次兵衛殿はあやかりもの、着物も戻しませう、代りには以前の小判貰ひましたと、取る手を母がはつたと打ち、詞や卑怯者、今の詞がはや違ふ、難波屋の家に底付るか、下卑た奴めと叱られて頭掉り、いやいや身の欲に致すにこそ、吾妻様と與次兵衛殿これ程の深い中、聞捨ては男がたゝぬ、此金を此儘置けば揚屋

(674)

●庭錢 「俚語集」に「遊所に花にやる錢の事也。庭とはかりし三「四鶴置土産」先女郎へ長徳寺貳百、宿のウ、に金子拾兩庭につはるゝとあり。ひとり客より遊はすにあらず、故日には遊女より揚屋へやる庭錢には極りあり。傾城色三味線に「大夫正月節句、庭錢十三貫文、天神六貫五百文、鹿戀四貫文」とあり。

●どか儲けどか損 相場などにて一時に巨利を得、又一時に大損をなすをいふ。油は米と同じく當時投機の資料なり。

●三ツ羽の征矢 征六は直矢の轉なりと。戦陣の用にして最も精銳の矢なれば、的中して外れぬとに喩ふ。

●二歩では高砂野々宮 江戸の道中二歩では高いといふと、高砂野々宮と謡曲の名を取りて洒落たるなり。

の庭錢、埃になつてすたります、地小判と見れば小判吾妻様の身の油、金を俺が預つて此方も身から油商ひ、どか儲すればどか損する、づると江戸へ下つて十兩を百兩、百兩から二百兩、二百兩から五百兩、段々儲けの商ひ拍子、千兩にするは三ツ羽の征矢、關東廻しの商ひの筋道は我等が家、吾妻様根引にし、與次兵衛殿とお二人悦びの顔を見て、今日の情の御厚恩を送らねば、此難與平立たぬ、常々金がなく、是を買ふて斯う賣てと、心當の事どもあり、江戸の道中、二歩では高砂野宮、母者人は横堀の妹婿に預けりや緩り、其内金も上ばしましよ、難與平が立身、吾妻様の御出世、與次兵衛殿の本望、千里一飛ひ一拍子、フシ一器量

(675)

●結ぶの神 男女の間を取持つ人を褒美する詞。本来は産靈の神なれど、誤り轉じて縁を結ぶ神となす。

●井筒屋 揚屋の名。

●露 經頭のと。

●贅こきの彦さん 滑上卑肉ないひて世に憎まるゝを贅こきとい

ある男なり、地聞けば聞程頼もしい御心底、此吾妻に戀ある身で、與次兵衛様に末長ふ添せうとて、俄に江戸の思立、二人が中の結の神さん、門出の盃、しみじみお禮申たし、井筒屋へ伴ひましよ、母御様は如何じゃへ、イヤ與平が望み叶へば、此世からの生佛、太夫様おさらば、地いよく頼み上ますると與平が背中しと、打ち、こりやあやかり者、嬉しいかくと、興を持せてやはらぐる、母は太鼓子は大盡、はつと打たる露よりも、太夫が情いたゞいて、チクリ歸るさ、急ぐ長持急ぐ、いそぐ賑々揚屋町、遣引船がアレアレ太夫さん、阿波座から頼い和郎が見えるぞえ、地眞に、贅こきの彦さん、しかもづぶ、酔ふた足本

わん天綱島しあめおの登こさの太兵衛と同じ。

●こんた 呑込んだの響。

●新酒の酔

新年の酒に酔ひたる

見咎められては猶悪口と、小テクリ手繰り寄邊の井筒が本内證花車に吹込めば、こんたとはかり與次兵衛が、小袖をかりの難與平、見馴れね揚屋の大騒ぎ、戀ふるひしてみすばらし、地足はどれても目角は強き、袴肩衣横筋交い、町一ばいをひよろくと、直にどれこむ井筒が座敷、吾妻は烟管の吸口閉ち、物もいはずにあら向く、與平は人に見られじと、炬燵の内へ顔差入れ、被く布團の緞子より、フシむりやうの事ぞ思はるゝ、彦介花車を引提へ、詞コリヤ花車様め聞給へ、正月は新春の御慶目出度く申納め候、このく此鼻は新酒の酔紛れ積る恨みを申始め候、ナ何んど、否か、面白、其處な遣手め、よふ聞け、いかな吾妻どのでも、太夫

●桓武天皇無體の後胤 昔し戦士が一騎打の勝負をなす時、互ひに家の系圖を名乗り合ふと軍記に見えたり。例へば「桓武天皇五代の皇胤鎮守府將軍常陸の大掾平國香云々」といふが如しその假名なり。

●加部の住人 攝津國豐島郡服部村。

●伏見榎木町 *

●生爪 髪を切り爪を放し指を切るなどいづれも女郎の心中立なり

様でも、畢竟直段の高い總嫌じやないか、何んと、否か、嫌とは申されまい、それに山崎與次兵衛には賣て、此葉屋の彦介には何故賣らぬ、一文一錢直切らぬ拙者を、如何なるものと思ふらん、忝くも桓武天皇、無體の後胤、攝津津の國服部の住人葉屋の彦介、大阪に五間口の店も所持仕る、貸藏も持參つかまへさ、大金持を知らぬかナ、ア、慮外ながら、否とは言はれまい、都島原上林の高橋に、金遣ふて髪断らせた、伏見榎木町枳屋の高尾に、又したゝか遣ふて、心中に生爪を放してくれ、また鼻も殺してくれた、耳も殺してくれた、大々盡の彦介山崎の與次兵衛に仕負て、藤屋の吾妻に三度四たびふられては、此彦介一分たゝぬ、半分もた

●ひらぶる 引つけるとなるべし。

●頬がまぢ 頬指といふも同じ。頬のまぢ。

●身上り 女郎自ら花代を出して動を退く事。たとへば親の命日など客に接しともなき時に已を得ず此の事を爲す。

「ぬ、今日から三日ひこずるつかんた、相場の高い總
嫁の買初め仕り、金銀米錢ぐはらりくと撒散したら、
吾妻がくるりくと廻らざ賭じや、サアくく買ふ
たと、地しなだれ寄れば吾妻むつと頬がまぢ、びつし
やりとみしらせ、詞エイあた贅ばつた聞ともない、其
高橋とやら高尾とやらは、其方の様なうつそりでも、
金さへ遣へば髪も断る爪もはなそ、京や伏見は知らぬ
が、此新町の傾城は魂が違ふた、恐らく此吾妻はいか
なく、一生身上り仕暮しても、其方の様な意地腐り
に、小判の挺でも動く女郎じやないぞや、がやく口
利く 男の意地ならば、手柄に吾妻を廻して見やと
ずんと立つ、詞ム、張の強いに猶惚た、此彦介は吾妻

●山又山 謡曲「山姥」懸河津々として、巖岫々たり山又山といづれの下り背の形か削りなせるどい 酔どれのどれなり。無意味力。

廻して見しよ、まはるはく、遣手めが頬がぐるく
廻るは、爰の家もまはるぞよ、まはるはく山姥が、
山又山に山めぐり、面白、地如何でも斯うでも吾妻
殿を、フシ奥へ連てと引立る、地どれに下地の無息力、
これはどうぞと引除る、引舟に向ふ風花車は彼方へ押
込んで、遣手も取てやり梅の落花狼藉、昔を懐えぬ難
與平、齒切をしても堪忍ならず、彦介が足首を炬燵の
内よりしつかと取り、うんとしむればあいたたよ、
詞ヤレ足首がちぎるよはと目は撃むれど口減らず、
詞此炬燵には狼があるそふなと、地蹴もじるを引倒し
蒲團押除けつと出、熟柿臭い彦介が、鼻の先に澁柿
の、フシ澁い顔して立跨かり、詞ヤ此奴何じや、何者と

は眼を開け人じや、男じや、男といふ者見て置け、うぬは何者、葉屋の彦介といふ男見ておけ、ヤ生臭い男呼はり、おけく置てくれ、額に毛抜もあてる者が、いとしばげに女郎衆弄つて何んの男、サア男が定なら俺とせい、サアせぬかい、いやせぬかい、男同士の喧嘩といふ者教へてやろとつと入り小腕捻上げ、引擔いで逆どんぶり、ぎやつと言はせ頭顛倒、腹這ひにはつたものめらせ、腰骨を七つ八つうんといふ程踏付て、鼻歌に懷手、吾妻つきく可笑しさ味え、フン笑ひを殺す笑止顔、彦介漸々起上り、聞えたく、與次兵衛が間諜者、彦介を踏たぞよ、山崎與次兵衛覺えて居れ、じたが踏れても此方に七歩の勝、正月早々俺

●春盤

くひつみは蓬萊師と同じ。

が身代踏廣げてくれたな、殊に今茲は戌の年、犬は土に寝るもの年八卦に叶ふた、地コリヤ人の巳午が恵方ぞと、肱を張て立歸れば、踏れてさへ彼の頤、人を踏んだら如何あると、チクリ跡は笑ひの賑ひや、正月買の騒初め、飾の下では三味引、梯子の蔭では寶引、節分豆撒き年男、槌の子抱て稻積んで、若恵美壽にかけ鯛、蜜柑、柑子、橘、橙と祝ふて何處も吉野、樞勝栗噓でござらぬ、フン本俵、春盤に土器さすぞ盃鳥渡押へて、去年より今年はみづくくく、若みんづりの井筒屋と、フンわきて賑々賑はへり、粹の粹を越えたる戀の山崎與次兵衛、駕籠を飛ばせて西口より、おろ池がいきつて旦那お出といふより家内、こりや日出度

いと跳足で飛んで門口まで、福の神のお迎ひ、ちやう
 さやよふさや千歳樂萬歳樂、地奥の座敷に設けの炬燵
 亭主蓬萊内儀は銚子娘は土器、牛房も身祝ひ太夫様も
 御全盛、お庇て我等も仕舞ひは緩りくわんすで、先づ
 大福の口開に、替つた咄がこんすると、吾妻は與平を
 與次兵衛に引合せ、ありし有様一々を語る詞に與次兵
 衛、詞豫て意趣ある葉屋の彦介、何うがなと存する折
 節、忝い與平殿、此以後は何時まで心安ふ御意得ま
 せう、地お手上げられいと一禮す、見馴れ言馴れ聞馴
 れぬ、詞遣ひも第一は、足のしびれに難與平、フ只あ
 いくとばかりなり、詞御律義で重疊く、江戸へと
 の思立尤々、吾妻が事は苦になされず、地一廉の儲け

●飲や歌へや一寸前は暗の夜
 詠に一寸前は暗の夜飲や歌へや
 さいんざといふより又「小町踊」
 立園が句に「昼日の一寸さきや五
 月園」とあり。當時の流行歌にも
 取り入れたるものなるべし。
 ●けたいまし 俄に立腹く貌。

して仕合の上落、門出に終夜、歌飲めや諸へや一寸前
 は闇の夜と共に、地母が案じて居ませふ、いかい御造作
 與次兵衛様、吾妻様皆様つらりと遣立た、お暇申すと
 立出る、餘りといへばけたいまし、今宵一夜は苦し
 るまい、いやく一步は寸の初り、油断は稼ぎの大毒
 と、帯引解けば吾妻取付き、寒い折柄御遠慮無ふ、矢
 張小袖を召ませい、道中も大井川とやらいふ川は、い
 かふ危ない事じやげな、地御無事で吉左右待ちまする、
 やがてと別れ與次兵衛も、見送つて與平殿、詞山崎に
 は兄弟ありと此與次兵衛御心便に思召せ、慮外ながら
 江戸にも兄弟ありと思召し、互の無事は状通と、地別
 れて跡は戸障子しめ、月も雲井に寐静り、地松に嵐は

●三番太鼓 限りの太鼓のとき。

●大門打 廊に狼藉ある時は、直ちに大門を閉ぢて陸義をするゝ作法なり。

軒して、地與平は九軒を一足二足三番太鼓打やみて、廊淋しき折こそあれ、待伏したる葉屋の彦介、蛇の目の紋を知へにて、與次兵衛と見るよりも、瞞し賺してはたと切る、ひらりと外し難與平、さては宵の白痴者、意趣返し待伏かと、つゝと入て跳倒し、小刀を逆手に滅多突き、眉間を突かれのた打て、ヤレ人殺しと聲立つる、見付られては出世の邪魔と、おくれを見せぬ難與平、フン風を追ふてぞ逃失せける、地町中俄に騒出し、棒よ熊手よ提灯出せ、大門うてと轟けば、彦介はうろくと、調相手は山崎與次兵衛、井筒屋の客めじやと、地喚き立つれば與次兵衛、聞くより胸にはつしと堪へ、與次兵衛これにと立出る、聲を知へに彦介は

●罪なくて配處月 「徒然草」に「不幸に愁にしづめる人の、かしらおろしなど不來に思ひとりたるにはあらで、あるかなきに門さしこめて、待ともなくあかしくらしたる、さるかたにあらまほし、願基中納言のいひけん、配所の月罪なくて見ん事もおぼえぬべし。古人の物敷寄は兼好法師の理想なり。配處の月を見んとは如何なる考にや從來なしとなり。

後より慥と抱留め、調相手は捕へた組伏た、騒ぐまといひければ、地吾妻引船遣手まで、狂ひ出れど放さばこそ、ハアはつとばかりの涙さへ、何と成身の 三疊

中卷

「おぼつかかな、罪なくて 地配所の月を見んといふ、古人の物敷寄如何なれや、日影も見せぬ座敷牢、九軒町の喧嘩、葉屋の彦介手負し事、代官所の沙汰となり、相手山崎與次兵衛と訴ふれば、與次兵衛も男の義理、難與平とは顯はさず、我身の科に引受け、親淨閑に預けられ、相手の疵は養生し、死ぬるか本服か、二つ一つの左右次第、我も生る瀬死ぬる瀬を、定めかねたる

(985)

●飛鳥川 大和國の名所なり。此の川葛城山より流れ出る故に、小川なれども瀬瀬の變ること早きよきとに喩ふ。「古今集」の歌、世の中は何の常なるあすの川、昨日の瀬ぞ今日はせになる。

飛鳥川、フツ明日が日知らぬぞ力なき、地一家の内は取分て、女房お菊の物思ひ、一日も氣を詰めぬ人、煩ひも出やうが何がな心慰みと、あぶる餅も我胸も、共に焦るよ、フツ庭傳ひ、障子明れば與次兵衛、色も青ざめうつとりと、フツ氣あひ惡氣に俯伏けり、調三三日はお食もすまぬ、何處ぞ悪くば薬でも参りませ、自體お前の短氣が私が明暮苦になつた、若し私にいたづらあらば、先の相手を切も殺もなさるゝ筈、ハテ傾城は賣物幾人も賣いで、よしない法界悋氣から此難儀も起つた、但其吾妻と私と一つに思ふて下さんすか、地斯んな事知つたらば一寸も出すまいもの、悋氣せいで今では口惜うござんすと、恨みまじりのうろく涙、調い

(987)

●石清水八幡宮 誓ひの詞、石清水は山城男山八幡の。

●奈落の底 何處までもの意、奈落は地獄の。

ふてたもるなく、一天下の人よりも、そなた一人に恥しい、去ながら石清水八幡宮も照覽あれ身は斬らぬ、なれども彦介めが與次兵衛やらぬ覺えたかと仕懸た喧嘩、身が斬たも同然、殊に其切手とは男同士の義理ある中、地奈落の底まで此與次兵衛が切たになつて、相手が死んだら切らるゝ覺悟、とはいへ彦介め左程の疵ではなけれども、強請で金にするもがりとは鏡にかけた事、見すゝ金で買はるゝ命、此方の藏の金銀では買れぬさうな、預けられたは母の命日、皆是れ親に不孝の罰と、フツ投首するぞ不便なる、調されば私の父様も、それを言ふて淨閑が聞えぬ、吝いも事による、千兩二千兩入ればとて、獨子の命にかへらるか、地欲を

●あひやけ 妻の父の父をあひやけといふ。即ち相男の事。

さへ離るればつる埒の明く事、口惜い此治部右衛門、浪人の身でなくばと、くいく言ふて恨言、多分今日も見えませう、父様の袖引て耻しめて言はせたら、何程吝い親父様も、得心なふて何とせう、アレ父様の聲がする、聴て好い事聞せましょ、調もう往やるか、又後に見舞ふてたも、地いとしや淋しからふのと、夫婦の顔も打萎れ、涙隔てゝ引立る、明る障子の明りにも、暗む心を哀れなる、地與次兵衛見舞として毎日淀の渡舟、梶田治部右衛門はあひやけの聲を思ふも娘の爲、老の心を悩せども、父淨閑は左もなくて、調ヤ治部殿お出、昨日のさしかけの將基勝負付ましょ、サアござれ、これは餘りな淨閑老、拙者が毎日老足を運ぶも、

●成金 將基の通語。敵の陣地に侵入したる駒は、凡て金將の資格を兼ねるが故に成金といふ。

●馬 桂馬の事。

●深田に馬を駈落し云々 此曲「深田に馬を駈落し、ひげどもあがりすうてどもゆかぬ望月の駒の、しらも見えはこそ何とならん身のはて云々」

●これ父様：思案して見さしやんせ 此のお菊の詞は、盤面の駒に託し、夫與次兵衛が脚を金銀にて賭はんとを諷するなり。

與次兵衛事氣遣ひさ、將基さしには参らぬ、昨日の勝負は何方らへなりと付てお仕舞くといへども、いやく馬鹿奴が事は運次第、昨日の駒動かせず置ました、調サアござれ、然らば勝ても負ても是一番、夕邊から盤の上とつくと見定め工夫した相手とさすはこはもの、お手は此方かサア遊ばせ、先づ飛車先きの歩をつきませう、ヤ此成金して遣ふでの、斯う寄りませう、淨閑頭を叩いて、ハア、南無三、此馬落た、調深田に馬を駈落し、引けども上らず打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えはこそ、ナサスむづかしゆなつたと、案じける、地お菊盤の側に寄り、これ父様、彼方の方が落れば此方も落る、両方の睨合で何時までも

埒明ぬ、迷惑する駒は只た一枚、淨閑様のお手には金銀が澤山ある、欲を離れて金銀さへおうちなさるれば、これ此父様の向ふの淨閑様の此馬は助かる、地何卒手にある金銀を打出させます様に、思案して見さしやんせ、合點かくと袖を引ば、治部右衛門打首肯き、調子、くく能ふ智恵付た吞込んだと、地いへども淨閑氣も付かず、調親じやと思ふて助言いふまいく、又ちよつこりと歩で合いたそ、ム、シテお手に何々、淨閑が手には金三枚銀三枚、歩もござる、此歩で廻したらまだ金銀が殖ましょ、いかい金持浦山しいか、金持とは此角が睨んで居る、斯う寄たらば金銀出して打たずばなるまいぞ、でも金銀は放さぬ、桂馬をあがる、

治部右衛門堪へ兼ね、ハテいかい、吝嗇坊、澤山な金銀握りつめて何になさる、来世へ持て往るゝか、これ御覽なされ、此飛車を斯う引けば、天にも地にも只た一枚の此方の此王が、片隅へ座敷牢の如く追籠られ、今の方に落るが金でも銀でも打散して、圍ふて見る氣はござらぬか、我等が吝いは知れた事、座敷牢へ入らふが、都詰にならふが、金銀は手放さぬ、歩あしらひでも見しらせう、此方も歩を以てぶに首を提らるゝが悔みはないか、構はぬく、先に逃て居ませう、コレ其内に香車の錠を以て錠玉に上らるが、それでも金銀出すまいか、勿體ない事、錠玉に上られうが、獄門に上らふが、手前の金銀は放さぬくと、地兩馬強き欲

●此王 治部右衛門も亦王將を與治兵衛に託して譲す。

●都詰 將樂の通語にて、盤の中央の目にて玉を詰めるを都詰といひ四隅(香車の位置)の一にて詰めるを都詰といふ。
●ふに首をさげらるゝ ぶは歩にて、刑場などの難卒にかけていふ。

●手見せ禁 毒瘡の通話。

毒門松

の皮、傍てお菊は氣を揉て、包む涙も手見せ禁、フシ命
 手詰と見えにけり、治部右衛門腹立顔、盤中の駒搔
 寄せ引摺み、淨閑が眉間へぐわらりつと投付たり、お
 菊はつと驚ろけども、淨閑は恟ともせず、治部右衛門
 膝立直し、恥を知れ淨閑、あひやけは元と他人、駒
 を頬へ投付られ、咎めもせぬ耻知すにいふも國士の費
 ながら、將基に事寄せ金銀出して扱ひ、與次兵衛命助
 けよといふあてと、合點せぬお主でなし、歩に首を提
 られ、鎧玉に上られても、金銀とては出さぬとは、治
 部右衛門に氣を焦せ、面白いか可笑いか、其方も獨子
 此方も獨娘、兩方共に懸替なし、聲を子と思ふて居る
 が嫁を娘と思はずか、與次兵衛が斬られたら、可愛や

●馬が合ふ 意氣の投合するをい
 ふ。こゝは將基の段なれば馬の字
 を用ひたれど、然の字か用ふべし。
 「色道大鑑」にうまいを栗柿などの
 然せる事とし、轉じて男と女と中
 のよき事や心中の逢したる事に用
 ふる由記せり。即ちいづれも味の
 よきをなうまが合ふといふ。
 ●情張て 剛情を張るに同じ。

毒門松

菊が歎ふかと思遣てたもらぬは、エ、去とては恨めし
 い、縁組の時婆が留めて、小身なりとも侍に縁組たい、
 何んぼう分限者金持でも、町人とは馬が合ふまいとく
 れぐ留た、いや／＼名に觸れた山崎淨閑、武士交り
 もする仁と、地我一人情張て此頃婆が恨言、お主が吝
 い無慈悲から、五十年添ふ爺婆の、夫婦合えて不和に
 なり、我子の命に替へぬ金銀、さぞや親類縁者が飢死
 するとも構ふまい、我こそ浪人主人持た一家もある、
 物知らずと縁を組み一門の名を汚す、無念至極とばか
 りにて、喘き上げ／＼泣ければ、地淨閑もしば／＼目
 開侍の子は侍の親が育て、武士の道を教ゆるゆゑに
 武士となり、町人の子は町人の親が育て、商賣の道を

教ゆるゆゑに商人となる、侍は利徳を捨て名をもとめ、町人は名をすて、利徳を取り金銀をためる、是が道と申すもの、如何なる大病難病も、病には療治種々あり、國法で取らるゝ命には、人參で行水させてもいかなく、助からねど、金銀では助かる命の買るゝ金銀、前大事の寶といふ事を與次兵衛めが知たれば、此難儀は仕出さぬ、なんばう惜み貯へても、死では帷子一枚とは、此淨閑も知たれども、死ぬるまで金銀を神佛と尊ぶ、是が町人の天の道、金の罰の當つた奴まだ此上に惜氣もなふ、金出して如何なる天罰大難にかな遣ひ居るか、可愛ひ程猶出しかぬる、吝い名を取る此淨閑金銀ばかり惜むてなし、塵灰まで惜い物、たつた

●死では帷子一枚、死者を葬る時には、絹帷子を穿せて納棺するが故に、王侯富者も死んでは身に附けるもの唯一の帷子あるのみと。
●町人の天の道、町人の履み行ふべき道といふと。

一人の世帯が命、惜うなふて何とせうと、坊主頭を將基盤、とんと投伏泣けるが、治部右殿のお恨みも聲可愛さとは存すれども、左程に思召すならば、何故日頃、フシ引寄て、意見もして下さつたら斯様の事は出来まいもの、我子の痴氣は思はず、脇かよりの恨みが出る、子ゆるゑには愚鈍になり不調法申すも存せぬ、奥へ參る治部右殿、ア、死だ婆は果報じやと、涙に咽び立ちければ、舅も恨みいふ事も、泣く泣く表へ立出る、フシ跡にはお菊將基盤、何處へ取付く島もなき、淨閑様のお詞の道理は聞えた様なれど、金銀なければお命ない、彼の内蔵の金箱も用に立ねば將基の駒も同じ事、ア、慈悲のない親御やと、浮世の頼み涙にくれ

●行も山崎坂も山崎「増補松の落葉」卷三山崎通ひの唄「おもしろ山崎通ひゆくも山崎戻るも山崎心をとまるも山崎云々」の文句を改作したるものなるべし。原來此の山崎通ひの唄は海道下りの管歌なるべく、それゆゑこゝにも海道下の節付をなしたるなり。

●(そんじようそん) そんじようそんの、又そんじようそんなどもいふ。「狸跡集」に某所其など背くべきあり。途中にて町名などを尋ねるに、唯とは答へず手真似などにて、云々といふ類なるべし。

無常心や入相の、鐘物凌ぐ 三重(三)暮渡る、フシ鷹の數讀む、朧月、地泊り鳥の寄邊なき、藤屋吾妻がわくせきの、思ひを乗せて在所駕籠、淀の川水流れの身、海道行も山崎、歸るも山崎、霞が内の畦傳ひ、フシそりや打渡す丸木橋、地見馴れぬ目には怖ろしく、長地駕籠を留めて下立て、所體作るも町風に、譯なき夜半の松の風、裾吹返し呼かはし、戀の山崎そんじやう其處と、人の教へし家並も、所稀なる家造りの、裏門扉のかよりまで、フシさては爰ぞと知られける、前駕籠の衆此處が與次兵衛様のお屋敷、扉越に見ゆるがお部屋そうな、地いとしや彼れに押籠られてこそわしやあそこへ往くぞや、ちつと隙が入ふとも必ず待てや、戻りも頼むぞや、

烟草が無くば進ぜふか、地ツイ往て來ふと裾軽く、フシ寄る程堀の高ければ、伸上りく、伸上りても燈火の影も通さず隙間なき、用心厳しき内の體、嵐と共に路次の戸を、敲いて我が胸踊る、耳を壁に押當て、聞どひつそと音もせず、何時まで斯うして居たとて、誰が知らせの便もなし、吾妻が來たと呼らふかと、佇む足は釘氷身も冷え、渡り牙えかへる、地炬燵さへなき座敷牢、いとしや寐てか起てかと、お菊が見舞ふ駒下駄に、フシ飛石傳ふ足音の、サアこれじやと飛立ばかり、與次さんじやないかいな、あるにもあらず吾妻が見舞に來たはいなと、地聞くよりお菊はつとして、さても太い傾城め、何うする事を試んと、内より壁を

懐しげにほと／＼たよれば、ム、聞えたか、調定めし
 何處も締つて入事もなるまいと、私に心に思ふ事、こ
 まぐと此文にあり、篤くと讀で自筆の返事見ますれ
 ば、地今生の本望と擗越に投込んだり、ハア、誰が拾
 はふも知らいで、女房のある男の屋敷、遠慮もないと
 披けば見知たり、臘月にも見違へぬ吾妻が筆、仔細
 らしい一つ書き、調此剃刀はわたしが研く心の刃、も
 しもの折はかならず、さもしい者の手にかゝらず、
清い御最期のべく、時は違ふと日は同日、最期處は
 かはるとも、來世は一ツ蓮葉に、永き契をめで度し、
 エ、此剃刀の入れさまは、何うぞお命助けたさ、女房
 舅が泣きしみづき、父御様とも争ふ程の大事の命、澤

山さうに死ねと書た此文に、めで度し、何んじやの、
調男共に吩咐叩き出してくれふか、イヤそれ程夫の名
 が立つ、地直に逢ふて言ふて退けふと、フシ路次の戸開
 き立出れば、ナフ與州様か懐しやと、絶り寄る手を慥
 と捉り、調音に聞えた吾妻どのか、今の文も見ました、
 わしや與次兵衛殿の女房さくといふ者、遙々の處よふ
 ござつたの、定て主に逢たかの、知らしやる通りの
 難儀で、アレあの座敷に押籠られてはござれども、お
 れが逢せぬ、ア、此菊が逢せぬ、吾妻どものには疾ふに
 逢ふて禮言ふ筈、此方ゆゑに大事の家業も餘所になり、
 内は野となれ山となれ、夜を日に次での里通ひ、親御
 の不機嫌世上の悪口、此度の難儀それ見たかと、いよ

く人の嘲り、我とても女の身腹が立いであるものか、
 夫の耻辱さが無い女房といはれまいと嗜んで居れば、
 お菊は奇特な恪氣せぬ賢女くと、賢女ごかしの拜み
 倒しに逢ふて、吾妻どのに睦讀まれ居るはいの、此方
 を女郎かと思へば鬼か天魔か、此剃刀で人の男に死ね
 とは、死んでよくば此方一人死んだが好い、大事の男
 の膚は荒され、心の底は見探され、世間に悪ふ謠はせ、
 生る死ぬるの難儀も誰ゆるじや、傾城殿和女ゆる、
 地いき傾城の耻知らず、と積る恨みの高聲に、與次兵
 衛も障子そつと明け、彼方も此方も道理詰め、道理の
 無い我ばかり、二人の心思ひ遣り、顔は焚火の冷汗
 に、フシ消えも失せたきばかりなり、地いかほどお恨み

お叱りも、お前に逢ふて此吾妻が、申し上ふ詞はない、
 引手数多の身の上さへ、恪氣妬みは女の常、お心堅い
 町育ち、地誠なき傾城めが瞞しての賺しての、憎や憎
 やはお道理ながら、與次兵衛様に逢ましたは女房に
 ならふとも、手かけ妾にならふとも、申し交した事も
 なく、勤め計りも馴染だけ、夜を日にますお愛しさ、
 女子の泥む風俗、好い殿御持しやんした奥様、お世話
 はお前お一人、此度の騒動も人違ひを頼もしづくで、
 お身の難儀もわしから起る、相手も聽て死にそなげな、
 地悲しいは我身一ツ知らせて覺悟もさせましたく、廓
 を忍んで此有様、見付らるればみせしめに逢も合點、
 調相手が死んだら自害させまし、わしもお供と剃刀も

●樹落し
柵にて鼠を捕ふる仕掛。

用意しました、お主の名も流さず、わたしも情の御恩に、地命捨る心ざし、お前の御縁は妨げぬ、只たま一度お顔見せて下さんせ、其目を直に塞ぎます、ナフお慈悲ぞやと、懐中の刺刀喉に押當て、娑婆の名残と涙さへ、フン思切たる哀れさに、地お菊はやうく胸開け、袖引とめてこれ吾妻どの、義理にも命捨ふとは偽りにはあらぬこと、心底がいとしい、主も定めし逢たからふ、沙汰なしにそつと逢せましょ、地ア、有難い了簡深いお菊さま、大事の殿御を澤山に抱て寐ました堪えてや、詞ハテ取かへされはせまいし、それなほ此方の仕合せと、心解けたる路次の中、地お菊くと呼ぶ聲は鼻の淨閑、鼠取の柵落し手に持て、嫁は何處にと

立出る、アレ爰へ親仁様、折が悪い先づ少時と、吾妻を堀の小蔭に隠し、詞またおよりも遊ばさず、夜更て何んでござります、イヤ別の用はないこれ見やお菊若い奴等が仕掛て置た柵落し、はつたりと響いたゆる開て見たれば、鼠は逃て往んだと見えて柵の内には何にもない、是でつくぐ世の中の悟り開いた、中の餌食を頼みにして油断すれば、落しに罹つてつゝ殺さるゝ、思ひ切て餌を捨て、逃て退けば其鼠が命を助かるばかりか、親鼠舅鼠女房鼠もあるであらふ、此一家一門の鼠共が悦び、別して老鼠の親鼠が心の安まりは、いかばかり嬉しからふぞ、地若若鼠の分別なしが、逃た跡で、親鼠が又落しに罹らふかと、由ない意地を立

●白鼠 白鼠は黄金の精なりといふ説あるより、福神の使者として白鼠ある家は富貴の兆といへり。それゆゑ忠實の番頭など家の柱石となるべき者を白鼠といふ。此は唯家の爲になれといふを鼠に縁を求めたるまでなり。

●鼠算川 鼠は子を産むと頻繁なるより年々歳々其の産みたる子か更に子を産み數年の後には恐るべき繁殖をなすと「塵劫記」などに見ゆ。これを俗に鼠算といふ。但しこれも鼠に縁を求めたるまでにて鼠算の意にはあらず、親の有難き深慮といふをなり。

居ふが、いかなく親鼠は老功で、落にかゝる事じやない、謂定て伯父鼠もあらふ、其巢へ屈んで、此處らさへ影を見せねば、鼠落しも音なしになつて濟む、此度の柵落しによふ懲て、夜る毎に柵走り柵走り、盃嚙つたり、親の小判咬へて盗んだり、暴れ廻る事ふつふつ止め、後には白鼠の富貴と榮えるを、親鼠が見る嬉しさ何うあらふ、痴氣鼠の狼狽鼠、此の合點が往かぬかと、地俺や此頃夜が寝られぬと、涙に聲をふくませば、如何にもく、お慈悲な鼠算用、成程私が逃しませう、チ、満足くさつと胸が開いた、此頃心に此事ばつかり、持佛へ參つても佛の顔も見えなんだ、地嬉しや今宵から、心靜に看經せうと、念佛力の後姿、サクリ

●人の父として慈にとゞまり「大聖」爲人子止於孝爲人父止於慈

見るに心ぞ遺瀨なき、地與次兵衛走出て、聲を知へのかたじけ涙、おきくは鼻の足跡を手に載いて吾妻さま、與次兵衛様、詞今のお慈悲を聞かしやつたか、早ふ此處を退く程がお心安め孝行、地淨閑様の起臥は此菊が居るからは、今迄より猶氣をつける、跡に氣遣ひ遊ばすな、お前に誰ぞ付たいが、エ、どふがなと案ずれば、これ、お菊様、それには此吾妻が居る、命を捨て、出た廓、二度び歸る心はなし、地お前さへ御了簡お供せよとあるなれば、わしや忝ない、廓へは歸らぬと、思ひ詰たる詞の末、地チ、そんなりや跡先首尾が好いサア更ぬ先にと引立れば、與次兵衛袖を打拂ひ、さうでないく、詞人の父としては慈にとゞまり、人の子と

して孝にとゞまるといふ、預り者が欠落し、先の相手が死ねれば、忽ち親は下手人に捕られ首刎らる、假へ先が無事でも、取逃したる咎めに、それ程の罪は親父様の身にかゝる、其難を厭はぬ慈悲心、親仁は親の道が立つ、與次兵衛は今日まで始終親の氣に違ひ、剩へ親を身代りに、逃て命助かり、百年千年生るとて、人交りもならねば、天地の内には住れぬ、爾お心をもどくでなく歎きをかくるが面白ふは無けれども、張此儘死なせてくれ、命を捨て一生の孝行がして死たいと、聲を上て泣きければ、これも亦たお道理と、二人も、心破りかね、泣より外の事ぞなき、淨閑内より聲を上げ、お菊く、不孝者めが落まいとい

ふそうな、エ、く情ない憐れ知らず、七十になる淨閑が、もがられたといふ外聞悪さ、人にこそ知らせね、内證手を入れ二百兩まで扱ふても、足元見て千兩でも聴ぬといふ、淺疵とは聞たれども、人の生身何うあらふかと、親の案じは如何思ふ、將棊で心を紛らせば結句傍から氣を付て、思ひ出す程、胸苦しい、宵から心粉にはたいした榊落し、量ても量られぬ、親の歎きを思ひやれ一生子でも居るまい、一度は親にもなり居らふ、胸の中が知らせたい、落るか落ちぬかはや吐せと、聲荒けても泣顔は、壁より外に漏にけり、與次兵衛涙に平伏て、詞有難いお詞ほど如何も此與次兵衛此處が立て落られぬ、眞平御免と伏沈む、爾ム、よ

いく、年寄た親を^{もち}持者は一日も親を^さ先だて、其^み身息災で年忌追善、弔^{なぐさ}ひたいと願ふぞや、^地おのれは親に弔はれ歎きが懸て見たいか、サア此相口^{あはれ}皺腹へ突込で、望みの通り死でやるぞ、南無阿彌陀佛といふ聲に申し、落ませう、待て下され親仁様と、どうと伏てぞ泣居たる、^間ム、しかと落るか、何の偽り申さうぞ、ヤレ嬉しや落付た今までの不孝皆許し、三十年の孝行を只た一度に請取た、^地死んだ婆も嬉しからう、お菊には親がある、^浄閑にはお菊がある、跡には少しも氣遣ひすな、^間連の女中があるさうな、嫌がるとも灸するさせ、酒飲せて下さるな、馬では人が頬を見る高くとも駕籠に乗れ、頼みまするとそこくに、心は千筋百

筋の、縞の財布を投出し、さらばとばかり言さして、跡は涙に咽びけり、^地與次兵衛猶も有難き、親の恩と妻の思ひ、別れの辛さにうつとりと、きぬけの如くよろくと、前後も分ず見えければ、^間これ吾妻じや合點か、あれは奥様お菊様、さらばとせめて言はんせ、^地エ、氣の弱いお人やと力をつくる我が身も、人目も深く忍ぶ夜の、いざ合駕籠と耳語て、袖打拂ふ春の霜駕籠の衆おじやと招ぎけり、^地お菊の聲もうらがれて、なふ何方に落付ても、其儘御無事の便りを待つ、泊り、の朝晩に、冷ぬ様に頼むぞや、何やら言たい事共が胸にはあれど口へ出ぬ、只御無事で息災でと、いふより外は泣ばかり、誠をいはゞ我こそは、夫を連て退

●待がつらいか別れがつらいか
當時の流行歌。

●三重の帯、帯は普通二重廻しの
ものなれば。

●わしや百まで、百まで願ひ忘
れぬといふ古語を取りしなり。

待がつらいか別れが憂か、待ちも別れもせぬ様に、親
の許した女房は、義理と情の二面、かけて思へど甲斐
もなく、牛太夫今は野末の放れ駒、昨日は吾妻に戀を乗
せ、今日は故郷の、フシ焦れ泣き、我から狂ふ秋の葉の、
亂れて袖に置もせず、フシ寝もせて露のたまぐも、待
たるよとも待身になるな親の子の、便りを凌ぐ山崎の、
妻も左こそは亂れ髪、言ふた詞が力ぞや、フシわしが馴
染は三重の帯、長い夜すがら引しめて、妬み愠氣の心
なく、預るものは半分の、主は忘れて居さんすか、過
し月見は井筒屋で、底意限なき夜と共に、踊明した面
白さ、わしや百までも忘りやせぬ、サドリ歌、忘れぬものよ
見飽ぬ君が、外八文字の道中姿、目付で殺す所體に泥

●傾城こまめにたらいが女房
れも小唄の文句。

●杜鵑じやが父に似て、杜鵑は自
ら巢を造るをなしえず、鶯の古
巢に入りて子を産むといひ傳ふる
より父に似ぬとなり。

●花車が轟く、無冠の大臣といひ
たれば、花車(女郎屋の女房)を牛
車に取り、車なれば轟くと遊手の
口喧しきとにかけたるなり。
●破ればぐわちも、破るは夢を受
けたる間にて悟ること。ぐわち
野暮のとも。即ち悟つて見れば粹も
野暮もなしといふも。

む、傾城こまめにたらいが女房、請出したらいの、フシ
底脱て、影も宿らぬ、きぬくの親を悲しみ妻を戀ひ、
心一つを二たしなに、名乗て過る、杜鵑じやが父に似
て父に似ず、子は色里に初音ふる、タ、キ冠は被ねど大
臣と、花車が轟く口舌の門、遣手が叩く禿が睡り、皆
夢の間の境涯と、破ればぐわちも無りけり、かくは
知ども柳の絲の、おどろを亂す山嵐、激しき親の諫め
の詞、妻が別れの一言葉、身に染々と戀しやと、互ひ
に手に手を取換し、フシ聲も惜まず泣居たる、地夕陽岫
に程もなく、西北に風起り、東南に向ふ空の足、梢木
の間もはらくく、小川の水音さらくく、雲の
羽袖もひらくくと、彼方へ靡き此方へ靡き、くるりく

●難波瀧　こゝの文句新町廓の形
容なり。

●夜見世を新たにお許し　「浮標」
に曰く、此廓開發の當座夜見世な
し盛計りなりしに延寶年中より正
月より十月晦日まで夜見世御教免
に霜月極月二ヶ月は春限に東西の
大門閉居たりしに其後享保年中に
霜月極月二ヶ月も御教免ありて今
は年中夜見世ありて白日をあさむ
く繁花なる景色面白し。新たに
許しは享保年中をさすなり。

●乗懸の客　旅裝束も解かず、驛
馬にて乗込みたるをいふ。

●庭で庭　げば／＼しく世辭追從
するをいふ。

るりくるく、くるりと廻りめぐるや、月は行けども
果しなき、思ひは目前親の罰、當つて碎くる男の姿、
走れば走り留れば留り、狂はぬ袖も亂れ心、命つれな
き流れの身、流れ渡りの世の中に、しばし留まる賤が
家の、軒を尋ねて三重　惱みけり

難波瀧梅に、名を取り松繁り、地紅葉の錦畫さへや夜
見世を新たにお許しと、疾しや遅しと見に廓、四筋の
町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の顔、
チクリさす潮　影のわけもよき、局々の手拭は、濡ぬ隙
こそ、フシなかりけり、地太鼓を打たて大門に、轟く馬
の高嘶き、井筒が許へ乗懸の客は八幡の難與平、威勢
美々しく飛下るれば、亭主迎ひの槌で庭、はくまい九

郎左見忘れか、調當正月には造作の上、地貴殿の世話
に難與平、以前は金銀内大臣今日參るは内證に、様子
も金もある大臣、罷通ると突と入り、誠に左様よお珍
らし、先お茶煙草と輕薄に、油載せたる燈臺も、はや
立替る蠟燭の、フシ流れの里ぞ氣散じなる、九郎左近ふ
と招き寄せ、調知らるゝ如く此正月、藤屋の太夫に貰
ふた金、直に東に芽を出して、人いためずのどか儲け、
馬の背骨も折甲斐あつて此度罷歸る處、太夫吾妻は廓
を逃出し、關を破りし科人と行方をもとめ探さるゝ由、
道中すがら承はる、恩を受け詞を番ひし此與平、捨置
ては男立ず、彼を請出し世を廣ふしてやらん、吾妻が
年期の證文あらん、此方へ貰ひたし、金に換て今宵の

●宇多の國行 大和國の刀匠、當麻の祖なり。正應年中の人。
●だんびら物 刀の重れ厚く幅の廣さしをいふ。

内に首尾する様、九郎左御差配くと、ちよつとの露もしつぼりと、家内潤ふばかりなり、おめでたい、お聞とあるからは申すに及ばずさりながら、不思議な事がござります、今日暮方に田舎めいたる浪人衆、吾妻は此處に居られずとも、手形なりとも身請がしたい、金はなけれど一腰の宇多の國行、二尺許のだんびら物、折紙ともに引換へど、奥の座敷に居られます、親方へはまだ知らさず、お前と一所に親方へ言ふて見ましよと立出る、表の騒ぎは葉屋の彦介どかくと入来る、聞コリヤ珍らしい旦那、とれたかく、果報な九郎左金儲けふなら我等に廻れ、軽いお出が身請の談合、きついかく、知た通り此春早々、

山崎の與次兵衛めに小鬚先をちよつられた、弓矢八幡堪忍せぬ氣、代官所へも訴へ親淨閑に御預け、内證から手を入れて段々と詫言する、金銀で扱へば百萬兩でも聞かぬ男、コレ見よ疵も平癒した、與次兵衛めは憎けれど、親めが心が不便さに許して遣つた其禮として目くさり金、樽代として越した、酒戻しはせぬ物ゆる、まあ受取て置たじや、吾妻めが關破りも與次兵衛が咬し、お預けの内を連れて逃た、淨閑は其崇りに、吾妻與次兵衛尋出すまで、道具諸色に封印付き厳しい閉門、聞けば與次兵衛めはのたれ死したげな、出れば其儘切る、首、仕合者じやあるまいか、さて談合は吾妻が事關破りの科人、此奴が命も助からぬ、佛性に生付たが

●福徳の三方論議

三方より身受

彦介が病じゃは、是も助けて取らせたい、先づ吾妻めが手形を請出し、跡では緩々行衛を尋ね、飯でも焚せ、すゞぎ洗濯、手足擦らせ一生を養ひ殺しにする覺悟、彦介なりやこそ斯うもいへ、相談して埒明い、コリヤ現金じやと五十兩亭主が前へ投出す、與平は始終を聞濟し、御免と襖押開き亭主く、吾妻が身請は身が先じや、金子は是ぞと持せたる、千兩包みの木地の臺、前へずつしり飾らせたり、前後の争ひなさるれば、此浪人者は一番と呼はつて座敷に出、身請の代金此一腰、三千貫の折紙と、共に投出す形格好、中身は見ねど與次兵衛が物語の治部右衛門、擬ひなしと難與平、フシ口を閉て窺ひ居る、亭主九郎左は、福徳の三方

けの相談を仕掛けたるより、福徳の三年目といふ世話につけたるなり。論議は論争といふに同じ。

●服部煙草 攝津の名産なり。攝陽群談に曰く、豊島郡服部村の田圃に作れり、茎細く葉厚く色成ふの如くにて班なり香遠く涼じ香味かうばし云々。

論議に行當り、兎角は親方了簡次第呼びにやらうか身が参らふ、それは九郎左くと、フシ獨語して駈出す、地跡は互ひの睨み合ひ彦介は手懲した、與平が顔の氣味悪く、心も心ならねども、見付は嚴い服部育ち、煙草益引寄せて煙吹出す佛頂顔、煙管ぞ迷惑灰吹を、フシ敲いて返事を待居たる、吾妻が親方勘右衛門、亭主に連て座敷に出、調様子は九郎左物語吾妻が手形を身請とは、終に廓に無い格にて、とかふのお返事申し難し、何れへ手形上ましても、此事世間へ流布あつて欠落させた跡にても、金さへ遣は濟む事と、悪い性根を吹込まれ、其處にも欠落爰にも逃た、又しても關破りと、廓の騷動親方仲間の難儀なり、此相談は成ますま

い、一旦吾妻が顔を見て、其跡では好い様にと、聞も
 敢す聞えたく、聞餘人は知らず此彦介早速吾妻を尋
 出し、地身請は俺じや詞を番ふた罷歸るとずんと立つ、
 左様はさせぬと難與平、小腕取り引擔ぎてどうと投げ、
 背骨にしつかと打跨り、聞迹足も往に足も達者に生れ
 ついた男、動かば頭拵碎く合點か、藤屋の勘右九千萬
 今の詞は聞處、吾妻が顔を一目見たらば、其座で身請
 は違ひないか、何の虚言申しませう、末の年期の少い
 吾妻、今まで金を儲けてくれる偽りも申しませぬ、ム
 、おもしろい、代官所の首尾は別條ないか、其段も此
 方より申し下せば相濟ます、珍重く、下々ども其草
 葛籠持て來い、亭主一個を開かれよ、地應と葛籠の紐

とくく、中より吾妻與次兵衛、フ正氣になつて立出
 る、地彦介は喫驚し、親方亭主も興覺め顔、治部右衛
 門は包みかね、ヤレ與次兵衛か治部じやく、無事な
 顔見て、フ嬉しやと、跡は言はずの悦び涙、與次兵衛
 も頭を下げ、何事も御免あれ、親淨閑へお詫言、詞頼
 むに及ばぬ淨閑の心入れも聞て居る、吾妻いかい苦勞
 めさつた、ナフ親方殿此一腰に引換て、地吾妻を身共
 に下されと、手をつけば、吾妻も久しい九郎左様、且
 那樣へお詫言、頼みますると泣居たる、詞與平勇んで
 彦介を取て引立て、おのれよふ聞け、此與平が江戸へ
 稼ぎの根本は、吾妻殿を請出して廓の苦患を助けんと、
 思込たる一商ひ、五百貫目に間の無い金、手間隙入ら

ず儲け蓄め、立歸る途次、與次兵衛殿にもお目にかゝり、様子は段々聞届けた、おのれを切たは此與平、與次兵衛殿に難義を見せ、金銀大分取たな、地打のめしても腹癒ねど、めで度時節じや、とつと歸れと突放せば、調ア、有難や正月も此座敷で取て投げられ、跡は切れて今日は又、殺さるゝかと思ふたが、お助けはかたじけない、地三度の敷が合ましたと、逃出るを治部右衛門、腕挫ぎて取て投げ、調おのれは何うも往なされぬ、淨閑が言譯させ、閉門御免請ねばならぬと、手はしかく縛り上げ、身請は濟だか與平殿、地いやまだ濟まぬ、金子は千兩一枚の、手形に換てと難與平、親方が前に置き、調勘右衛門頭掉り、來二月には年も

明き、身任せになる吾妻、千兩といふ金取ては人の思はく男が立たぬ、金取らずともと申たけれど、よもや左様はなされまい、跡六月をば三百兩、残りは入らぬと突戻す、與平素より氣散じ者、出来たく、手形は取た金取た、吾妻が身請濟ました、そつこで請出す三百兩、打ておけ、しやんく、ま一ツせい、しやんしやん、すつとせい、コリヤ亭主、此千兩を始めより身請に當た、一錢でも残しては本意ならず、三百兩は亭主にはすむ、コリヤ忝ない、二口合して六百兩、打ておけ、しやんく、四百兩残つて氣にかゝる、寄て祝へとばらくく、金は座敷に色かへたり、揚屋の男女別ちなく、押合ひへし合ひ拾ひ取り、皆取込んだか

めでたいく、祝ふて三度しやんくと、手拍子に口
 拍子、仕合拍子の三三九度、末は千秋萬年も、變らぬ
 妹背を重ねける

博多小女郎波枕

解題

此の淨瑠璃は小町屋惣七といふ九州通ひの商人門司が關通過の際海賊船に乗合
 せ、一たん海中へ投入れしも危く一命を拾ひ、博多に漂着して豫て馴染める柳町の
 小女郎が許に趣き、衣類商品は素より身請の金まで失ひし一伍一什を語りて、互ひ
 に其の不運を悲みしが、折しも長崎の大盡が同じ奥田屋へ遊びに來りしと聞き、小
 女郎は大盡の勇氣を見込んで無心を云ひ掛けしに、大盡は快よく承引したれば、小
 女郎は悦び禮の爲めにと惣七を大盡に引見すれば、何ぞ圖らん、大盡とは門司に
 て出會し、海賊毛剃九右衛門なるにぞ互ひに驚き、あはや再び争鬭を惹起さんとせ
 し、一刹那、毛剃が氣轉にて小女郎を身請けして惣七に與へ、惣七は情に絆され海賊
 の仲間に入り、遂に召捕るゝ事を仕組みたるものなり。其の實説は詳ならず、海賊
 とは當時の噂にて、或は密輸入をして巨利を博したる輩が事、露顯に及び處刑せら

れしものなるやも知れず。中の巻心清町惣七隠家の場は「冥途の飛脚」新口村の
 焼直しにて、孫右衛門は即ち此の作の惣左衛門なり。されど新口村ほど後世に持
 嘶されざるものは、二番煎じなる上に、彼れほど人情の至らざるものあればなるべ
 し。さはれ毛剃九右衛門といふ海賊を主人公としたるは頗る珍らしく、大賊石川
 五右衛門は加賀掾の正本にもあれば、近松も「傾城吉岡染」に作りしが、海賊は外に類
 少なし。淨瑠璃にては餘り聞えず、又趣向も近松の作としては中位の作なれど、毛
 剃九右衛門だけは、世人の注意を惹きしものと見えて、歌舞伎に仕組まれ、天年初年
 大阪にて浅尾爲十郎が演じたるを始めとし、江戸にては天明九年「千代始音頭瀬渡」
 といふ外題にて、元祖中村仲藏はじめて毛剃に扮して有名となりぬ。

●船を出しやらば云々 「若みど
 り」巻四、夜ふが舟の明、船を出
 じやらば夜ふかに出しやれ、ほか
 け見ゆればなつかしや。此の淨
 瑠璃のは下の句を、一澤解りよく
 適切に作り改へたるなり。

●門司が關 豊前國企救郡に屬す。
 今門司市の在る所。早瀬の瀬戸を
 隔て、長門の下の關に相對す。

●下の關 赤間が關又馬關ともい
 ふ。早瀬瀬戸の北岸にあり。長門
 國豊浦郡に屬す。

●西國一の大湊 下の關をさす。
 此の地西國の咽喉にして瀬戸内よ
 り西する船舶、又朝鮮釜山長崎方
 面より内地に入るものは、悉く此
 の海峽を經ざるものなく、此の所

博多小女郎波枕

近松門左衛門作

上之卷

歌 船を出しやらば夜深に出しやれ、帆影見るさへ氣
 にかよる、フシ長門の秋の夕暮は、歌に詠むてふ門司が
 關、下の關とも名に高き、西國一の大湊、北に朝鮮釜
 山海、西に長崎薩摩、唐土阿蘭陀の代物を、朝な夕
 なに引受けて、千艘出れば入船も、日に千貫目萬貫目
 小判走れば銀が飛ぶ、フシ金色世界も新やらん、地沖に
 何まつ檜垣作、十四五端の廻船に、船頭舟子は襪袍着

に船するものは下の間に寄らざるはなし、されば昔より繁華四國に冠たり。

●唐土阿蘭陀 當時我國と交通したるものは、支那と阿蘭陀のみなれば、殊に其の名を擧げたるなり。

●金色世界 金銀の集まる所なれば、金色世界と形容したるなり。

●廻船 大洋を航する大船のこと。「和漢三才圖會」に曰く、「船は海中大洋を渡る船なり、應神天皇の五年、伊豆國に命じて船を造らしむ、長さ十丈名けて唐御と曰ふ。是大船の始なり、異國渡洋船皆大船なり、耐久しく絶て渡唐のとなし、唯北國東國往來するものこれを廻船といふ、三百斛以上千五百斛に至る。

●檣垣作り 檣垣は船の兩側に組立たる垣を云。故に廻船を一に檣垣船ともいふ。

●十四五幅 帆布の大きなり。

●乗衆 船員乗客をこめていふ。

●長崎國訛り 長崎の人について聞くべき機會なかりし爲、詳には説きかたきも極れ次の如き意なるべし。

●うん達 うんはうねと同じく已れの轉訛。
●見えぬ 見えぬかの意なるべし。
●心元なばい 心元なしなり。
●心たまきりや 驚くことをたまげるといふ。併しこゝは心痛の意なるべし。
●夜さとなつて 心氣の暴進して眼の覺むるをいふ。
●身だまんじりともせぬ 自分ば心配してまんじりと夜も寝られずとなり。
●さなへ 關東訛のさなへと同じ何處さなへ行くの類。
●しやうくいて共 女郎の事なるべけれど、語源詳ならず。

●上唐人 意義詳ならず。但し小町屋惣七をさしたるなれば、上方を意味し唐人は貿易商即ち所謂唐物商人のことか、或は海賊仲

て、足踏伸す梶枕、四五人の乗衆共、櫓の上につつく、そよと波音船影に、心を付る蚤取眼、物案じ顔も頬づいたる、中に頭の毛剃九右衛門、生れは長崎國訛、阿コリヤうん達、また市五郎三藏が船は見えいろ、心元なばい、心たまきりや夜さどく成て、身だまんじり共せない、首尾よからうば筑前さなへ此船廻し、柳町のしやうくいて共請出して、上方さなへ突走る、表の間借切た上唐人、船頭が馴染、筑前まで乗せなけりやならぬといふ、しおふせにや筑前へは行かぬ船、門出よかく、よか便聞ふばい、表の乗衆呼ふでわたい咄どもして紛らさん、地あつと應へて平左衛門、呼に下るれば其跡は、鬼とも組へき男共、あん

べら取て敷かすやら、茶出た唐茶摘み込む、注出す色は薄けれど、頭を頭と敬ひし、禮義ぞ仲間の、フン花香なる、地表の乗衆小町屋惣七、生得慇懃都育ち、呼れて櫓に割膝し、船頭馴染に押付ての便船、御訪ねなくとも御挨拶申す筈、無禮御免と手を突けば、ア、堅いく、同船致し一つ釜の食事食るは一門同前、サアお手上げられ、此五人は我們が仲間、他事無ふ咄明す中、近付になつてお咄なされ、斯う申す某は長崎者、九右衛門と申てそつといたいた唐商賣、是は同國彌平次と申す仁、次は上方小倉屋傳右難波屋仁左、其許呼に參つたは、阿波の徳島平左衛門と申して髮月代致さる、船中の事缺き心置ずとお頼みなされ、して其許

● 問の符談なるべし。
 ● あんべら 南洋諸國に産する一種の席にして、貝多羅の葉を堅に細く裂き、箕形しに編みたるもの。そつといたいた唐商賣 密輸入商のもの。

● おんども 俺共の訛り、鹿兒島にてはおいどん。

● ばん 關東詞のから上方詞のじやなどに同じ。

● 薩摩 薩摩の東北高地に鎮座ある大社なり。

は何處何方、我等も生國長崎、悴の時分親に連れて生れ所を引越し京住居、父が名は小町屋惣左衛門、同名惣七と申す者、賣買の爲筑前へは毎年の折上り、どなたも船中平くわい御免、地よにお近付もとめしと禮義仕舞へば膝崩れ、詞直せば寢腹這ひはや千年の馴染程、心解たる朝霜の、フン、奥底もなく成にける、地九右衛門顔色打解て、船中の淋しさ物語程伽になる物はない、おんどもが二十七の年、薩摩者と喧嘩した咄、嘘じやなかばん聞つしやれ、九月の七日九日は氏神殿の祭、本踊いろ唐子踊いろ、見事なことばん、本興善町といふところで、石五器に一二杯、肝の束ねへ諸白をひつかけた薩摩二歳、太り男であつたばん、諏訪へ踊見が

● 赤鯛 刀の赤く錆びたるを赤鯛といふ。小錆がくさのは詳ならず朱錆乎、なする 産土

● コリヤン コリヤンなるべし

い行く行違ひに、中が赤鯛の小錆がくさの、おんどもが脇腹さなへ當るが最期、引摺んで壁へ腕摺ふと思ふて、小尻を逆手にやつくり、それはく見事な事であつたがのふ、他國者に投られては國へ歸つても成敗死ぬる命は何處でも一ツと、二尺八寸引拔た、コリヤンほたゆるなど、又引擔いで投たがの、角のある溝石で、くさ頭の願骨が粉微塵に打破れた、ヲ、船では破れたといふは忌々しい、頭のさらが走つたく、血が走るいろ、涙が出るいろ、頭抱えてやといどにかろわれ、小宿さなへ往んだがの、今で思へばむさうらしげに、そがいにせでも大事なかたん、上方衆は氣がよがけん、こがいな事は、地あるまいと、仕形まじりの高

咄、フシ皆安閑と聞居たる、詞サア京のお客お咄なされ、次第く、に所望せん、上方は色所、定めて深い譯がある、地お咄あれと口々に乗すれば乗つてさればく、
 親惣左衛門吟味厳しく、京大坂ではびたひらな我物で我儘ならず、毎年の筑前通ひ幸ひに柳町の小女郎とは、抑より互ひにのぼり、是非當年は請出して、女房に持るゝ合點持つ約束と、半分聞てア、仰るな聞くまでない、我等も博多へ参る者此一座五人が、小女郎殿の身請の幫間、大盡くわつとおはづみと、毛剃が起て膝立れば、よふく身請の大盡様、こりや誰が大盡ぞ、小女郎様の大盡と一座がはらりと取廻し、座興も過れば勃として、蹴るか但し侮るかど、心ぐるく

●小倉口 小倉は豊前の城市にて門司に隣り、其方面よりする水路をいふ。

喘たぐる胸を押えて、エヘンく、今朝から風引頭痛致す、跡の咄は後刻く、どなたも是にと挨拶し、思ひ悩みつ立煩らひ、フシやうく下へ這下るゝ、地身請する程内證が暖かて、風引たとはどこやら足らぬ和郎そふなと、悪口苦口小倉口より、波押切て来る早船、此船目當の一文字、眞黒になつて、フシ漕付たり、地九右衛門始め立騒ぎ、詞ヤア三藏市五郎、首尾はく、近年の拍子よく、荷物受取金渡し、あつちも機嫌、こつちも仕合、荷敷手形に引合せ渡しませうと聞嬉しさ、船頭起よ、地舟子も来い荷物請取れまつかせと、心も勇む虎の皮百五枚、仕合すれば氣の薬、海老出の人参五箱で三十斤、仕損ずるは手廻しの緞子七櫃二百本、

●磨香 亞西亞中部の山に棲む群
といふ、獸より出る香料の名なり。
此の獸の陰部の上の皮の内に膜を
ありて、香料はこゝに蓄へらるゝ
より、四十粒といふなり。

船から船へ移しの麝香四十臍、
船はせなんだが、けも無い事はしや嶋ろが十五箱、
去ながら、むりやうの繻子が十二丸、世話入れた漆七
桶、運の強いは一昨日の夜の月影、照の好い鼈甲百斤、
地先斯什濟し歸りました、天地の恵み明星程な珊瑚樹
が八十粒、手形の表これまで渡しました、
來夏船の割符、迎船にお出なされとの言傳と、
ば取て押戴き、手柄高名休み召され、二人の衆にも酒
おませ、
御酒も祝ふて下されうと、皆本、
九右衛門相仕等招き寄せ、小聲になつて何れも見ずや、
荷物を船へ積む折柄、乗合の京の奴、かきだつより顔

●相仕 仲間のも。

●かきだつ 船の檣垣の坪より覗
きなるをいふ。

●まつかせこんだ 任せておけと
香込んだを早口にいふ。

差出し、合點往かぬと思ふ面付、生て置たら頬げた叩
き、後日の難儀見る様な、斬殺しては大事の門出、血
を見るが忌々しい、縊殺して海へ投込み込め、地下人奴
もありさうな、油断するな、まつかせ込んだ、皆の衆
ぬかるな心得たと、鉢巻襷尻褰げ、腕骨試し力試し、
合の細切を小楯にて、時分を窺へ、サア来いと、櫓下
るゝも忍び足、所は沖津汐風の、外は一味の船の中間
人もなし見る人もなし、人は知らじと思ふこそ、
句身の上知らずなり、
上へ躍り上るを追續いて、彌平次傳右衛門、二人が中
に取捲て、宙に指上げこれわいなと、投り込む波の哀
れや下人、
底の水屑となりける、
地サア一人は仕

(784)

●麝香 亞西亞中部の山に棲む麝といふ、獸より出る香料の名なり。此の獸の陰部の上の皮の内に膜ありて、香料はこゝに蓄へらるゝより、四十觔といふなり。

●相仕 仲間のこと。
●ひきだつ 船の檣垣の埒より覗きなるをいふ。

船から船へ移しの麝香四十觔、聞なんと遠見に見付られはせなんだが、けも無い事はしや嶋ろが十五箱、去ながら、むりやうの繻子が十二丸、世話入れた漆七桶、運の強いは一昨日の夜の月影、照の好い鼈甲百斤、地先斯仕濟し歸りました、天地の恵み明星程な珊瑚樹が八十粒、手形の表これまで渡しました、此一通は來夏船の割符、迎船にお出なされとの言傳と、地渡せば取て押戴き、手柄高名休み召され、二人の衆にも酒おませ、聞お目出度いお頭様、御褒美をしつかりと、地御酒も祝ふて下されうと、皆本一船に乗移る、九右衛門相仕等招き寄せ、小聲になつて何れも見ずや、荷物を船へ積む折柄、乗合の京の奴、かきだつより顔

(785)

●まつかせこんだ 任せておけと香込んだを早口にいふ。

差出し、合點往かぬと思ふ面付、生て置たら煩げた叩き、後日の難儀見る様な、斬殺しては大事の門出、血を見るが忌々しい、縊殺して海へ投込み込め、地下人奴もありさうな、油断するな、まつかせ込んだ、皆の衆ぬかるな心得たと、鉢巻襷尻褰げ、腕骨試し力試し、合の舳切を小楯にて、時分を窺へ、サア来いと、櫓下るゝも忍び足、所は沖津汐風の、外は一味の船の中間人もなし見る人もなし、人は知らじと思ふこそ、フン結句身の上知らずなり、地下人が喚くまつかせ聲、櫓の上へ躍り上るを追續いて、彌平次傳右衛門、二人が中に取捲て、宙に指上げこれわいなと、投り込む波の哀れや下人、フン底の水屑となりける、地サア一人は仕

●悪魚毒蛇の口
時の喙。

危険を免れたる

てやつた、惣七奴が見えぬ探せく、地コリヤく
 爰に傳馬込にといふ聲に、惣七水楫押取て狂ひ出で、
 間ヤア海賊奴等、様子一々見届けた、地死ぬるとも一
 人死なふかとそつぼうめつぼう打立る、後へ廻つて市
 五郎、隙を窺ひ攫み付ば取て投げ、投げられながら足
 首を體と取り、眞逆様にずでんどう、だうと響く波音
 にまくりかけ、大勢かよつてだんぼらば、邊りも知れ
 ぬ海の中、眞逆様に打込んで、間サア仕済した目出度
 いと笑ふ聲、地惣七はつと心付、見れば傳馬の中々に、
 物音せば悪からんと、纜解て櫓を押立て、悪魚毒蛇の
 口よりも遁れ難き場を遁れ、一反ばかり漕出でく、
 ナ、皆々骨折りく、間惣七これからお禮申す、地此

いひきにてく、すいちやえんち
 や云々「唐人踊」の唱歌なり。
 「松の海路」巻四に出たり。いきに
 てくすいちやえんちやすいちや
 すいふいちやういさらこわいめさ
 はんやささうわくうちたるま
 たひさらきいさらこわめさはん
 やささうわくうちたるま

返報は重ねてと、心急げばるいさつさ、るいや運は傳
 馬にあり、押や櫓腕の續くだけ、命限りと、三三「いひ
 きにてく、すいちやえんちや、すはひすふいてう、
 ひいたらこはいみさいはんや、さんそうわうわうく、
 間ア、措やく、なふよくいち殿、其拍子では踊られ
 ぬ、錢太鼓の三味線、知らずば知らぬと頭からいふた
 がよい、長崎の伊左衛門様とは違ふたもの、もう踊ら
 ぬぞや、それで藝が上るものか、三味線弾き止むまで、
 サアく踊りやといひければ、なんぼでも踊らぬ、三
 味線止て、こなたも石碓か蹴引かしやれ、なんじや蹴
 引け、盲目と思ひ侮づるな、目二ツ持た己等に、いで
 物見せんと三味線振上げ、フン聲をあてどに追廻はす、

●身より

亭主奥田屋四郎左衛門臺所から立出、聞こりや何んじや、よくいち嗜め大人氣ない、禿共も跪いたら遣手に告て叱らすぞ、ヤイ重之丞、今日は小女郎様の母御の十三年忌、追善の爲身よりして、小女郎様は奥の間に經念佛してござるでないか、附て居る太夫様の親御の事、線香でも立ふと思ふ氣はなふて、盲目相手に何事じゃ、いへく私共二人錢太鼓稽古して居たりや、よくいちの三味線で邪魔しやりんす、其錢太鼓が猶悪い、地物の稽古も時がある奥へ往て附て居よ、二人ながらとつとゝ往け、聞こりやよくいち、表の二階に宰府の源様が來て御座る見舞ふたか、地やつちや一角せしめんと、人の巾着當にして、貰はぬ先の締結り、フシ宰府

●やつちや一角せしめん
 や詳ならず、一角せしめんは一分
 賣つて來らんとなり。

の客へと取に行く、百年經ねど衰へは、今身の上に小町屋惣七、下の關の大難に命一ツを拾ひ得て、長博多へ焦れ着しかど、身に附く物は手足より、外には何の當もなく、知邊の方へも身を耻て、問音信は絶しかど、小女郎が情忘られず、小チクリ戀しき風の吹立る、フシ柳町には來れども、金銀なければ肩すぼり、おのれと心奥田屋の、門を覗いて退て見つ、案じ佇み居る風情、内には乞食と尖り聲、聞殘物は遣て仕舞ふた通りや、フシ通りやつちかうどなり、地扱は早物貰ひと人目には見ゆるよな、成果たりしなしたり、此風俗で小女郎に逢度いといふたりとも聽入れじ、聞入れてから小女郎が耻、思ひ切た顔見まいと立歸る後より、チ、まぢや

●
手を振ると。

●
手を振ると。

くと重之丞、聞コレ今日は太夫様の心ざしの日に當り、施しの一錢を差出しながら、ハア此乞食はお絹布を着て居ると、顔差視いて、ヤアお前は京の惣七様なふ太夫様惣七様の乞食になつてごんしたと、呼はればかいふつて、逃るを往なさぬ待んせと、帯に縋つて留むる間に、家内も驚き駈出る、小女郎は表に走出、笠かなぐつてほんにさうじや、嬉しや能ふ來て下んした、此有様は如何ぞいのと、何の様子も聞ぬ先から泣涙、聞コレ四郎左様、奥へ連れまして咄度ふござんす、如何にもくお馴染の惣七様、御用あらば御意なされと、亭主が情に打連れて、キリ入より早く縋付き、戀し床しは言はいでも知れた一人が中、此お姿は親御

様の御勤氣でも受ての事か、様子が無ふては叶はぬ筈、お前の心に此小女郎はまだ傾城じやと思ふてか、此身は廓に居るとても、心はとふから女夫ぞや、肩裙結び手を引て、人の戸口に縋るとも、交した詞違やせぬ、聞今日は母様の十三年の命日、お前に逢ふたは親達か、あの世から手を取ての引合せ、女房まめに暮したかと、一口言ふことならぬかと、眞實見ゆる涙の玉、男もはらく聲頭ひ、聞小女郎息災にあつたの、一年振に顔を見て、よい姿も見せよい事も聞する事か、聞てたも、毎年の如く諸色を仕込で下る所、下の關にて海賊船に乗合せ、家來は眼前海へ沈めさせ、我命さへほうくの仕合にて此所まで逃延び、商賣の荷物衣類は其儘船

に棄置く、肌に一錢貯へなければ、二度に二つの下着を賣て、今日迄の露の命を繋ぎしぞや、此地の下には受出し、女房に持んとの深き契約、其金銀も人手に渡し、詞を違へ望みを叶へぬ我本意なさより、そなたが恨みん心の不便さに、言譯やら顔見にやら、見苦しき身も耻ず、爰へ来て面目もなき物語と、フン涙に聲を曇らせり、地よふ打明て下んした、實は湧き物お命さへあるなれば、私や嬉しふござんする、私が心でお前一人は如何なとなる、おいとしゃ肌寒かる、お顔がたんと細つたと、着ながら上着ふはと着せ、フン抱締てこそ泣居たる、地表に血氣の下男、大盡様の御來臨と鳴り喚く、ヤレ人が来る此方へと、男の手を取り身を寄

●らしや 羅紗の。さるせ、すためん、かるさい、らんけん、何れも異國渡り反物の名なり。

●ちくら 支那と日本の潮界を袖羅沖といふより、どちらにも附かぬをちくらといふ。こゝも頭は日本風は唐の襟界」と前にいへり。

●手くら 詳ならず。

●一夜検校 金の力で官位を賤ひ俄に檢校となるをいふ。「天子集」に「けふは早や衣を着かへ香を焼き」といふに「たしなみ深き一夜検校」といふ附句あり。毛刺等が不義の富貴に、衣服を着飾りて誇れるをいふ。

て、チクリ奥の一間に入りける、地客は過つる海賊共眞先立て毛刺九右衛門、彌平次傳右仁左平左市五三藏サアござれと、引摺る雪駄の金にあかした衣裳付、各々さるせらしやすためん、かるさいらんけん繻子天鷲絨、下着上着も渡り物、頭は日本、胴は唐との襟界ひちくら手くらの一夜検校、終に目馴ぬ出立ばえ、奥田屋に搖ぎ込み、坐敷に居流れ毛刺が諸色請込んで、差配らしげに勿體顔、調亭主薄々見知りがあらう、廓の縦横十文字、昨日まで端せりした我々、俄富限に見らるゝ通り、今日からは大夫狂ひ、来る道すがら見て置た一文字屋の江口、丸屋の勝山同じ家の薄雲、油屋操和泉屋小倉、車屋の大磯、此六人を請出して、是に

お吸物(吸物)は、

居らるゝ人々の物言伽、明日迄待ぬ今日の中に首尾させい、地これは殿いと四郎左衛門飛で出るをやれ待て、亭主が留守では興が無い、云付て呼に遣れ、畏つたと硯引寄せ書付て、呼にやる足走書、早ふ往て来いお吸物、大座敷も一ツにせい、子供泣すな、女房共に薬飲せ、阿や何じや花車が煩ふか、それ挾箱持て来い、油断召されな人參用て養生が第一、持合せたはづまふと、蓋押開き一包、一ツ選の大人參、一斤餘り投出し、四郎左子持は幾人ある、娘が一人男が二人ござります、チ、よい子供、小さけれども此珊瑚樹について秤目が八匁、二人の子に提さしやれ、お娘が着る物に有合せた緞子三本縹子五本、此緋縮緬裏によか

●無間の鐘 佐夜中山は遠江國佐野郡に屬す、無間鐘は同所觀音寺の鐘なり、此の鐘を撞けば、死後に無間地獄に墜つれども、現世にては必ず無量の財貨を得といふ傳説あり。

●長者經 「長者經」枕本一冊、紙數十八枚、寛永四年卯年開版の者を見しに、昔しかまた屋、なほ屋和泉屋とて三人の長者あり、其の里に賢き童のありけるが、かまた屋長者の許に行き、有徳になる道を尋ね、かまた屋、これに長者になるべき秘訣を問る。近松は此の長者經に擬へて、次の作文をなしたるべけれど、文句は全く近松の創意にて、此の長者經とは別ものなり

らう、地綿の代まで相添て、投出すほり出す頂くに、亭主が腕ぞ草臥ける、四郎左衛門恂として、阿お禮より先づ膽が潰るゝ、何時の間に此様な 地大富限者にお成なされたと、問詰られて間に合詞、阿きついかく、江戸商ひ間緩く、佐夜の中山無間の鐘、撞當た福々長者去ながら、此鐘撞には行法がむづかしい、長者經とて、寺に傳はる縁起の目録聞せ度いと打笑へば、亭主横手をはたと打ち、扱有難いお經、我等も些とあやかる様に、其お經授け下されと、せがみ立てられ、地然らば聴聞仕れと何やら知れぬ懷帳、殊勝らしげに取出し、吝い事の嘘八百、長者經と擬へ、聲張上て讀にけり

長者經

● 蓋 此は由來の意。
 ● 例 釋迦如來をさす。
 ● 頭陀 僧の旅行して寒苦と戦ひ修行するを頭陀の行といふ。釋宗の行脚、時宗の遊行はこれに同じ。

● 諸行無常 諸行は萬物、無常は常住ならざるを。一切の萬象は變化流轉一瞬間も常住無しといふ。「涅槃經」に、諸行無常なり是生滅の法なり生滅々々これに寂滅爲集なりと。

地そも此、無間の鐘の濫觴を尋ねれば、天竺の大金持、月蓋と名に高き、さつても吝嗇い、フシ長者あり、佛に示さん爲、朝なくの頭陀の行、鉢ちくも空耳潰し、うんともすんとも言れぬ佛の方便にて、光はさながら一歩小判の山吹色、金と見るより吝ん坊長者、佛の箔を剥さんと、欲から入る手の内を釋迦の手管に仕懸られ、惜や悲しや南無阿彌陀佛、此撞鐘を建立す、されば穢ない長者が心、末世の今に留つて、先づ初夜の鐘を撞く時は、諸行無常に惜やくと響くなり、後夜の鐘を撞く時は是生滅法な事と、フシ響くなり、晨朝

● 寂滅いらざる 寂滅爲樂をもちりたるなり。
 ● 百八煩惱 眼耳鼻舌身意の六根色聲香味用法の六塵に對する各々好惡平三種不同あるより十八煩惱を成し、六根六塵に對する好惡平の三種、苦受樂受、不苦不樂受を起して又十八煩惱を成し三十六種となり更に過去未來現世に約して百八煩惱を成すと。
 ● 無間の釜いり 無間地獄を通俗にいひなしたり。無間地獄八熱の一として阿鼻といふ。有罪の衆生、常に墜して苦を受くるに間歇無きより、無間と號くと。
 ● 奈良茶粥 大和奈良にては、昔より朝食に茶粥を食する習慣あり、儉約の例に擧げたるなり。
 ● 精進潔齋 専心道に進むを精進といひ身を淨めものいみするを潔齋といふ。精進の人は美食肉食せざる故に肉食せざるを俗に、精進といふ。こゝも又通俗の意味にて儉約の一例なり。
 ● 晝夜に只た二度の節季 食事も晝夜ただ二度に儉約すべしと。食事を俗に收穫などといへば、節季ともいへり。又、年中行事一

の響きは、生滅多に入用知れず、寂滅いらざる鐘の聲、一文呑みの百八煩惱此鐘の音を聞く人は、現世にては分限の金持、未來にては無間の釜入、斯る不思議の撞鐘を、おろそかに、フシ撞へからず、扱行法の次第といつば、絹も紬も着る事ならず、木綿蒲團も榮耀の至り、荒蕪引て起臥の、身は慣はしよ奈良茶粥、精進潔齋菜入らず、晝夜に只た二度の節季は尻からげ、往來の中をちよこく走り、ちよこくくぬけて、落てある物、フシ置くな、轉ても土を掘んで起るは七ツ起、質を取らずば金貸すな、欲しい物は買ぬが徳、月夜に夜鍋はせぬが損、稼に追付貧はなし、芥子を干にも割木の焚様、必ず灰を取る事勿れ、捨る物は何に

●轉ても土を掘じ 倒るゝ處に土を掘むといふ古語あり、轉んでも唯は起きぬといふに同じ。
 ●七ツ起 朝早く起ると。世話に早起き三兩 始末は五兩などいふ。
 ●月夜に夜鍋 月に釜を抜くといふ。但語あれば、それを夜鍋にもぢりたるなり。
 ●鍋の煤烟では細眉作り 以下の文程妙。

●福徳縁起 福徳の由来なり。

も無い、鍋の煤烟では細眉作り、しへのきれば瘻痺の妙薬、水なき井戸は梯子の入物、鼠の尾まで錐の鞘、差せ干せ傘、人に貸すな鯉魚節、播粉木播鉢砥石石臼薬研まで、目にこそ見えね貸す度に、フシ減ずに戻る例しはなし、さて其外は愛嬌附合、始末貯蓄へ讀書算盤秤目の、上を見れば方圖がない、我より下を手本として、右の條々守るに於ては、微塵積て山となり、長者の金言疑ひなし、無間の鐘とは名ばかりにて、現世も未來も背かねば、自然と榮ふる福徳縁起、聽聞あれと語りけり、

地 いやともおうとも申されぬ、世界中が此通りに身持たら、私等が商賣は、とりおくだ屋とぞ笑ひける、

地座敷の隔ては障子一重、彼方の騒ぎひしくと小女郎が身に應へ、ア、有る所にはあるものかな、五人六人の太夫達請出さう、何やろ彼やろ是やろと、地金銀財寶は塵埃、父様や母様の貧な暮しを見た時も、能はぬ金が欲しいとは夢程も思はずして、今日といふ今日、彼方の身請が羨しく、私や金が欲う成ました、仕合の好い人を妬むは道で、フシなけれども、どんな男ぞ顔見たやと、障子の隙より差覗き、ヤア彼や私が近付、まさかの時は心便になりましよと、力を付けてくれた人、金借て來ませうと進み出るを引留め、近付は内證人も聞く、女郎の口から金貸てと身の恥を思はずか、恥を包むも事に依る唯た今いふた事、來月は筑波の客が

私を請出すと、出口の佐渡屋と薄約束、お前の下りを月よ星よと待受たりや此様な首尾、人手へ渡れば私や生ては居ぬぞや、金借たとて返せば恥にもならぬ事、地私次第と振切れば、やるも涙行く涙、隠して座敷へ繰歩み毛刺が側へ、居ればバツト衣の香の、四邊の人はずろくと、顔を見合す荒男、俄に嗜む衣紋付、フン鬼が花見る風情なり、開毛刺様久しいな、私やこなさんへ無心に來たこちらに、大きなもめが出來て、急に身請をして貰はねば、成らぬ首尾になつたけれど肝腎の物が無い、地かねくの詞もある、此方の才覺調ふまで、私が身請のなる程、金貸して下んせ頼みやするといひければ、開日本一の粹様、金貸て下んせと

は言憎い事、二言と聞かぬ、お前の用なら千兩でも萬兩でも、コリヤ亭主、小女郎様も一所に身請行き度い所へやりませする、地金は毛刺が飲込んだ、女郎方の見ゆる内、小女郎様借ました、フン飲や歌へと騒立、地ア、待んせくあの障子の彼方に今言ふた、大事の男が來て居さんす、連て來て禮言はせませす程に、開毛刺さん、詞違へて下さんすなえ、男冥利商内冥利虚言ござらぬ、地お供なされの、詞にいそく立歸る、太夫様お出と呼はる聲、門から色の攔取、勝山江口大磯に、寄せ來る波の大騒ぎ、座敷に一ばい入込んで、薄雲さん操さん小倉さん、三人はお跡からそりやこそおてきと色めいて、毛刺が連ども現を抜き、フン顔に餘念はな

●おんと 種畜にておとなしきと
なるべし。

かりけり、間九右衛門聲懸け、コレく亭主、爰には
ちつと用がある、よね様方口の座敷へ、跡から見ゆる
太夫方も爰へは無用、地おつと此方へ來給へと、亭主
に連て立廻る、フシ女郎も田舎はおんとなり、地出るも
如何、出ぬも如何、小女郎に引れて惣七は、障子押明
け立出る顔と顔、互に見合せヤア、間小女郎が馴染の
男、今思ひ出した其方が事な、地ヲ、おのれ等に逢た
かつた、ヤア人は無いか此奴らは下の關の、跡言せじ
と毛剃が連共大聲上げ、頬けた聞すな打殺せと、蹴立
る盃爛鍋の、轉て疊にたぶくく、濡れから起つた
喧嘩そうな、おほ大事にはなるまいかと上する女子下男、
うろつく顔も蒼白で、フシ生た心地はなかりけり、地毛

剃一寸動きもせず、間ア、騒ぐまいく、此九右衛門
が思案がある、彌兵次残らず女郎衆の側へ行け、跡は
おれが受取た、いやそうでない、我々が相手になる、
親父一人心元ない、ヤア此毛剃引取る男と思ふか、わ
いらが居ればやかましい、疾とへ行けと睨めつくれば、
そんなら行ます、地親仁次第と打連て、ナクリ表の座敷
へ出にける、地小女郎は前後知らず、惣七に引添ふて
二人の目元に氣を配る、間コレ若い人物七殿、此中の
事一言いふても物が無いぞ仰るな、此方共の商賣言は
ずとも見られた通、何事も身が大事と思ふから、此中
の事恠えさしやれ、いやと云しやりや事になる、ヤ恠
えさしやれ、小女郎を此方へ請出すとこなたの詞が反

故になり、小女郎も可愛やこなたくと心中を立通し、
 女郎の口から金貸せとまで恥を捨ての心ざし、無にし
 て遣らしやるはそりやいかい邪慳、悪い事は言ふまい、
 こちの仲間へ這入らしやれ、小女郎も此方に添はせ、
 五十貫目や百貫目の金は取替て、親御の息がかゝらず
 とも物の見事に取立ましよ、仲間が多くなるほど此方
 は損なれど、運を力にする商賣、運弱ふては埒明ぬ、
 此中の様な場を遁れた命冥加な運強いこなた、九右衛
 門が力になる人と見て、コレ手を下る、地仲間へ入て
 下されと詞は下げても居やい腰、否といはゞ切かけん
 ず、フシ気色、地面に見え透いたり、地惣七も手詰の返
 事、仲間へ入れば家の大事命の仇、否といへば小女郎

を、人手に渡すのみならず、命までとらるゝ、何れの
 道にも死ぬる命、國法をや慎むべき、小女郎にや添ふ
 べきと、二つの心身一つに、定めかねてぞ居たりける、
 調申しこれ惣七さん、あなたの商賣は知らぬが、駕籠
 に乗る人駕籠昇く人、品は變れど行路は同じ事、金も
 取替え何から何まで世話やかうとの心入れ、お身に悪
 い事でもなし、あつといふて仲間になり、早ふ私と起
 臥を一所にせうとは思さぬか、お爲にならぬ筋ならば、
 いやと返事を言切らしやんせ、こなさんに添れねば生
 て居る小女郎じゃない、女房にしなと殺しなと、否か
 應かゞ生死の、大事の返辭でござんする、急ぐ事はな
 いぞやと、懷中に手を差入れ、チ、此汗はいと、鼻紙

●血酒 俠客などが喉を結ぶ時、
盃の中に血を滴し、互ひにこれを
飲み盃を立つ。

有たけ拭捨る、濡て破るゝ人の身の、フン嗜み難き道ぞ
かし、惣七はつと打首肯き、調得心致した、只今より
仲間になりお差圖は背くまい、承り及ぶ長崎には物の
堅めに血酒飲むとや、偽でない惣七が心底、腕引で
盟を見せんと、片肌脱げばア、見えましたく、調人
にこそよれ何んのこなたに偽りあらう、更めて孟事、
地皆来いくと、フシ呼集め、調小女郎どの嬉しかろ、
亭主身請の惣代金何程ぞ、書付これにと差出す、押取
てさらりと讀み、小女郎殿とも七人の身請代金千四百
五十兩な、端たがあつてやかましい、五十兩は亭主に
遣る、千五百兩これ請取れと、地一兩二兩の七百五十
兩方目出度い仲間入り、皆兄弟より他事なふなされ、

●おんらが在所はの
歌なるべし。

當時の子守

歌へく、歌「おんらが在所はの、奥山のでうちの
でんぐりく栗の木、木の根を枕に轉寝、此小女郎
戀する山家の、品物でなまいだぶつ帯解いて是、ござ
れ、抱て轉び寝、面白いと、フシ樂みける、地町の夜
番あはたゞしく、調人をあやめ法を背いた科人が、此
廓へ入込んだと上の町から客改め、一人も客衆外へ出
る事なりませぬ、地捕手の衆がハヤ爰へと言捨てよ、
亭主を連て駈出る、動ぜぬ自慢の九右衛門始め、六七
人がぐんにやりく、俄に顔色茹菜の様にしほくと、
コリヤ堪らぬどうぞ、舟へ行く道は外にないか、金の
出るには構はぬ、土の底へは這入られず、天へ昇る梯
子はないか、隠簀隠笠があら欲しやと、我身一つを片

●世並のわるい疱瘡に二番湯

評

付、兼て頼ひ居る、地惣七小女郎が手を取て、門口に氣を配り、片唾を飲んで居る所に、内か隣かぐわたくく、捕たくくと喚く聲、なふ悲しやと一同に、腰を脱して魂の、身に添ふたるはなかりける、亭主四郎左立歸り、ア、氣遣ひないく、此博多の殿町で、飛脚殺して金竊た奴、かへ隣の揚屋で捕へ、代官所へ引ました、此方の事ではないくと、いへば一どに、顔を見合せ、ア、有難いやレ忝い、あつたら肝を潰したと、溜息ほつとついたるは、世並の悪い疱瘡に二番湯かけし如くなり、前長居は無益惣七殿、京へ上ろサアく、皆々往ふく、地女郎衆は駕籠で舟場まで、一口いふても八人が、亭主さらばと立出る、七人一度

●市立く云々 此の所京都心清町小町惣七が隠家の場にて、惣七が留へ父惣左衛門、來り、惣七の察財を片端から賣飛はす所なり

●飛で時鳥 飛ぶといふより時鳥と引掛けるほぞんかつたの時鳥と

に身請とは、聞も及ばぬ大々盡、細お一人く顔に書付張付度い、地なふ磔刑と聞くもぞゝがみいやく、お手柄のお名が顯れう、顯れうは猶氣懸り、何にもいふなと出て行く、男自慢は七人の、鼻に顯れ 三重

中之巻

市たて、地屋財家財のくずし賣捨賣に相場なし、戸棚箆筒塗長持、燭臺椀家具吸物椀、組板佛檀何や狩野の三福對、表具計りも百貫に編笠提灯、南京の八匁から九匁を、鐙に見込の中脇差、鍋も釜も煤り鑊子も、疊も上て荒道具、簀の子の竹の小間道具、有とある物塵も灰も、猫も直打ににやん匁、五分と、フン飛んで時

いふ句を下の「守本尊懸視」に利りせたり。

鳥 守本尊懸視、鐵漿壺も罷出、金になれとや口々に
 付て耀るく耀市に、町内騒ぎ 三番「やかまし、
 地主菱屋嘉右衛門興覺め顔にて駈來り、調主に小町
 屋惣七といふ西國商人、夫婦連で十日計りの逗留で大
 阪へ下る、跡にはあの婆只つた一人、留守の事はお家
 主頼みますと言置き、今日か明日は戻られう、お姥も
 お姥、留守居とは何の爲これ親父、先わごりよは誰な
 れば、よい年をして京の町の作法知らぬか、町所へも
 斷りなく、人の留守に踏込み疊まで賣拂ひ、捌きはな
 んとする事、此心清町一町のたばねをする年寄、則ち
 家主うつかりと見てよいか、地姥も一所に詮議する、
 隣が町の會所、サアく歩びやと、喚けども姥は涙に

顔傾け、親惣左衛門手を束ね、調お家主と申しお年寄
 御尤もく、我等は惣七めが父、小町屋惣左衛門と申
 して生國は長崎二十ヶ年此方上方居住致せども、資本
 なければ商賣も抄取らず、地山科邊に必逼致し、古郷
 力に惣七めが西國通ひいたせども、仕合したとの便り
 もなく、どうか斯うかと思ひ暮す折節、端しく人の
 取沙汰小町屋の惣七は、西國で大きに儲け、博多の傾
 城請出し、心清町に檜木作節なしの見世を張り、風體
 は無人の暮しても内證の榮耀は千貫持と、噂する程心
 得難く、地夜前始めて尋参り、沙汰に違はぬ内の諸道
 具、代物に喫驚いたし、調姥めに問ふても詳しき様子
 は知らぬと申す、各々も商人我等も七十八まで商ひで

(762)

● 胴返し 胴の周囲も長さも同じ寸尺のものを胴返しといふ。但し胴返しの利といへば、百兩の資本にて百兩の利を得るもにて、折返しといふに同じ。

● 口合 隠人のこ。

食た者、胴返しの利なればとて、儲けるには方圖がある、聞僅か十兩十五兩儲けてさへ、吹聴して説ばせた正直孝行な惣七め、一人の親に隠すからは、碌な銀とは存ぜぬ、後に募つてお町内お家主へも難義をかけた、地其身も人並の死をせぬ奴、今斯う致すも親の慈悲、邪の銀は身につかぬと申す事、骨身にしてみても知らせ、憂しほ踏んで正道の商ひに取付く心つけん爲、俄に道具屋へ走るやら、古鐵買を呼ぶやら、心急いてお町内へ無禮、お家主へ付届け申さぬは、眞平く幾重にもお詫言、貸屋札出して下さりませ、お家は明けますくばかりにて、フシ下るはきんか頭なり、聞御親父の言分承り届けた去ながら、惣七殿には口合家請もあ

(763)

● 知らぬ火 肥前天草の海上に毎年八朔の晩に無数の烽火の現はるゝを知らぬ火といふ。これを筑紫の枕詞に用ゆ。

● 閑古鳥 淋しきもの喩。

る仁、後日の念に御親父の一札、留守居のうばも判を取る、地サア會所へ同道いざござれと門の戸はたと引立て、天の岩戸にあらねども、爰にも紙の貸屋札、残らぬ千早古道具、フシ明屋とこそなりにけれ、聞博多小女郎は町風に、地馴し夫の惣七が、地あぶなき分限波の上何百里とも知らぬ火の、心づくしを過し身は、京大阪は隣にて、フシ夫婦打連れ歸りしが、地暖簾はずし大戸をしめて、墨黒に貸屋札こりや如何じや、ハツハツといふより詞なく、潜り押明け入たるに、湯水を飲まん鍋釜も、疊もあげて閑古鳥、泣にも泣れず興さめ果、フシ口を明たる計りなり、地惣七心は足の裏の症にこたゆる小笹原、簀の子にどうと座しければ、地小女

郎せいてこれ申し、調緩りとして居さんす所であるま
 い、懇にする家主殿、内儀さんと私とも親しうて、先
 度下る時にも、土産に大坂の三芳下駄頼むぞやおし
 やんした、地それ程他事ない中で譯の悪い仕方、私や
 屹度詰開かうと、走出るを是々々、調女子のいふて濟
 め事、貸屋といふは名計り、破れ家を手前普請ねだも
 追付張る筈で、板も買置く、屋賃といへば二ヶ月三ヶ
 月先へは遣れど滞ほらず、町義付合愚も無き身、地家
 財まで取られうばが行衛も知れぬは、どうでも下の沙
 汰でなし、方々に預置し金銀荷物に就ての事か、何れ
 の道でも命ある中、一夜も爰では明されず、エ、是非
 に及ばぬ惣七が運も是迄、調こりや女子共男共、見る

通りの仕合力にかなはぬ、主従の縁もこれ限り、大阪
 の遣ひ餘り、一步こま金少々あり、地三人寄て分て取
 れ暇を遣る、さらばく金更紗の財布共に投出せば、
 お笑止とも何ともお辭義申すもお慮外、又の御縁と口
 上を、捻つて見れば手にさわる、一步小判も八九兩、
 はつと寝耳に水臭き、半季一季の名残なく、チクリ連立
 表に出にけり、地物音隣へ聞ゆれば、うばが會所を脱
 て来て、なふおとましやく、調昨日の晩から親父様
 がお出なされ、中々でもない事、淺ましい欲心に海賊
 の仲間に入り、道に違ふた金儲けを結構な事と思ひ居
 る、木の空に引張らるゝは今の事、菜大根肩に置ても
 正道な儲けは三文でも、身に付と言聞せた詞反故にし